サービス・ラーニング研究シリーズ２
Service-Learning Studies Series No.2

人はなぜサービスをするのか

Why Do People Engage in Service?

国際基督教大学
International Christian University

サービス・ラーニング・センター
Service Learning Center

サービス・ラーニング研究シリーズ2
Service-Learning Studies Series No.2

人はなぜサービスをするのか
Why Do People Engage in Service?

第Ⅱ部
サービス・ラーニング事例集
Case Studies in Service-Learning

国際基督教大学　サービス・ラーニング・センター
Service Learning Center, International Christian University

はじめに

サービス・ラーニングが目指すものは、学生が教室で学んだ知識を自己目的化することなく、また自分のキャリアのためだけに用いるのでもなく、他者への奉仕や社会の改善のために生かすことができるよう、個人の知性・徳性・感受性・身体性をバランスよく高めることにある、といえます。それは、ICU の建学以来の教育理念である「神と人に奉仕する人材の育成」とも重なり、また近年の本学のモットーである「行動するリベラル・アーツ」の実践志向にも結びついています。

2005 年 4 月に発行した『サービス・ラーニング入門』＜サービス・ラーニング研究シリーズ１＞に続き、今回はシリーズの 2 冊目として、『人はなぜサービスをするのか』を企画しました。いずれも上述の目的に沿って編んだもので、それ自体で完結したテキストからはほど遠い冊子ですが、『入門』が事前準備のための知識を集めたものだとしますと、今回は、どちらかというとサービス活動の合間に、あるいは事後の「ふり返り」（reflection）のために役立つことを念頭において編集しました。

その意味で、もしこの冊子を読んでサービス活動の動機をあれこれ詮索するあまり、偽善ではないか、自己中心的に過ぎないか、などと考え込んでしまい、実践へのブレーキになってしまうとすると、それは私たちの本位ではありません。動機は他者への善意であれ、異文化への好奇心であれ、実体験への素朴な願望であれ、サービスを実践すること自体に価値があるのだという堅い信念に立ち、実際のサービス活動に従事しつつ、静かなふり返りのひと時に、「なぜ自分はサービスをするのか」と問いかけ、また「なぜ人はサービスをするのか」について深く考えてもらいたく思っています。

「人はなぜサービスをするのか」という問いは、一見ナイーブで観念的な設問に思われるかもしれませんが、諸分野横断的なテーマを内包すると同時に、実践的な契機を含んでいます。人間と動物の違い、人間が人間であるための諸条件、生活の宗教的次元と世俗的次元の関連、近現代史の中での社会関係の変容、子どもの社会化と教育の意義など、生物学・哲学・宗教学・社会学・教育学・心理学等の諸領域にまたがる論点が、この問いには含まれています。また、例えば殉職によって一家の大黒柱を亡くした家族にとってこの問いは切実かもしれず、逆に他者の献身によって自分が救われたと思う人にとって、サービスの動機はミステリアスでしょう。なぜ日本人は“サービス残業”をやめないのかといった素朴な疑問も、この国ではなぜボランティア精神が依然微弱なのかという問いの関連で、一考に値します。何より、人生に“意味”を求める若者にとって、この問いを考えること

は職業選択や生活設計へのヒントになるだろうと思います。

私たち教師もまた、「人はなぜサービスをするのか」と自問せずにはいられません。教育は“サービス業”に分類されますが、それとは別の意味で、どこかに奉仕と、時には犠牲の構えさえ求められ、研究時間との関係でそのことが重荷に感じられる場合もなくはないのです。客観的には小さな犠牲でも、それをあえて引き受け、その選択を支えているものは、「人は（なぜかはわからないが）サービスをする動物（ホモ・サービス）だ」という確信なのだと思います。思えば、あの人、かの先人、何よりもイエスその人を起点として、世界は“Service & Sacrifice”の精神を生きた人々によって支えられてきました。人類の文化とはサービスの文化だといっても過言ではないでしょう。

さてこの冊子は、前半に「人はなぜサービスをするのか」をテーマとして書かれた論文とエッセーをまとめ、後半に学生のサービス活動に基づく「ケース・スタディ」を加えました。ケースには、「人はなぜサービスをするのか」という問いかけを超えて、現場で直面する多様な論点が含まれており、準備・実践・ふり返りの各段階での有益なヒントが得られるよう工夫してあります。

なお、ICU の国際サービス・ラーニングは、2005 年度文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム」に採択されました。2006 年夏には、新しい実験としてフィリピンのシリマン大学を拠点に、国際チームによる多様なサービス活動を予定しています。今後さらに“経験の言語化”を進め、いわゆる“座学”と“実践”を媒介する手法として、“ケースから学ぶ”ための教材を充実していきたいと考えています。

プログラムも教材の内容も今なお開発途上にありますが、この冊子に示された思索と経験の分析が、皆さんの中で実践への確かな跳躍台となることを期待しています。

2006 年 4 月

サービス・ラーニング・センター長

西 尾　隆

目 次

はじめに …… 1
執筆者紹介 …… 5

第Ⅰ部　人はなぜサービスをするのか

Why Do People Engage in Service?

１．人はなぜサービスをするのか …… 9
山本　和

２．Why Do People Engage in Service? …… 16
Florence McCarthy

３．サービスの動機と実践をめぐる二、三の考察
－ 人はなぜサービスをするのか？ － …… 18
西尾　隆

４．若者は価値を求める …… 33
佐藤　豊

５．人はなぜサービスをするか …… 40
森本　あんり

６．ボランティア
－ なぜ人はすすんで他者につくすのか？ － …… 47
村上　むつ子

７．Service 活動の勧め …… 56
田坂　興亜

８．Concern for Others or Self-Concern?:
Psychological Perspectives on
Basic Motives for Serving Others …… 59
Toshiaki Sasao

第Ⅱ部　サービス・ラーニング事例集

Case Studies in Service-Learning

９．Writing Service-Learning Cases:
Why and How? …… 67
Kastuhiko Mori

１１．What dawned on me? …… 79
Ran Yagasa

１２．Muli bwanji? …… 95
Tomohiro Nagasaki

執筆者紹介（敬称略、執筆順）

山本 和 (YAMAMOTO, Kano)

国際基督教大学（ICU）総務理事

サービス・ラーニング・センター顧問（前センター長）

ICU 社会科学科卒、Columbia University (M.A. in Economics)

ICU 国際関係学科教授、同学科長、同客員教授などを経て現職

専攻：国際金融、国際経済、開発協力

Florence McCarthy

ICU サービス・ラーニング・センター特別顧問

University of California, Berkley (B.A.), Michigan State University (Ph.D)

西尾 隆 (NISHIO, Takashi)

ICU サービス・ラーニング・センター長、社会科学科教授

ICU 社会科学科卒、同大学院行政学研究科博士後期課程修了（学術博士）

専攻：行政学・地方自治論

佐藤 豊 (SATO, Yutaka)

ICU 語学科教授

ICU 社会科学科卒、University of Hawaii (M.A., Ph.D)

専攻：日本語学

森本 あんり (MORIMOTO, Anri)

ICU 人文科学科教授

ICU 人文科学科卒、東京神学大学（神学修士）、Princeton Theological Seminary (Ph.D)

専攻：宗教学

村上 むつ子 (MURAKAMI, Mutsuko)

ICU サービス・ラーニング・センター　プログラム・コーディネーター

同大学サービス・ラーニング非常勤講師

上智大学非常勤講師

上智大学卒、Columbia University The Graduate School of Journalism (MSJ)

専攻：ジャーナリズム、コミュニケーション

田坂 興亜 (TASAKA, Koa)

アジア学院理事長（前校長）、元 ICU 理学科教授

東京工業大学卒、State University of New York, Stony Brook (Ph.D)

専攻：化学

笹尾 敏明 (SASAO, Toshiaki)

ICU 教育学科教授

University of Washington (B.S., M. Ed.), University of Southern California (Ph.D),

University of California, Los Angeles (Postdoc),

University of Illinois at Chicago (Postdoc)

専攻：社会心理学・コミュニティ心理学

毛利 勝彦 (MORI, Katsuhiko)

ICU 国際関係学科準教授

横浜市立大学卒、国際大学大学院（国際学修士）、Carleton University (Ph.D)

専攻：国際関係論

矢笠 嵐 (YAGASA, Ran)

ICU 国際関係学科 4 年、国際関係論専攻

長崎 智裕 (NAGASAKI, Tomohiro)

ICU 国際関係学科 3 年、国際関係論専攻

第Ⅰ部

人はなぜサービスをするのか
Why Do People Engage in Service?

1. 人はなぜサービスをするのか

山本　和

「人はなぜサービス（奉仕活動）をするのか。」--- 改めて問われるとなかなか奥深い課題である。サービスとは、他者のため、社会のために自発的に行動を起こし実行することであり（註1）、いまやどの社会でも当然の前提のように論じられているが、なぜサービスをやるのかという問いにまともに答える説明は意外と少ない。以下には、それを考える手がかりとして、いくつかの身近な言葉をとりあげてみたい。

１　アグネス・チャンの講演から

ごく最近、アグネス・チャンさんに、彼女のユニセフにおける奉仕活動について、「みんな地球に生きるひと」というテーマで講演をお願いした。わたしが所属する「東京ワイズメンズクラブ創立７５周年記念会」の記念講演のことである。日本ユニセフ協会大使として、厳しい環境の中に生きる子どもたちと接した様々な経験を語って、会場を埋め尽くした聴衆に大きな感銘を与えたが、そのなかに次のような言葉があった。大使に就任する以前に NGO 活動で、貧しいエチオピアを訪れた時のことだ。栄養失調で痩せこけ、皮膚に血がにじむなど明らかに病気に苦しむ子どもたちが、アグネスの唄に合わせて痩せた体でリズムをとって踊りだしてくれたときの感動を彼女はこう語った（註2）。

「もうその姿がかわいくて、かわいくて、もう死ぬほどいとしかったですね。ああ、もうこれはもし病気がうつったらしょうがない。もしここで死んだら運命だと思って、子どもたちを抱え上げてほおずりしたりキスしたり、本当の触れ合いができました。わあっと抱きしめて、ああ、もうこの子と死んでもかまわんと思った瞬間、ほおーつ、わたし生きているのだなと実感しました。あんな幸せな瞬間はなかったですね。

そうなんですよ。救われたのはわたしの方。わたしは弱い人間でした。最初に子どもたちがやって来たとき、わたしは一瞬逃げた。きっとわたしは怖かったのです。自分が病気になるかもしれない、死ぬかもしれないと思ったと思う。でも、そのわたしを変えてくれたのは､決して子どもたちのかわいそうな姿じゃない｡むしろ可愛いらしい姿なんですね。同じ子どもでも、どこを見るかだと思うの。人間が悲惨なものを見るには限度があるかもしれない。でも美しいものを受け止めるという心は無限だと思った。可愛い、助けてあげたいと思うと自分の知らない力まで湧いてくるものなのだなあと。あれから怖くないんですよ、わたし。よく危険な国へ行って怖くないかと聞かれるんですよ。でもなぜか怖くないんです。子どもも住んでいるのだから怖いことないなあって。どうにもならない子どもたちがいっぱい居るのですよ。だから行かなきゃならないって思うんですね。」

「わたしは差別をしない、違いを認め合うのが平和の基本だと思います。多くの子どもたちに接して、彼らの愛から恵みを受けた。やさしくされたひとは強くなる。青少年の育成のなかでとても大事なのは、自分がひとのために何ができるかを見つけて、自発的にやりたいと気づくことだと思います。」

２　曾野綾子の言葉から

曾野綾子さんは、近著『「受ける」よりは「与える」ほうが幸いである』のなかで次のように述べている（註３）。

「人は受けている時には、一瞬は満足するが、次の瞬間にはもう不満が残る。もっと多く、もっといいものをもらうことを期待するからだ。しかし自分が人に与える側に立つ時、ほんの少しでも楽しくなる。相手が喜び、感謝し、幸福になれば、それでこちらはさらに満たされる。」

新約聖書の使徒言行録 20 章 35 節には「あなたがたもこのように働いて弱いものを助けるように、また、主イエスご自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」とある。

３　湯浅八郎の生活信条から

国際基督教大学の初代学長を務めた湯浅八郎先生は、自らの生活信条として、次のとおり書き残している（註４）。

「生きることは　愛すること
愛することは　理解すること
理解することは　赦すこと
赦すことは　赦されること
赦されることは　救われること
八郎」

繰り返し読むと、なかなか味わい深い言葉だと思う。その読み方はいろいろあると思うが、なぜサービスをやるのかという課題に関して考えるとき、わたしは、最後の言葉をまた最初に繋げて、「愛することは　救われること　救われることは　生きること」と読みたいと思う。

４　聖書が説くサービスの重要性

サービスとは隣人愛を行動で示すことであり、聖書は行動を伴わない愛はありえない、ないし本物でないことを強調している。いくつか代表的な聖書の言葉を挙げてみよう。（註５）

ヤコブの手紙　2:14~17

わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行きなさい．温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。

ヨハネの手紙一　4: 20~21
「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが神から受けた掟です。

マルコによる福音書　10:45
「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

ヨハネによる福音書　13:14~15
「ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」

ルカによる福音書　10:25~28, 36~37
すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい。』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」
（続いて「善いサマリア人」の話が述べられる　29~35---略）
「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

キリスト教信仰のあるべき姿として、ここで大切なことは、「心を尽くし、精神を尽くし、

思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」ということが先ず中心にあって、それを前提にしてわたしたちを愛して下さっている神を愛し、礼拝する心をもって、神が等しく愛される他の人間、つまり隣人を愛することが求められているということである。聖書は、神を愛することなしに、隣人を愛せよと言っているのではない。

朝鮮出身の神学者 David Kwan-sun Suh は次のようにまとめているが、ここにも隣人に仕える行為の大切さが示されている。(註6)

“To believe in Jesus as a Christian is to serve Jesus by serving people. Christians believe that Jesus Christ is with us when we serve people and work for the poor, the sick, and the oppressed. Christian faith does not stop in the recitation of prayers and Bible passages. Christian faith grows and become strong in action on behalf of others, especially those in need.”

５　世界の主要宗教が説くサービスの重要性

サービスをすること、弱者を思いやり彼らのために救いの手を差し伸べる何らかの行動を行うことは、キリスト教のみならず、世界の主要な宗教においても、人間のなすべき業として奨励され、肯定されていると言えそうである。

国際サービス・ラーニングを提唱してきた International Partnership for Service-Learning and Leadership (IPSL) は、90 年代後半以降数年にわたりフィリピンの Trinity College においてモデルプログラムを実施した。7 月から 8 月にかけてアジア各国から 30 名ほどの学生を集めて６週間ほど同大学の寮で生活を共にしながら、大学周辺のサービス機関に学生たちを派遣してサービス活動を体験させると同時に、午前中クラスにおいて二つの勉強をさせた。一つは学生たちが従事するサービスの必要性をよりよく理解させることを目的とした「フィリピンにおける現代社会問題」であったが、もう一つは「アジアの主要な宗教：サービスの神学」という注目すべきコースであった。その内容は、主要な宗教それぞれについて、専門家を招いて、それぞれの宗教において「サービスを行うことはどう理解されているか」を語ってもらうというものであった。

私は、二つ目の主要な宗教における「サービスの神学」というコースはどんな内容なのだろうかと、大変興味をもった。そのコースに派遣する学生たちに、大変面白そうなコースだからよく聞いてきて内容を教えてほしいなどと頼んだが、所詮そう簡単なテーマでないだけに、彼らの報告は痒いところに手が届かない感を免れなかった。しかし、2004 年になって、同じアイデアを専門の研究者に論じさせた「サービスのヴィジョン」(“Visions of Service”) という本が IPSL から出版された (Linda A. Chisholm 編) (註7)。ヒンズー教、仏教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という世界の５大宗教が、「サービスをするということをどう捉えているか」ということに焦点をおいた論文集であり、フィリピンのモデ

ルプログラムで取り上げたテーマに改めて焦点を当てた、大変興味深いものである。その道の研究者にサービスがどう捉えられているかを語ってもらい、またサービスに関連するそれぞれの宗教の教えの原典が示される構成になっている。

各宗教の思想を簡単に要約するには奥が深すぎ、またすべきでもないと思うが、是非関心をもつ人たちと、この本を読む勉強会をしてみたいと思う。よく理解できたら翻訳する価値があるのではないかと思う。ただ、この本を一読して言えることは、どの宗教においても、サービスをすることについては、真理に適うことと肯定的に位置づけられていることである。

６　国際社会が説く「人間価値」の普遍性

国連を中心とする国際社会は、人間はこの世界に生まれたからには尊厳を持って生きる権利を認められるべき存在である、という考え方を育んできた。国連憲章や世界人権宣言に盛り込まれた考え方は、その代表的なものである。「人間価値」を普遍的なものとして尊重して行こうという考え方は、とくに冷戦終了後は一段と具体的に認識されるようになった。子どもは生まれたからには、保護を受け、栄養を与えられ、基礎教育を差別なく受ける権利を有するとする「子どもの権利条約」はその一つである。持続的開発の推進、男女の差別の縮小・排除、環境問題への世界的取り組みの必要、貧困削減への国際協力の枠組みの構築、「人間の安全保障」の推進など相互に関連する一連の価値規範の設定は、国連のリーダーシップのもとで民間の市民団体・NPO なども参加して、「人間価値のグローバル化」現象が進んでいるといってよいだろう（註８）。これらを集大成するかたちで 2000 年に合意された国連による「ミレニアム開発目標（MDGs）」は、極度の貧困と飢餓の撲滅、普遍的初等教育の達成、ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上、幼児死亡率の削減、妊産婦の健康の改善、HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延防止、環境の持続性の確保、開発のためのグローバル・パートナーシップの推進を、具体的目標を掲げて 2015 年までに達成しようと各国首脳が公約したものである。サービス・ラーニングを行う場合の、サービス活動の大半が、これらの人間価値の実現を目標としたものである。

国連を主体に推進されてきたこれらの「人間価値」は、固有の宗教や文化とはあえて結びつけずに、それらを超えて世界的に通用する普遍的な価値として認識されている。それは、国際的合意形成のためには、極力宗教や文化を超えても成り立つ価値観と位置づける必要があるからである。しかし、人間の内面的な認識として「人はなぜサービスをするのか」を問う時に、宗教や文化が重要な役割を持つことを否定するものでは全くない。むしろ国際社会の問題に関わる中で、なぜそれが必要であり、自分としてやりがいを見いだせるかを問う時には、自らの内面を探求する作業が不可欠なのである。キリスト者の立場からみると、それは、まず神を崇め愛する気持ちが基本にあって、それが隣人へのサービスに反映されるべきものなのである。国際社会における真の平和構築のためには人間価値の

実現を目指しつつも、文化的多様性を認めあって共生することが必要とされる所以であろう。

７　「人はなぜサービスをするのか」

以上に考えてきたことを、ごく平易な言葉でまとめるならば、

『人がサービスをするのは、
人間として、生きる喜びを見いだすことができる、
人間として、愛する喜びを見いだすことができる、
人間として、生きる力と目標を与えられる、
からである。』

と要約できるのではないだろうか。

註

（註１）「サービス」（service）という言葉は、「礼拝」（worship service）、経済学の「財」に対する「サービス」（製造業に対するサービス産業のサービス）、公僕（public service）など多様な意味に使用されるが、ここで「人はなぜサービスをするのか」という場合のサービスは、人や社会、善きことのために奉仕活動を行うことを意味する。「サービス・ラーニング」（Service Learning）でいう「サービス」は人のため社会のために奉仕活動を行うことに自ら参加することであり、ここで問うている「人はなぜサービスをするのか」という場合のサービスと同義である。

（註２）2006 年 2 月 25 日、東京ワイズメンズクラブ創立 75 周年記念会が湯島の東京ガーデンパレスで開催され、その記念講演のスピーカーとしてアグネス・チャンさんが『みんな地球に生きるひと–明日を担う子どもたちのために』と題して、（財）日本ユニセフ協会大使として約１時間の講演を行い、260 名の満席の聴衆を魅了した。ここに掲載した彼女の言葉は、その講演会の録音テープから、関連部分を極力忠実に再現したものである。アグネス・チャンは、歌手、エッセイスト、教育学博士として幅広く活躍、1998 年から日本ユニセフ協会大使として途上国の子どもの現状を視察し、広くマスコミや講演会などを通じてアピールしている。

（註３）曾野綾子　『「受ける」よりは「与える」ほうが幸いである』　大和書房　2005 年　P.77

（註４）武田清子　『湯浅八郎と二十世紀』　教文館　2005 年　P.185

（註５）ここに引用した「聖書」の言葉は「新共同訳」による。

（註６）David Kwan-san Suh は朝鮮出身の神学者。Ewha Women's University, Union Theological Seminary, Drew University Theological School などで教授を努めたあと、2001 年に United Board for Christian Higher Education が設立した Asian Christian Higher Education Institute の Executive Director などを務める。ここでの引用は同氏執筆の後掲書 "Visions of Service" の "Christianity"の章から。P.282

（註７）Linda A. Chisholm, Editor, “Visions of Service”, The International Partnership for Service-Learning and Leadership, 2004, 466pp.

（註８）筆者（山本）は、「人間価値」のグローバル化という概念を「市場経済価値」のグローバル化と対比して把握することの重要性をいろいろな機会に指摘してきた。例えば、“ The Globalization and Higher Education” (United Board Taskforce Report 2006)、『グロバリゼーションの捉え方とサービス・ラーニングの意義』「サービス・ラーニング入門」国際基督教大学 2005 などを参照。

2. Why Do People Engage in Service?

Florence E. McCarthy

There are countless reasons people may have to participate in some kind of service activity. Of course, it is necessary to define service. “Service” as used here, means activity that a person undertakes with the idea of doing something for others, of volunteering time and energy in the pursuit of agendas set by other people. Service in this sense is not for personal gain like obtaining money or fame. One can do this kind of service in a variety of settings, ranging from government offices to non-governmental organizations. At least 3 reasons for doing service come to mind. They are: 1) doing activities that promises to be engaging and using the skills and talents one has; 2) doing service as a way of learning about a topic, organization, or process, and 3) undertaking tasks with the hope that acquiring experience and skills may eventually lead to some other activity that involves remuneration or reward.

In the United States, a survey of business executives in 2003 indicated that about 70 percent of them were engaged in volunteer or service activities, for no pay, or reward. The reason the executives gave for being engaged in this way was that their main employment offered little opportunity for them to use the skills and expertise they had developed in the course of their careers. Executives found their current duties minimized or excluded the management, organizational, programmatic or accounting skills they had developed over time and which they most enjoyed doing. They had become policy-makers for example, or responsible for vision and large-scale ideas, but were no longer involved in the day-to-day rumble-tumble of business or government. Therefore these executives volunteered to work with not-for-profit organizations, civic groups, government agencies or social programs in ways that would allow them to use their practical skills and talents in the everyday affairs of these organizations.

Many people also volunteer or engage in public service activity in order to feel useful and productive. Retirees, for example, often find they have time on their hands, or want to continue contributing to society but in ways different from their professions or main occupational interest. In these instances, many people are not expecting to gain much by way of financial gain, but do expect to continue to make a difference. In some regards, people in this situation may be similar to people in the next example, as they may undertake new activities as a way of learning something new, like becoming a museum docent, or volunteer naturalist in a park program. However, in this case, the volunteers are not attempting to change anything, but rather are just interested in learning new subject matter.

In the second instance, some people undertake service activities as a way of gaining knowledge about a topic, process or organization. This is a more focused undertaking than the first example, and may be attached to an interest in actively pursuing an issue or topic. For

example, a person may think a social welfare organization is flawed, bureaucratic, and unwieldy. However, without real experience and knowledge about what goes on, it is difficult to pursue an agenda to change the organization. Or as another example, a teacher interested in developing service opportunities for high schools students in local hospitals in a large metropolitan city, volunteered to do a study of hospitals as a way of learning about the hospital environment and the possibilities of developing student placements with them. In this case, the hospitals gained the information they were seeking from the study, and the teacher had a clearer idea about how service could be built into a hospital program.

In the third example, a person may undertake to volunteer in an organization or agency as a way of gaining experience and knowledge that may help them gain a "real job" at a later time. Again there may be no expectation of immediate gain from the organization in which one is volunteering, but the view is to the long-term. In this sense, the immediate activities undertaken still constitute service regardless of the long term intent. As an example, a degree program in Animal Science at an Australian University has an "industry service learning" program for their students. Students enrolled in this degree program undertake to do service in an agency or organization of the "industry" as part of their degree requirements. The "industry" is defined as organizations that use Animal Science majors, and range from governmental, civic, to non-profit organizations. Students are not to receive money for their service; they are to arrange service for about 30 days in an agency or organization that is relevant to Animal Science majors, and they are to prepare a case study of the organization in which they did their service for their grade. As part of their assessment, students are to present their case studies to their organizations at the end of the semester. This is an example of academic service learning, and it is not defined as work experience, or an internship. It is not expected that students will receive job offers from the organizations such as zoos, nature parks, or animal rescue missions in which they did their service. However, it is thought that having the experience and knowledge about how these organizations run would give the students an advantage when looking for employment upon finishing their degrees.

All of these examples illustrate different degrees of intention or motivation on the part of the person undertaking service. Whatever the reasons students, executives or retirees may have for doing service, the fact is they are contributing to others in the process of achieving whatever interest they may have. It is very difficult to have the "perfect" motivation for serving others. Moreover, it would be difficult to ever get people to agree on what the perfect motivation would be; and it would be even more difficult to find people who only have that perfect motivation to do service. The reality is that people do service for many complex reasons. What is so intriguing about service is that people most often gain much more than they give while serving others, and regardless of the motivations that promoted their engagement with service, it is this unexpected gain that lingers with people as the benefit of service. Until people have experienced it for themselves, they can't be told of what the outcomes of service are; they can only be invited to participate.

３．サービスの動機と実践をめぐる二、三の考察
－ 人はなぜサービスをするのか？ －

西 尾　隆

はじめに

人はなぜサービスをするのだろうか。無償の隣人愛からか、見返りを期待してか、責任感からか。あるいは単にせずにはおれないからか、それともサービスとは学習するものなのだろうか。本章では、人がサービスをする動機や背景、実践の契機について、（1）「人間の多様性と個人の変化」、（2）「自己実現と自己犠牲」、および（3）「心と行い」（思いと行動）、という角度から考えてみたい。その際、議論があまり思弁的に流れないよう具体例を引き、実践のヒントになるよう心がけたいと思う。おそらく議論の前提として、「サービスとは何か」についての共通理解が必要となるが、ここでは、「個人的な損得勘定を超えて、他者のために何らかの行為を自発的に行うこと」としておきたい。[1)]

さて、「人はなぜサービスをするのか」とは、ごく単純な設問に思われるが、これを腑分けすると、少なくとも相互により合わさった次のような論点が見出される。

まず、一般論から離れて、「なぜあの人はあれほどサービスをするのだろうか」（逆にこの人はなぜ全くしないのだろうか）といった素朴な疑問がある。奉仕の心と実践をめぐってまず印象づけられるのは、個人差の大きさである。聖フランチェスコやマザー・テレサの行為と内なる信仰心は、人間のもちうる善の極みを示す一方、私たちの周囲にはあらゆる利他的な行為を拒否する“自己中人間”も少なくない。聖人の対極には、奉仕とは無縁の犯罪者たちもいる。また、俗にいう“気前のいい人”と“ケチな人”という二分法は、サービスにおいても日常的に観察される。多くの人は聖人と犯罪者の中間に位置し、また1 人の人間は状況により、また成長の過程でその間を移行する。サービスをめぐる人間の多様性、および個人の変化が第 1 の論点である。

次に、サービスをする人の動機や心理に注目すると、人は自分の自由・時間・財産・悦楽を犠牲にして他者に奉仕していると見える場合もあれば、どんなサービスも結局は自分自身のためにやっていると語る人も少なくない。利他的・自己犠牲的な側面と、利己的・自己実現的な側面とは、いわば重なり合う 2 つの円であり、必ずしも二律背反の関係に立つわけではない。ただ、人がサービスをする動機について、最終的に利他性と利己性のどちらに重きを置くかの違いは、サービスの本質にもかかわってくる。強く陰影をつけると、自己犠牲と自己実現の相克が第 2 の論点である。

第 3 に、「サービスを“する”」（“do” service）という行為に注目すると、背景として、一方では、人は善意や隣人愛に満ちていても常にサービスを実践するわけではない、という認識があり、他方では、人がサービスを行っていてもそれは善意とはいえない動機にしばしばつき動かされている、という観察もある。要するに、心と行いのズレ、思いと行動との間の緊張が問題となっている。これが第 3 の論点である。

むろん、論点は以上に尽きるものではない。「人」（種としてのヒト）は他の動物とどう違うのかという疑問は、おそらく最も基本的な設問ではないかと思う。ヒトの子どもは母親への依存性が著しく高く（しばらくは全く動けず、自分では乳さえ吸えない）、またその状態が長期間（社会的意味では 10 年以上）続く。ヒトの子育ては利他的なサービスそのものともいえ、すべての母親には自己保存本能を超えた献身が見られる。動物の子育ては“本能”の領域だが、人間の場合はどう理解すべきだろうか。「サービス」という言葉と観念をもつ点こそ、人間の最大の差異というべきだろうか。生物学や動物行動学などの立場からも論考を加えたいところだが、今回は実現しなかった。[2)]

１．人間の多様性と個人の変化

人はなぜサービスをするのか。まず、サービス活動への意志をめぐる個人差は大きい。人間は多様で、明らかにタイプがあり、また 1 人の人間でも状況依存的に、かつ人格的発達とともに、奉仕への姿勢は変化する。やや極端な例から考えてみたい。

スコットランド人アーネスト・ゴードン（Ernest Gordon）による、タイの日本軍クワイ河俘虜収容所の体験記『クワイ河収容所』（原著 *Through the Valley of the Kwai*, 1962）には、収容所での極限に近い生活の中で、なお隣人への奉仕を忘れなかった英国兵士のエピソードが記されており、感動的である。[3)]

その日も泰麺鉄道建設現場では、長く過酷な労働が終わろうとしていた。ところが、日本の俘虜監視兵が工具の確認でシャベルが 1 本足らないと宣言し、誰かが売るために盗んだのだと主張し始めた。彼はブロークン英語で憤怒の声を張り上げ、盗んだ者は一歩前に出て罰を受けろと命令した。だが誰ひとり動かず、監視兵は「皆殺しだ！」（“All die! All die!”）と金切声で叫び、銃を構えた。その時、一人のアガーイル隊員が前に進み出て、直立不動の姿勢をとり、穏やかな声で「自分がやりました」（“I did it”）と言った。

監視兵は怒りを一気に爆発させ、その俘虜を蹴とばし、殴り、顔に鮮血が流れた。それでもうめき声一つ上げない落ち着きが監視兵の憤激を駆りたて、銃を頭上に高くもち上げ、銃尻を俘虜の頭蓋骨に振り下ろした。彼の身体はぐにゃりと地に倒れ、それきり動かなかった。すでに死んでいるにもかかわらず、監視兵は何度も銃を振り下ろし、疲れ果てたときにやっと手を止めたのである。

収容所の門衛の所でも検査があり、そこで用具はもう一度勘定された。ところが、1 本足りないはずのシャベルは、全部揃っていたのである。

ゴードンによれば、この話は収容所で繰り返し語られ、伝えられ、同僚のために自ら犠牲になった俘虜への賞賛の念の方が、日本の監視兵への憎悪を超えて強かったという。また、収容所内の空気に変化が生まれ、徐々に希望の光が漂い出し、皆の利己心が弱まり、それに代わってより創造的な生き方を生み出す機会ができた。さらに、「寛大な心持ちというものは感染力を持つということがわかった」とも記している。

英国兵士の多くがクリスチャンだったとはいえ、こうした自己犠牲的な人物はむろん例外的であろう。だが、皆殺しになりかけた仲間の命を救うために、自ら命を差し出す行為は集団にとって唯一可能な手段だったともいえる。あの瞬間、クリスチャンとして神の命令を聞いたのかもしれない。理由はともかく、この一兵士の存在で、周囲の人々の奉仕への意志に変化が生じたことは重要である。ゴードンが描く収容所内の劇的な変化は、1 人の英雄的兵士の自己犠牲的精神が伝播し、集団を変えうるという事実を示している。

日本にも、明治 30 年頃の実話として次のような事件を、民俗学者で当時法制局参事官の職にあった柳田国男が残している。[4)]

ひどく不景気であった年に、西美濃の山の中で炭を焼く 50 歳ほどの男が、マサカリで子どもを二人切り殺したことがあった。妻はとうに死に、13 歳の男の子があり、どういう事情か同じ年齢の小娘をもらって炭焼き小屋で一緒に育てていた。だが炭は売れず、里に降りても一合の米も手に入らず、その日も空手で帰り、飢えている子どもの顔を見るのがつらさに小屋の奥で昼寝をしてしまった。

季節は秋で、小屋の入り口いっぱいに夕日がさしていた。2 人の子どもが日当たりの処にしゃがんでしきりに何かしているので、傍に行ってみると一生懸命に大きな斧を磨いていた。そして、「おとう、これで私たちを殺してくれ」と言ったという。そして入り口の材木を枕にして 2 人仰向けに寝た。それを見ると男はくらくらとして、前後の考えもなく 2 人の首を打ち落としてしまった。それで男は死ぬこともできず、やがて捕らえられて牢に入れられたという。

この事件について、評論家の小林秀雄は、「柳田さんが深く心を動かされたのは、子供等の行為に違いあるまいが、この行為は、一体何を語っているのだろう」と問いかけ、次のようにコメントしている。

「炭焼きの子供等の行為は、確信に満ちた、断乎たるものであって、子供染みた気紛れなど何処にも現れてはいない。それでいて、緊張した風もなければ、気負った様子も見せていない。純真に、率直に、われ知らずおこなっているような、その趣が私達を驚かす。‥‥みんなと一緒に生活して行く為には、まず俺達が死ぬのが自然であろう。自然人の共同生活のうちで、幾万年の間磨かれて本能化したこのような智慧がなければ、人類はどうなったろう。そんなものまで感じられると言ったら、誇張になるだろうか」。[5)]

この話は、ある状況下では信仰と無縁な子供でさえ、周囲のために自ら進んで犠牲にな

りうる可能性を示しており、姨捨山伝説にも似た不思議なリアリティをもっている。こうした極端な事件とその語り継ぎが、一人ひとりの人格形成に働きかけ、文化を生み、社会の秩序の基礎となり、小林のいうように半ば「本能化」するとも考えられる。

サービスとは、人々が共に生きるために、長い歴史の中で定着した人間固有の行為である。なぜかはよくわからないが、驚くべき自己犠牲の行為が文化や時代を超えて行われてきた。そうした人間の英雄的行為から、人々は感化を受け、サービスの精神が伝播し、個人の社会化と成長の過程で内面的な変化が生じるということであろうか。

しかし他方で、他人のためには一切の犠牲・奉仕・譲歩の類を拒否するタイプの人々がいることも事実である。ある人々は、なぜサービスをしないのだろうか。仮に義理からでも、人助けのために協力をしないのか。殺人、強盗、家庭内暴力など事件は毎日のニュースに事欠かない。だが、犯罪者でなくても、善意や良心の驚くべき欠如を示すごくフツーの人について、アメリカの心理セラピスト、マーサ・スタウトが論じている。[6)]

34 歳のドリーンは精神病院に勤務するセラピストで、患者からも周囲からも非常に感じのよい人に見られているが、同僚で同年のジャッキーがその年の最優秀療法士に選ばれるという噂を聞き、実は「殺したいほど憎んでいた」。そこで、ジャッキーの患者である青年デニスの監督係という立場を利用して、ジャッキーを蹴落すべく、回復途上で退院間近のデニスに恐ろしい仕打ちをする。

デニスがドリーンのオフィスに入り、「すっかりよくなりました」と話し、そろそろ家に帰れるとジャッキーも言っていたと告げると、ドリーンは、「ほんとに？ 彼女は私にはそう言わなかったけれど」とウソをつき、戸惑った顔をする。そして、みるみる打ちひしがれていくデニスに、「先生はね、あなたの病気が確実に前よりずっと悪化したと私に言ったの。‥‥あなたは危険すぎるからって」と告げ、デニスがショックで反応しなくなったのを見て、電話で屈強な男性職員を呼び、鍵のかかる病棟へ移送させたのである。デニスの性格・病状から、このやり取りが決してバレない、つまりデニスはジャッキーに不信をもった以上再び彼女に心を開くことはない、という確信があっての行動だった。

ドリーンはこのほか、自分の出世の妨げになる同僚には、周囲には気づかれないように様々な攻撃を加え、また利用すべき上司は巧みに操っている。著者のスタウトによれば、「サイコパス」と呼ばれるこの種の良心を欠いた人間は、社会に４パーセント程度いるという。その超利己的な発想と行為は、通常の良心をもっている者には想像もできないほどなので、まんまと騙されることが多いという。

悪質な嘘つき人間については、アメリカの精神科医で作家のスコット・ペックも詳細に分析している。[7)] 一例を挙げると、15 歳のボビーは抑うつ状態でペックの診察室を訪れたが、その原因を探っていったところ、16 歳の兄スチュアートがライフルで頭部を打って自殺したことに加え、その翌年のクリスマスに、何とまさにそのライフルを両親からプレ

ゼントされていたことが判明する。ペックは治療すべきはボビーよりも両親の方だと思い、面接する。ところが父親は、なぜ銃を与えたかという詰問に、「覚えていませんよ。‥‥あの年頃の男の子にはいいプレゼントですよ。あの年頃の男の子ってのは、たいてい銃を欲しがるもんです」と反省の色さえ見せず、自らを正当化するばかりだった。

サービスについての議論で、これらの例をもち出したのは、人は決して自然に他者のためにサービスをするわけではなく、逆にペックが“邪悪な人”と呼ぶような一切の利他的行為を拒否し、加えて他者やわが子さえをも死ぬほど苦しめるようなタイプが存在することを示すためである。こうした“悪”のリアリズムへの認識なしに、サービスの学習可能性を説くことはややナイーブではないかと思う。

ペックはその豊富な治療経験から、「悪（evil）を治療しようという試みは、軽々しく行うべきものではない。心理的、精神的に大きな力を持っている人間のみが行うべきことである」[8] と述べる。この言葉は、イエスを念頭に語られているのではないかとさえ思われるが、サービスをすることは、しばしばこの世の邪悪と向き合うことであり、時にそれは命がけの決断と行為を伴う。幸い、デニスは賢明なジャッキーに奇跡的に救出され、ボビーもペックの働きかけで親から離れ叔母と暮らすようになった。

山が高ければ谷が深いように、ある人々の善意と奉仕の心の気高さは、あたかも別の人々の悪やエゴイズムの深さに対応するかのごとくである。人類の善意・良心・サービスの発達を促したものは、皮肉にも邪悪な人々だと見ることもできる。人はなぜサービスをするのか。この世の悪と向き合い、敢えて戦うことで世界のバランスを回復させるためだともいえるし、そうした人々の精神が周囲に伝播するからだともいえよう。

２．自己実現と自己犠牲、快と不快

冒頭にも記したように、サービスやボランティアをする人の動機には、自己実現的な要素と自己犠牲的な要素が入り混じっており、両者は重なりあう２つの円といってよい。人間のタイプ論の延長で議論すれば、傍目には、よくもあれほど奉仕をするな、と感じられる人が、当人の主観では、「好きでやっているだけですよ」とか、「これが生きがいでね」といった風に、自分本位の動機に出発している場合もあれば、逆に、客観的にはさほどサービスなどしていないのに、本人の主観では、「周りは面倒な仕事ばかり押し付ける」と半ば被害妄想的な意識をもっている（私のような？）場合もある。あるいは、義理人情に縛られ窮屈な思いで奉仕を続ける実直な人もいれば、確信犯的に「ノーと言えない愚か者が苦しむのよ。俺はごめんだな」と一切のサービスを回避する輩もいよう。

自己実現と自己犠牲というとコントラストが強いが、サービスは快か不快かという違いから見ることもできる。人の役に立つことはそれだけで喜びであり、人の笑顔がそれまでの苦労を忘れさせ、快感をもたらすからサービスをするのか、それとも多大な負担や労苦

や不快な思いを超えて、責任感・使命感・奉仕への意志からサービスをあえて行うのか。本節では、いくつかの例を引きながら、両者の関係を考えてみたい。

自己実現と自己犠牲が高い次元で同居し、困難と喜びが共存する領域の一つに、医療サービスがあると思う。私は 2 年前、脊髄腫瘍摘出の手術を受け（幸い名医によって首尾よく摘出されたが)、以来、医療サービスのアナロジーで対人サービスや社会サービスを考えることが多くなった。「医は仁術」とも言われるように、困難な治療はまことに“愛の技”（art of loving）というべきである。高度の技術、患者への共感能力、そして他の医師や看護士とのチームワークのよさがより合わさって、初めて治療は成功する。

NHK の「プロジェクト X」でも紹介された須磨久善医師は、海外で“神の手を持つ男”と称される心臓外科医で、バチスタ手術という心臓を大胆に切除する高リスクの手術により、通常は治療困難な患者 50 人を救ってきた。須磨は語る、「医師には二つのタイプがある。一つは確実な治療を続ける医師。そして、自分は、これまでダメだと思われていた患者に、この新しい方法で助けてあげたいと思うタイプ」だと。そして、「『なんのために生まれてきたか』と言ったら、人を喜ばせて、人が喜んでいるのを見て自分もうれしいと思える人生でありたいと思うんです。医者はそれができるんです」と語る。[9)]

しかし、その半生は平坦なものではなかったという。エリート街道とは無縁で、学閥の壁に苦しみ、海外の医療現場に飛び込んで三千を超える手術の修羅場をくぐりぬけ、帰国後は心臓外科を純粋にやるために小さな組織がよいと考え、湘南鎌倉病院に身を置いた。「医師とは何か」という問いかけに、次のように答えている。

「医者というのは、患者のためにいるわけで、医者としての地位や名誉などどうでもいいことです。大切なのは、医者が患者から見捨てられないようにすることです。バチスタ手術に希望を託し、命を預けた患者のために必死に応えることが、医者の使命なんです」。

須磨医師にとって、患者の命を救うことは、奉仕でありかつ自己実現に他ならないが、両者の幸福な結合は、身を削るような厳しい自己陶冶とリスクを引き受ける覚悟で初めて可能になったことである。“天才外科医”の話は一般化しえないとしても、自己実現と自己犠牲の高い次元での結びつきは、生きがいを大切にし大志を抱く若者にとって、人生設計上のひとつの指針になると思われる。

個人的な話になるが、私の叔父（故人）は国立大学の教授を務めた整形外科医だが、地位や金銭には無頓着だった。自らを修理屋とよび、謝礼を決して受け取らないので変人の気配さえあったが、治療と研究と後進の育成のためには労苦をいとわぬ粉骨砕身の生涯だった。なぜそこまで他者のために働き続けたのか。最期になった私との会話で、叔父は次のように語った。「同級生の多くが戦争や原爆で死んでの、生き残った自分は、一体どのくらい一生懸命働いたら食べていっても許されるのか、ずっとそう思って来たの」。

戦争世代には、「生き残ったこと自体が奇跡だ。勿体ないことだ」という思いが強く、

時に快適な生活への本能的な敵意のようなものさえ感じられる。今の世代にとっては自己犠牲的と見えるような奉仕や労苦も、命あることへの感謝によって苦痛でも何でもなくなるのだろうか。人のために役立つことが、生きがいとか自己実現という以上に、せずにはおれないことになり、他者へのサービスがほとんど息をするような自然な営みになっているように見える。いわば、「すでにあり余る恵みを受けている以上、そのお返しをしないではいられない」という意識を感じないではいられない。[10)]

さて、医師の仕事には仁術的な倫理感と奉仕の精神が強く求められるとしても、それに見合うだけの生きがい、報酬、社会的威信が随伴している。それに対し、労多くして報いの少ないサービスの場合はどうだろうか。困難でも創造や救済の喜びがあればよいが、世の中の仕事には、必要ではあるが事務的で無味乾燥なものも少なくない。そうした点で個人的に興味を引かれるのは、無報酬が原則の市民活動や NPO の事務局的な仕事である。例えば、大沢コミュニティ・センターを拠点とする市民活動を支える住民協議会の役員の人たちは、運営や調整の仕事が重すぎてなかなか新人が見つからず、容易に交代できないという（これは町内会でも同様である）。市民活動に参加し始めた頃は、学習会や趣味のサークルで人々と交流して新鮮だったが、地域活動の調整や運営全体にかかわるようになり疲労感を覚えることが多くなった、という声もよく聞く。

その意味で、期間こそ 2 年という限定つきだったが、300 人を超える三鷹市民による「みたか市民プラン 21 会議」（21 会議）の代表や事務局担当者には、「なぜそこまで奉仕するのだろう」という疑問を禁じえなかった。21 会議とは、10 年に一度大改定する三鷹市の基本構想・基本計画（まちづくり全般にかかわるマスタープラン）を、素案段階から市民自身で策定するためのボランティア組織で、1999 年 10 月から、2000 年 10 月の市長への市民プラン提出を経て、行政とのすり合わせが終了する 2001 年夏まで活動した（解散は同年 11 月）。[11)] 784 日の間に開かれた会合の数は、分科会・運営委員会・全体会を合わせて 773 回におよび、事務局は通常のお役所の職場よりずっと多忙のように見えた。そこで私は、代表と事務局の 1 人ずつに、サービス活動の背景を伺ってみた。

21 会議の共同議長を務めた宮川斉さん（もう 1 人は清原慶子現三鷹市長）は、現在小規模の授産施設を運営しており、地域ボランティアの中心的存在である。なぜサービスをするのかという不躾な質問に対し、宮川さんは次のように答えている。

「そもそもサービスをしているという自覚がありません。もし私のしていることがサービスなら、それは自分自身がよりよく、より心が楽に生きるため、というしかありません。ただ、ふと頭の隅に浮かび上がったのは、“ 世界全体が幸福にならなければ私も幸福ではない ” という言葉です。たしか宮沢賢治の言葉だったと思います。もっともいつもこれではくたびれてしまうわけで、やはり好きだからやっている、くらいでしょうか」。

一方、21 会議の事務局次長の本山幸彦さんは、事務局長の正満たづ子さんと文字通り縁の下の力持ちとなった。事務局での仕事は概ね週 3 回、朝 10 時から夕方 5〜6 時まで、自分の分科会があればそれに出て、事務局に戻り机を整理して 9 時半ぐらいに帰るというパターンだったが、多忙な時期は作業を終えて事務局を出るのが夜の 11 時ということもあったという。本山さんは、大手電機メーカを定年退職する少し前から、経験を生かして地域で何かをしたいと考え、できれば街のごみを何とか無くせないか、そのことで三鷹のまちを際立たせることができないものかと思っていたと、次のように述べる。[12)]

「シンガポールや千代田区のように罰金によらない、市民の自主的な行動で実現する方法はないものか、考えました。ごみを捨てる現場を見たらその都度注意すればよいのでしょうが、反抗してくる者もいるこの頃ですから、そこまでやる自信がありません。余談ですが、我が家では親の代から孫まで外でごみを捨てたことがなく、そういう環境というか雰囲気の中で自然に身についたものかと思っています。と考えますと、そういう環境を作れないか、10 年や 20 年では難しいかもしれないが、地道にやれば何とかなるように思いました。ただ、それはサービスではないと思っています」。

そこに 21 会議の準備会の呼びかけがあり、「市民一人ひとりがまちをきれいにするような社会に向けて意見を言いたい」という思いで参加、「市民参加のあり方」をテーマとする分科会に入る。それが機となり、事務局次長を引き受けることになった。無報酬とした経緯、思わぬ出来事などについて、本山さんは次のように記している。

「まず、正式に事務局がスタートした時に代表 3 人、事務局 2 人、そして企画の職員と今後のことを話し合いました。冒頭、会則で決められた事務局員への報酬という点でした。皆さんは既知の間柄であり気心も分かっていたのでしょう、まず私にこの点の意見を求められました。即座に求めないと答え、正満さんも同じ考えだと同意してくれ、無報酬が決まりました。私の思いは、メンバー全員と同じ立場であるということが、無報酬ということで主張できるのでは、考えたからです。１円でも報酬を得ると、メンバーの要求にオブリゲーションを感じてしまうことにはならないか。そうではなく、理不尽な要求にはキチンと説得する立場でいたいと思ったからです。

そういう思いが裏目に出たと思える出来事がありました。事務局がスタートしたので、各分科会の会合に正満さんと 2 人で出向き、挨拶と簡単なお願いをしたつもりが、ある分科会でメンバーから『行政職員のような態度をとるな』と一喝されたのです。最初から“ガーン”とやられたと思いました。補足の説明をして何とかなりましたが、市民の多様性の難しさをいきなり味わいました。議事録は分科会で作って事務局に届けて下さいとか、欠席した時は次の日程を自分で確認して下さいなど、それまでの審議会などとは異なることをお願いしたのかもしれません。しかしこういうやり方が、事務局は全体に共通する業務をキチンと行うことにつながったと考えています。それが理解されたのも、無報酬であることを分かってもらえたからかもしれません。（当初、市民メンバーが事務局を無報酬で担

っていることが伝わっておらず、職員に説明してもらったこともありました。）

こうして、市民要望に応える職員の苦労も感じ、市民と職員の間に立つ事務局の難しさと重要性を認識しました。おおむね順調な事務局運営ができたのは、正満さんの経験、優秀な臨時職員や ICU のインターンシップの皆さんのお陰でした。以後、運営のために提案されたことや自分で思いついたことは、時間のある限りやってきました。運営委員会などで一部の人からでも評価されると、大変うれしく感じたものです。今でも、＜これが知りたいカード＞などが外部で評価されているのを聞くことがあり、当時を思い出しながら、差し迫った時には何か工夫ができるものだと感じています。

会議を終えるころ、全体会で事務局の２人に何らかの報酬を、と提案されましたが、正満さんも私も辞退を申し出ました。評価をいただけたのだなと、ありがたく思うとともに、無報酬でやってきたからこそ自然体で対応できたと思っています」。

21 会議の事務局の重さは、その試みの新しさや会議体の大きさ、複雑さ、頻度からみて、通常の市民活動のそれを大きく超えているにもかかわらず、実は事務局担当者の声を聞く機会は多くない。21 会議自体は新聞やテレビに報道されるほどの注目ぶりだったが、私は本山さんを（皮肉などではなく）“ 内閣官房副長官さん ” と呼んでその役割の重要性を感じていたし、実際 21 会議の全活動を支えたものは、事務局の地道な献身と不断の工夫の積み重ねであった。世の中は、こうした知られざるサービスの上に成り立っているといっても過言ではなく、その意味でも当事者の “ ふり返り ” は貴重な証言である。分科会で市民から一喝された話などは、サービス活動が常に快く楽しいものではないことを示しており、印象深い。また、感謝やねぎらいの言葉はうれしいけれども、それを期待して始めたサービスではむろんない。本山さんは、最後に次のように記している。

「まちづくりに関わることですから、特別なことをやっていない限り無報酬でよい、まして市民の立場では結果が自分に戻ってくるのだから、自分たちのことを前もってやっているだけ、ということではないでしょうか。‥‥日本では江戸時代以前、アメリカでは開拓時代、今日のような行政システムがなかった頃は、市民が自分のできることは自ら工夫してやるのはもちろん、余力のある人はそれをみんなのために提供し、全体のことを担ってきた。そう考えると、事務局の業務はごく当たり前であったと思います」。

要するに、本山さんにとって、“ 市民 ” とはサービスをする人のことなのであろう。

さて、なぜ人はサービスをするのか。その動機は利他的であると同時に自分のためであり、すでに受け取った恵みへの返済であると共に、将来のためのようでもある。事務局的なサービスの例を取り上げたのは、全体のために時に自らを無にするような奉仕を含むと思われたからである。神学者の P・ティリッヒは、次のようなたいへん印象的なメッセージを残している。

「自己肯定とは、それが無の脅かしにもかかわらずあえてなされる限り、それは存在へ

の勇気となる。しかしそれは『個人として生きる勇気』ではなく、『全体の部分として生きる勇気』なのである」。[13)]

「情けは人のためならず」というが、困難や苦労や“無の脅かし”はあっても他者のために奉仕することが、結局は自らを高め、また社会改善という形で自分に戻ってくる、といった信念のようなものが上記の人々からは感じられる。自己犠牲の気配など、どこにも見られない。サービスをする人たちは、何よりも自然に見える。おそらく若い頃からの努力が習い性となり、普通ならば不平を並べてしまいそうな苦労や雑務の類が苦にならなくなったのであろう。その意味でサービスとは、天性の傾向というよりも、“learn”する（できるようになる）ものなのであろう。

３．心と行い、思いと行動

3 つ目の論点は、「心と行い」もしくは「思いと行動」である。前節では主に動機について見てきたが、サービス活動やボランティアへの関心と意欲はあっても、実際にやってみる人は限られている。「人はなぜサービスをするか」という問いに対し、サービス活動に価値をおくか否かよりも、あるいはその動機以上に重要なことは、「するか、しないか」の分岐点における判断だろう。またサービスの実践は、脳や心の問題を超えて、多分に“身体性”や習慣の問題でもあろう。

2004 年に提出されたボランティア活動に関する文部科学省の委託調査によれば、日本人のうち、継続的なものと単発を含め、ボランティア活動を経験したことのある人は 31%であり、残りの 69%は全く経験がない。だが、未経験者の半数以上はボランティア活動への意欲をもっている。また、ボランティア活動に興味を示さない層は 18%に過ぎず、11%は具体的にやりたいことをもち、17%はなんとなくやりたいことがあり、54%は興味・関心はあるがやりたいことがまだわからないと回答している。要するに、日本人の 8 割強はボランティア活動への関心を有しているにもかかわらず、約 7 割はボランティアをしたことがないのである。そして、ボランティア活動の制約要因としてあがっているのは、「時間がない」ことが 63%と最も多く、「ボランティア団体に関する情報がない」ことが 41%でこれに続き、「身近に適当なボランティア団体がない」ことと、「家族の理解がえられない」ことがともに 33%となっている。[14)]

“心”ではサービスを重視し、何かをやりたいと思いつつも、実際の行動につながっていないという事実は、どう理解すべきだろうか。日本人の多忙さに起因するのか、単に情報と機会が不足しているのか、あるいは宗教的な背景もかかわっているのだろうか。社会学的・比較文化的な検討も有意義には違いないが、私の手には余るので、ここでは昨年の『サービス・ラーニング入門』所収の P・ジョンソン牧師による礼拝説教を参考に、「信仰と行い」の視点から考えてみたい。[15)] というのも、この論点はサービス・ラーニングの英語文献でしばしば取り上げられるポイントだからである。

信仰と行いに関する聖書の教えとして最もよく知られているのは、「ローマ人への手紙」第 4 章に示されたパウロの、「人が義とされるのは、行いによるのではなく、信仰による」という言葉であろう。だが、イエスの兄弟（half brother）とも言われるヤコブ（James）によれば、「行いが伴わないなら、信仰は死んだものである」、「人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるのではない」（「ヤコブの手紙」第 2 章）。ジョンソン牧師は、パウロの見方は正しいとしつつも、それはプライオリティの問題として信仰は行いに先立つものであり、信仰に続いて行いを含む他のすべてが続くべきことを指摘する。そして、「ヤコブが私たちをタイ・ワークキャンプに行かせたことは疑いないし、パウロもきっとそうだろう」としめくくっている。

（2） 信仰はあるが 行いなし	（1） 信仰あり 行いもあり
（3） 信仰なし 行いもなし	（4） 信仰はないが 行いあり

この議論を少し図式的・類型的に示すならば、「信仰の有無」（縦軸）と「行いの有無」（横軸）を交差させ、（1）信仰があり行いも伴う場合、（2）信仰はあるが行いが伴わない場合、（3）信仰も行いもない場合、（4）信仰はないが行いはある場合、の 4 つのタイプを考えることができる。（1）は信仰が内側から働いてその人を実践へと促すという意味でいわば理想的であり、「動的な信仰（dynamic faith）」と呼んでよい。（2）は「死んだ信仰（dead faith）」であり、ヤコブの批判の的になっている。（3）については、そういう人もいるという事実として受け入れるしかない（いわば dry な状態）。（4）は信仰の欠如を行いで補うという意味で「偽りの信仰（deceiving faith）」に相当し、パウロが注意を喚起しているタイプといえる。

問題となるのは、（2）と（4）である。まず（2）の「死んだ信仰」に関しては、先の「ヤコブの手紙」が続く第 3 章において、教師たちの主を賛美する舌、つまり言葉の欺瞞を厳しく戒めている。「舌は疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちている」とまで述べ、語ることを仕事とする教師たちにとって口先の制御がいかに困難かを指摘する。私自身、痛いところを突かれたという思いがある一方、言行不一致の先生に混乱させられた思い出がないではない。ヤコブのメッセージは、信仰と行いに関する深遠な教義を述べたものというよりも、教師や指導者に対し、口先ばかりで実践をおろそかにしないよう警告を発したものと理解したい。現代の大学にそうした危険がある以上、とくにサービス・ラーニングを担当する教員は留意すべきだと、自らに言い聞かせたい言葉である。

もう一つの（4）「偽りの信仰」に関していうと、個人の自発的な意志を尊重し、身体的にも心理的にもサービス活動を強要することのないよう注意すべきであろう。戦前の日本では、町内会や隣組での勤労奉仕が常態化し、国家による事実上の強制をあたかも自発的

な奉仕のように見せなければならなかった。先に紹介した委託調査で、ボランティアに関する考え方として、「他人から参加を強制されないことが大切である」という項目が 82%で最多となっているのも、戦前の体制への反動かもしれない。

しかし他方、信仰や心の状態が当人自身にとっても把握しにくいことを考えると、ともかくやってみること、動いてみることは決して否定されるべきではない。“ Learning by doing ”という言葉があるように、実践により、身体感覚を通して学ぶことは少なくない。例えば、土曜の早朝の町内会によるドブ掃除などは、誰も参加してみるまでは嫌なものだが、しぶしぶ出かけてご近所の人々と汗を流してみると意外に爽快で、労働のあと一杯のお茶を飲みながらの会話が何とも楽しかった、といった回想も聞く。私も「緑のボランティア」で竹や雑木林の伐採に学生や市民をソフトに勧誘してみて、「もう病みつきになりそうですよ」といった反応をもらうことが一再ならずある。

「心」と「行い」の間には断絶・不一致がありうると同時に、何らかの内的関連もある。両者の間に大きな乖離が生じないよう注意しつつ、一方では心の思いを実践につなげる工夫と、他方では身体的な実践を通して心を育てる努力が必要なのであろう。その意味では、（3）の「ドライな状態」にある人々も、意外に実践を契機にサービスの心に目覚める可能性が考えられる。コミュニティには多様なタイプの市民がいるわけで、相互の接触と交流の中で、リーダーの「ダイナミックな信仰」が、その人を超え、隣人に影響し、コミュニティ全体に浸透していくことも期待できよう。

人はなぜサービスを“ する ”のか。信仰、愛、世界への希望をもった人は、その心に促されて「実践する」のであろう。一方、強制され、あるいは義務感から行動をおこす場合もある。もしその行いに心が全く伴っていなければ、結局は“ 持続可能なサービス ”とならずに途切れるであろう。だが、行いを通して心が育つこともありえよう。

一方、人はなぜサービスを“ しない ”のか。まず、サービスへの興味・関心を欠いている場合がある。また調査が示すように、単に機会と情報が少ないだけともいえる。だが、何かの契機で身体を動かすチャンスを得て、（ちょうど初めてプリンの味を知って好物になるように）そこからサービスへの興味と意欲が生まれる可能性はある。他方、サービスの必要と大切さを言葉では説きながら、その精神を欠いて一切の実践をしない教師もありうる。そういう教師には災いあれ、というしかない。ヤコブが述べるように、その舌は毒に満ちており、何も語らない方がましである。通常、子どもは親や教師の言葉に従うよりも、無意識の内にその行為を真似ることの方が多いといわれる。「大きな声を出すんじゃない！」と大声で怒鳴ることが、子どもたちを混乱させるように、言行不一致はしばしば教育上のマイナス効果を生む。

観念上、サービス活動やボランティアの重要さは今の日本社会にかなり浸透しているように見えるが、その実践が依然として遅れていると感じられるのは、ことによると大人や

教師たちの責任なのかもしれない。

おわりに

以上、人はなぜサービスをするのかについて、不十分ながら、「人間の多様性と個人の変化」、「自己実現と自己犠牲」、および「心と行い」という観点から考えてきた。だが、ここまで書いてきて、まだ無数の論点が残っていることに気づく。各節の末尾に簡単なまとめをしたので、あえて繰り返さず、むしろ少し自分の青年時代も思い起こしつつ、それ以外のポイントに触れることでまとめに代えたい。

人がサービスをする動機は常に複合的である。まず、子どもや若者の行動原理は“好奇心”に出発することが多く、サービス活動も例外ではない。タイプとしては行動派、慎重派、思索派といろいろあっても、新しい出会いと経験を求めてガンガン（あるいはおずおず）未知の世界に赴くのは、心の柔らかい若者の傾向である。サービス活動は、留学、旅行、冒険、サークル活動などと同一次元にある別の選択肢ともいえる。

オーストラリアでの調査で、数百人のボランティアを指揮する消防隊長から、自分は彼らの動機は一切問わない、という話を聞いたことがある。支給されるユニフォームやブーツ目当てでも、出会いやスリルなど何を求めようと、きちんと働いてくれる限り自分は彼らを使うが、純粋な動機からやっている者でも役に立たなければ辞めてもらう、というのである。実際、サービスの現場で求められるものは、動機の中味などよりも、当人の能力と責任感と実際のパフォーマンスであることに留意したい。

次に、サービス活動を行う複合的な動機の中で、好奇心と共に大きな領域を占めていると思われるのは、自分の価値と能力を高めたいという野心、向上心の類であろう。そして、すべて意欲的で野心的な若者は利己的なのかもしれない。行為の社会的効果よりも、社会的価値をもつ自分自身に関心が向いているともいえる。だが、しばしば人はその利己心を原動力に社会に働きかけているわけであり、それは神が計画した“見えざる手”の類とも考えられる。とくに害がない限り、その思いを否定する理由はどこにもない。

最後に、若者に限らないが、人はそれぞれ人生に“意味”を求めている。社会が物質的に豊かになればなるほど、モノよりも意味を求める思いは強まろう。その中のきわめて重要なものが、サービス活動や社会貢献なのではないか。出会いのモード、向上・創造のモードと並んで、サービスのモードが人生をより豊かに、より立体的にしてくれることを直感して、人はサービスをするのであろう。

好奇心、向上心、意味を求める心などの入り混じった、容易に腑分けできない複合的な動機に出発して、若者は他者と出会い、自分を見つけ、内的に成長しつつ、“サービスをするようになる”のであろう。そうした神の設計図に信頼し、少なくともその偉大な計画を阻害しないよう、教育のあり方を改善することが私たち教師の責任なのであろう。

註

1) “Service”とは、Oxford English Dictionary によれば、38 の意味を含むきわめて多義的な言葉であり、宗教的な意味を除いた奉仕に相当する用法として、“ action of serving, helping, or benefiting; conduct tending to the welfare or advantage of another ” という説明がある。「サービス・ラーニング研究シリーズ１」（入門テキスト 2005）では、サービスのコンセプトを、“ doing something for others without thought of your personal gain ” と説明している。(See, F. McCarthy, “Educating the Heart: Service Learning and Shaping the World We Live In,” p.14）
2) 生物にとって、種の保存は固体の自己保存以上に重要であり、進化の過程で “ 利己的な遺伝子 ” が残ることもあれば淘汰されることもあるという。この類の興味深い話を風間晴子教授（生物学）から伺ったが、本稿のヒントになる示唆も多数いただいた。なお、私自身の専門分野は行政学・地方自治論であり、自治体でのインターン学生への指導を機にコミュニティ・サービス・ラーニングにかかわるようになったに過ぎない。だが、仮にサービス・ラーニングの真髄が「学問的知識と社会実践のリンケージ」にあるとすると、かねてより実践の契機をもたない理論や知識の空しさを感じてきており、その限りではサービス・ラーニングの考え方に違和感はない。自分の研究上の疑問である「市民はなぜ協働（collaboration）するのか、あるいはしないのか」、「公務員（civil servant）はいかに奉仕者精神を体現できるか」、「公務員の “ 倫理 ” を法で縛ることにどのような意味があるのか」といった問いは、すべて「人はなぜサービスをするのか」という問いに重なる。公務員制度（civil service）に関する研究も、サービス活動一般への深い理解を前提にしており、自分の専門の研究を犠牲にして、いわば “ サービス ” としてこの冊子の執筆・編集をやっているわけでは決してない。
3) アーネスト・ゴードン、斉藤和明訳『クワイ河収容所』ちくま学芸文庫、1995、190 頁以下参照。
4) 柳田国男「山の人生」『柳田国男先生著作集』第一冊、実業之日本社、1947 所収。
5) 小林秀雄『考えるヒント 3』文春文庫、1976、19-20 頁。
6) マーサ・スタウト、木村博江訳『良心をもたない人たち』（原著 *The Sociopath Next Door*）草思社、2006、94 頁以下参照。
7) M・スコット・ペック、森英明訳『平気でうそをつく人たち：虚偽と邪悪の心理学』（原著 *People of the Lie*）草思社、1996、61 頁以下参照。
8) 同上、92 頁。
9) 今井彰『プロジェクト X リーダーたちの言葉』文藝春秋、2001、58 頁以下参照。
10) 戦争経験者のこうした感覚について、最もよく知られた著作に、吉田満『戦艦大和ノ最期』講談社、1994 がある。
11) 同会議の内容については、『こんな三鷹にしたい：みたか市民プラン 21 会議活動報告書』同会議発行、2001 が詳しい。また、内仲英輔「市民がつくる自治体総合計画」西尾隆編『住民・コ

ミュニティとの協働』ぎょうせい、2004 年所収、および、拙稿「協働型市民・住民論」武藤博巳編『分権社会と協働』 ＜市民・住民と自治体のパートナーシップ＞ 第 2 巻、ぎょうせい、2001 年所収なども参照。

12) 本山幸彦さんには、私からこの冊子刊行の趣旨を説明し、21 会議の事務局を担当することになった個人的な思いや経緯についての一文をお願いした。インタビューという方法も考えたが、大変よく整理されたエッセーをいただいたので、以下そこから引用した。紙幅の関係もあり、一部私の判断で編集している。

13) パウル・ティリッヒ、大木英夫訳『生きる勇気』（原題 *The Courage to Be*）平凡社、1995 年、137 頁。

14) 「ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書」三井情報開発（株）総合研究所、2004 年 3 月。同報告の内容に関しては、以下のサイトを参照。http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/kekka/04071601.htm

15) Paul Johnson, “The Thai Work Camp: Service to God and Mankind,” 『サービス・ラーニング入門』ICU サービス・ラーニング・センター刊、2005 所収 pp. 63-65。

４．若者は価値を求める

佐藤　豊

１．はじめに

最近（2006 年 4 月）、オウム真理教の松本智津夫（麻原彰晃）教祖とライブドアの堀江貴文元社長の二人の裁判が再びメディアで取り上げられました。振り返ってみて、オウム心理教事件(以下オウム事件と略す)とライブドア事件には共通点があるように思えます。ともに、反社会的な結果に終わってしまったのですが、事件が発覚するまでの過程において、多くの若者たちを惹きつけました。本稿においては、この二つの事件の共通点を挙げ、なぜ二人の活動が若者を惹きつけていったかを考察し、他者へのサービスおよびサービス・ラーニングが若者に何を提供することができるかということを考えてみたいと思います。

２．オウム事件とライブドア事件

2006 年 3 月 27 日に東京高等裁判所は、１審で死刑判決が出ていた麻原の控訴を棄却すると決定し、それに対して麻原の弁護団は意義申し立てを行いました。また、同年 2 月には、証券取引法違反等の容疑から堀江ライブドア元社長を含む同社の 4 名が逮捕され、4 月中旬には、ライブドア株が上場廃止となりました。この結果、麻原と堀江の顔がニュースとして交互に流れるような状況でした。そのニュースを見ている中で、この事件は、非常に異なる内容であるにもかかわらず、ある面で似ていると感じました。それは、以下のような点についてです。

オウム事件とライブドア事件の共通点：

① 若者に人気があった。
② 中心人物・取り巻きが若くて高等教育を受けている。
③ 時代・体制へのチャレンジが見られた。
④ 専門家の評価があった。
⑤ 反社会的結果に終わった。

以下、②から④に焦点を当て、それぞれの事件がどのようなことがあったかを見ていきたいと思います。

2.1 オウム事件

オウム事件は、今から 10 年ほど前のことになりますので、まずその事件のいくつかを紹介してから、上記の②～④に関する点を考察してみましょう。

1994 年 6 月に、松本市の住宅街（裁判所付近）でサリンガス噴霧という事件が起こり、7 名が死亡しました。これは、地域住民によるオウムの松本支部建設のための土地購入に対する反対運動が起こり、麻原を中心としたオウム心理教の中枢がその裁判を不利と判断して行ったものでした（櫻井 2006：41）。翌年 1995 年 3 月には、同様にオウムによる東京地下鉄でのサリン散布が行われ、この無差別大量テロの結果、12 人が死亡し、5500 名が重軽傷を負いました（ibid.）。その他、オウムにより、坂本堤弁護士一家殺害事件や信者やその家族の拉致・殺害などが行われました。

このように恐ろしい事件に加担していった弟子たちは、若くて高等教育を受けているものが多かったのです。たとえば、櫻井（2006）によると、地下鉄サリン事件で無期懲役ないし死刑判決を受けた弟子たちの 17 名の入信時の年齢は、3 名を除いて、「大学卒業後ほどなく、あるいは就職して数年のうち」ということでした（p.46）。また、彼らの学歴は「高卒 4 名、大学卒 4 名、修士課程修了相当（医学部 2 名含む）5 名、博士課程中退 2 名、不明 1 名と大学院進学者がほぼ半数近い」と指摘し、学歴が高いものの犯罪であったことを示しています（ibid.）。

櫻井（2006）は、オウム事件を進めていった弟子たちの志向の一つに「超越性」というものがあり、彼はそれを次のようにまとめています。

> 超越とは、80 年代に日本社会に出現した消費欲求と拝金主義に突き動かされたバブル時代への嫌悪、違和感を基盤とし、自身の欲望を突き抜け、弱肉強食の節操のない社会を理想的な社会へ転換したいという願望に動機付けられた現世拒否の方法である。これを解脱へ向けた修行という形で提示したのがオウム真理教であり、戦後の復興した日本社会を象徴していた現世利益を求める従前の新宗教では満たされない人々の欲求に応えたものだった。（櫻井 2006：166）

櫻井（2006：168）は、また、自由の選択を求められた当時の若者が、「自分が何をやりたいのか」「いま、やっているのは本当に自分のしたいことか」「本当の自分とは何か」という難問を突き詰められ、「オウムの超俗的な禁欲主義や来世をも含めた生の空間における自己の確立」に魅力を感じていったと述べています。

地下鉄サリン散布の実行犯の一人である林郁夫は、医療に携わるなかで「…『死』が直に迫っている患者さんの心をどのようにケアしてあげられるものかは、なにもわかっていませんでした。従容として死を迎えいれて穏やかに人生を終わってもらうために、何かできることはないのか。人間の生死をわけるものはいったいなんなのか。死んでいく者のその後はどうなるのか。」ということを考えるに至って麻原に出会います（林 2001：30-31）。そして、彼の著述には麻原が「人類一人一人を法によって目覚めさせ、社会問題を解決し、人類を救済するための大きな動きを開始しようとしている」と思うに至り、オウムに入信していったことが書かれています。（林 2001：86）。

80 年代後半から 90 年代初頭の金が全てと思われるようなバブル経済の最中において、

人々を霊的に救うという考え方は、時代へのチャレンジとなる思考であったと思われます。

オウムの活動は、常に社会から批判を受けていたわけではなく、「徹底した現世主義の否定」を標榜するオウムの活動は、宗教学者や知識人により肯定的に評価されたということでした（櫻井 2006：169-170）。

おそらく多くの精神的救済を求めて入信した若い高学歴の弟子たちは、初心の意図とは大きく外れて、反社会的な行為に加担し、上に述べたような悲惨な事件を引き起こしてしまったのではないでしょうか。そして、今なお多くの人々が様々な意味でその後遺症に苦しんでいます。

2.2 ライブドア事件

ライブドアの堀江元社長たちおよびその追随者が求めていたものは、「現世否定」のオウムの集団とは異なり、あくまでも「現世肯定」です。堀江（2005）は「誤解を恐れずに言えば、人の心はお金で買えるのです。」（p.70）と言い切り、「稼ぐが勝ち」（p.6）と唱え、経済的に「搾取」されている若者は大学には１ヶ月ぐらい行って、若いうちに起業するように呼びかけます。そして、オウムがある種の若者たちを魅了していったように、堀江の呼びかけも他のタイプの若者たちを魅了していきました。

堀江の取り巻きも若くて、多くは高等教育を受けていました。教祖の麻原がまだ若かったように、堀江もまだ 30 歳台であり、彼自身東京大学の中退です。大鹿（2006：340）は、「ライブドアの中心メンバーは多くが 30～35 歳の団塊ジュニアで、高度成長からバブル期にかけて人格形成をした…」と言っています。また、堀江のまわりに、「名門大卒の大手企業からの転職組がテクノクラートとして」集まり（大鹿 2006：340）、「そこに浅原彰晃のオウム心理教のように、大卒エリートが集まっていた。」（p．342）と述べています。

堀江たちの行動は、「現世肯定」ではありますが、古い体制に対するチャレンジという面もありました。堀江は 2004 年のベスト・ジーニストに選ばれたように、「社長という肩書き」があるにもかかわらず、スーツにネクタイという従来の社長とは異なるいでたちを示していました。それは格好だけではありませんでした。2004 年に、近鉄バファローズ、ダイエーホークスの 2 球団の存続問題とともにプロ野球の低迷が問題となり、１リーグ制が球団のオーナーにより検討されたとき、堀江はライブドアのプロ野球参入を求めました。渡辺恒雄読売ジャイアンツ・オーナーたちに対する挑戦という様相を呈し、多くの人々が堀江社長を応援したのではないでしょうか。また、2005 年のライブドアによるニッポン放送買収は、市場のルールの隙を見つけて行ったものでした（大鹿 2006：339）。これに対して、森喜朗元首相などから「金があれば何をやっても良いというわけではない」という批判があった一方、堀江たちの行動は、あくまでもルール違反ではなく、市場のルールに則っており、既得権を擁護しようとしている業界に対するチャレンジだと評価する声も多く聞かれたように思われます。

メディアは、そのような堀江を「時代の寵児のように扱」い、視聴者もそれにより、「堀江を賞賛する」ということが見られたと思います（Nikaidou.com 2006：213）。ニッポン放送買収時の堀江の使った「想定内」が、2005 年の流行語大賞に入ったのも、そのような日本国内の人気を背景にしてのことだと思われます。また、大鹿（2006：342）は堀江に対して「…小泉純一郎や竹中平蔵、武部勤らも擦り寄り、利用した。日本経団連の奥田碩はそのワンパクぶりを気に入った。」と書いており、政治・経済の長と見なされる人々の一定の評価も得ていたと思われます。

しかし、2006 年 1 月 16 日に、証券取引法違反の疑いで東京地検特捜部により家宅捜索が入るというニュースが流れ、2 月には、堀江ほか 3 名が逮捕され、ライブドア粉飾決算などが公表され、4 月 13 日にはライブドア株の上場が廃止されるに至りました。これにより多くの株主が多大の経済的な損失を被ることになりました。

オウムとライブドアが結果として、反社会的なことを犯してしまった原因は、自分たちの目的達成のために、手段を選ばなかったというところにあったと言えよるでしょう。そして、麻原と堀江たちが、ともにある層の若者たちをひきつけていった理由は、彼らが若者たちに救いを与えたからだと思います。麻原は、現世否定により自己の霊的な救いという目標を与え、また、堀江は現世肯定により若者が企業により巨万の富を築いていくという目標を与えることにより、若者を惹きつけていきました。前者は、精神的な充足であり、後者は経済的な充足という価値を求めさせるものでした。本来、精神的な充足や経済的な充足を求めること自体は、反社会的なものではありません。しかし、それに伴う自己や自己の属する集団を相対的に評価する価値が必要だったと思われます。

以上、オウム事件・ライブドア事件から見えてくることは次の 2 点だと思います。

- 若者は価値を求めているということ。
- 若者にとって現実の世界は閉塞的に見えるということ。

若者が時代を閉塞的に見ていることから、それにチャレンジして現れる新しい価値観や、そのチャレンジそのものが、自分の自由あるいは可能性を広げるものとして見なされ、惹かれていったのではないかと思われます。

3．他者へのサービス

本稿の目的は、これから自分の人生を始める、また、その中で目標となる価値を求めている若者たちに対して、他者へのサービスは、最も基本的な価値だと薦めるところにあります。そのようなサービスは自己の行動をチェックする価値と合わさって、究極的な価値となると私は信じているからです。

具体的には、何か社会的に賞賛されることとは、基本的に、他者に対するサービスであり、他者を助けたり、他者に役に立ったりすることがその対象になるのではないでしょう

か。人名救助、新薬の発明などを挙げることができます。

しかし、本稿において「他者へのサービス」に価値があるという証明は致しません。それは私にはとてもできそうにありませんし、資格もありませんし、そもそもそのような証明が可能かどうかも疑われるからです。ただし、他者へのサービスという価値の証明は不可能だとしても、共感していただくことは可能かと思いますので、他者へのサービスの例をひとつ紹介いたします。

3.1 絵門ゆう子さんのエッセイ

その例は、絵門ゆう子さんによるエッセイの執筆です。絵門さんは、ＮＨＫアナウンサーであり、その後、女優やエッセイストとして活躍していましたが、本年４月９日に、癌により 49 歳の生涯を閉じることになりました。私が購読する朝日新聞に時々彼女のエッセイが出ていたのですが、私は癌を克服した人の話ではないかと勝手に解釈してほとんど目を通すことはしませんでした。

しかし、他者へのサービスの何かよい例はないかと探していたときに、妻に絵門さんのことを薦められました。当初はなぜ、彼女のことを評価しているかわからなかったのですが、そのエッセイを読み直し合点がいきました。絵門さんは癌と戦いながら、エッセイを書いていることがわかりました。そして、なぜそのようにエッセイを書き続けたかは彼女の 2005 年 3 月 10 日のエッセイから読み取ることができました。その一部を紹介いたします。

そのエッセイ（2005 年 03 月 10 日）「きょうは『見世物とスーパースター』でお楽しみいただきます！」で、絵門さんは、ＮＨＫ・番組のお知らせの生放送で「見世物」を「けんせいぶつ」と読んでしまったという書き出しで始めます。そして以下のことを書いています。

> がんのことがマスコミで報じられた頃、友人は「見世物になっちゃうんじゃない」と心配した。後からがんになる方たちの役に立ちたい。だから著書「がんと一緒にゆっくりと」の出版をマスコミに取り上げてもらいたい。でもそれは、「全身がん。そのうちあの人死ぬのね」「がんを売り物にして、痛々しいこと」……という哀れな存在になることなのか。「見世物」という言葉は私の心にとりでを作った。この気持ちを、ＨＩＶ感染者でありながら、生き生きと活躍されているパトリック・ボンマリートさんに雑誌の対談で話すと、「僕は、『見世物パンダ』になろうって思っていますよ」という言葉とニッコリ笑顔が返ってきた。彼の姿勢が、私の気持ちを切り替えてくれた。
> （http://mytown.asahi.com/tokyo/news.php?k_id=13000139999990292）

彼女のエッセイは、「後からがんになる方たちの役に立ちたい」という気持ちで書いたものでした。これは癌を病んでいる人々だけではなく、他の病気を長く患っている人々や、自己のキャリヤーを途中であきらめなければならなくなってしまった人々に大きな勇気を

与えてくれたと思います。

絵門さんは、残念なことにお亡くなりになりましたが、癌と闘いながら、しかし、ユーモアを忘れずに生きることのすばらしさを他のひとに伝えようとする姿は、非常に美しいと思いました。上に述べましたように、他者へのサービスに価値があることを証明することはできませんが、そのような姿に共感する人は多いと信じます。

４．サービス・ラーニング

最後に、サービス・ラーニングで目指していることを書きます。私の解釈によりますと、「サービス・ラーニング」の意味は、サービスのやり方を学ぶという意味と、サービスを通して様々なことを学ぶという意味の二つを指すと思われます。

今までの学生のエッセイを見ていると、サービス前には、他者へのサービスをしようとすることは、偽善的だというようなことを書いています。しかし、サービス後には、自己の今まで知らなかったことを学べたことに多くのスペースを割いています。何かをあげることができたというようなことではなく、いかに自分が学んだかが繰り返し書いてあるのです。

私が韓国の高校に日本語教育のお手伝いとして送ったＩＣＵの学生たちは、韓国の高校生たちに「歴史教科書問題」「竹島問題」について聞かれ、韓国の高校生たちのそれらの問題に対する意識が日本といかに異なるか認識して帰ってきます。また、地域（三鷹国際交流協会）の日本語教育を手伝った学生たちの中には、その日本語学習者のアパート探しに付き合い、外国人が日本でアパートを探すときの大変さを認識するに至った人もいます。一方、ほとんど全ての人が、日本語教育のお手伝いを通して、文化や言葉が異なるにもかかわらず、人間的な交流を体験し、同じ人間として親しく交わることができたことを記しています。

つまり、サービス・ラーニングというコースで到達できるところは、他者へのサービスというよりも、ラーニングという面が多いでしょう。その体験を通して、何らかのサービスができればすばらしいことですし、さらに、それが他者とのかかわり合いを考える機会になれば、このコースの目的は達成されたと言えるのではないかと思われます。

５．終わりに

以上述べたように、オウムやライブドアの事件から見えてくることは、若者は新しい価値と生き方を模索していることです。そして、絵門さんのエッセイなどを通して、他者へのサービスは価値があるようだということを共感していただけると思います。最後に、サービス・ラーニングはそのような価値の発見、および、その他、自己発見、社会発見などの一助となると思います。あなたも、サービス・ラーニングを通し他の人に奉仕することを体験してみませんか。

参考文献

Nikaidou.com 編集部（2006）『ライブドアとの闘いの日々』文苑堂
大鹿靖明（2006）『ヒルズ黙示録　検証・ライブドア』朝日新聞社
堀江貴文（2004）『稼ぐが勝ち　ゼロから 100 億、ボクのやり方』知恵の森文庫、光文社
林郁夫（2001）『オウムと私』文春文庫
櫻井義秀（2006）『「カルト」を問い直す　信教の自由というリスク』中公新書ラクレ

５．人はなぜサービスをするか

森本　あんり

人はなぜサービスをするか。それは、人間が人間だからである。

１．自己超越の能力

人間の本性は、自己超越にある。人間は、自分が自分であることを無限に越えてゆこうとする志向性をもつ。動物は、このような志向性をもたない。わが家の犬は、犬であることにはなはだ満足しており、それ以上であることを欲しない（最近ちょっと権勢症候群ぎみだが)。それはたぶん自分が犬だということを知らないせいだろう。しかし、痩せたソクラテスは、常に今日の自分を越えて明日の自分を目指す。

「空の鳥は蒔くことも刈ることもしない」とイエスは語る。そりゃそうだ。彼らには明日を思い煩う能力がないから。「あなたがたは、それよりもはるかに優った者ではないか」。それもそうだ。一応。だがその「優越性」は、きわめて両義的である。人間は、その日暮らしで生きてはいない。どんなに気っ風のいい江戸っ子でも、実は必ず明日のことを考えている。人は、そのために収穫物を倉に収め、食糧自給率を高め、そして軍備を増強する。いずれも、不測の事態に備えるためである。それは、人間が将来を予測し、あり得べき可能性のあれこれに思いをめぐらす能力をもっているからである。プラトンの言葉で言えば、そこに人間社会が「豚の国家」であり続けることのできない理由がある。

人間の自己超越の能力は、さまざまな表現をとる。倫理的な判断もその一つだ。ここに、自分のことを根っからの悪人だと自認している男がいるとしよう。なるほど彼は悪人であるかもしれない。だが、「自分が悪人である」というその判断は、いったいどこからやってくるのか。もし彼が、自分でうそぶく通り、生まれながらに悪しか知らないのであれば、彼はそもそも自分が悪人であることすら気がつかないはずである。「自分が悪人である」という認識を分解すれば、悪人と判断される自分がいるだけでなく、その自分を一歩踏み出て、対象化した自分に判断を下すもう一人の自分がいなければならない。そこに、彼の自己超越の能力が滲み出ている。彼は自分で自分に判決を下す裁判官である。なあんだ、彼って案外いいヤツなんじゃん。

自己嫌悪だの、自己否定だの、昨今の大学生は勉強以外にもやらねばならぬことが多くてたいへんである。すでに明らかなように、これらの再帰的な反省機能もまた、人間の自己超越の能力に由来している。真面目な学生は、この点で気をつけてもらいたい。真面目であればあるほど、なりたい自分に現在の自分が審かれてしまう。あるべき自分に実際の自分が糾弾されて、どうしても凹んでしまうのである。

だが同時に、人間はすべてをみずからの手で管理することができる、というのは近代人の幻想である。イエスは空の鳥の譬えに先んじて、実はこう語っていたのである。「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思いめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ。』すると神が彼に言われた、「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか。」（ルカ福音書１２章）

ハイデガーは、現存在のこのあり方を「被投性」と呼んだ。われわれは、この世界へと投げ込まれた存在である。君は、めでたく成長し、子ども時代の「夢見る無垢」から目覚めたある日、ふと自分が自分であることに気づく。その時君は、すでに相当の時間を君として存在してきてしまっている。自分の存在に気づくということは、君はすでに何の承諾もなしにこの世界に投げ込まれてしまって生きている自分に気づく、ということである。君はそれに関する異議申し立ての権利をもたない。君の人生は、すでに無限の出来事の連鎖の中で、多くを規定されてしまっている。君の手には、数少ない選択肢が残っているだけである。そして君は、やがて存在の舞台を降りる。「存在」は他動詞なのである。

それでも、相対的に見れば、君はとんでもなく豊かな畑の持ち主である。ある有能な青年が大学に入った。そこで彼は心の中で言った。「どうしようか。わたしにはたくさんの才能が与えられている。ICU に入って、英語もしゃべれるようになるし、国際貢献だってできちゃう。自分の能力を最大限に生かして、自分のうちにいっぱい知識をため込もう。さあ、わがたましいよ、食え、飲め、楽しめ。」現存在の「憂慮」に満ちた愚かな金持を、誰も笑うことはできない。それは、空の鳥ならぬ人間すべての者の定めだからである。かくしてわれわれの問いは、その蓄積をいったい誰のために用いるか、という点に収斂してゆく。「自分のために宝を積む者」は、結局たましいの充足を見いだすことができない。

２．学生ボランティア運動の由来

日本の近代高等教育が、明治以来多くのキリスト教宣教師によって拓かれ担われてきた、ということはよく知られている。そもそも、宣教師っていったい何でわざわざそんなことをするのだろう。自分だけで信じてりゃいいものを、はるばる海を越えてこんなところまで、まったくご苦労様なことである。

彼らを輩出した１９世紀のアメリカは、各地に大学がつぎつぎと建てられた時代である。どこぞの国とは異なって、国策のために税金で建てた駅弁大学ではない。たとえなりは小さくても志は高く、それこそ ICU の「神と人に奉仕する人材を」みたいな崇高な目標を掲げて、人々が青年たちの教育に出資して作られた大学ばかりである。若者たちはそこで高等教育を受けると同時に、その受けた教育をどのようにして社会へと還元するかについても教育を受けた。その中から、海外宣教という仕事に従事する人々があらわれたのである。海外宣教は、そのアメリカ的な由来からすると、何を隠そう、実は学生ボランティア運動のハシリに他ならない。

今からちょうど二百年前、１８０６年のある日、ウィリアムズ大学の５人の学生たちが、外を歩いていていきなり豪雨に見舞われた。雨宿りのため、彼らは近くの干し草小屋に走り込んだ。そこで語り合ううちに、５人は大いに意気投合、あれよあれよと言う間に話が盛り上がり、彼らが中心になって後の「アメリカン・ボード」が生まれたのである。日本をはじめ多くの国々に数百名の宣教師たちを送り、今も形を変えて存在する壮大な宣教団体である。この雨宿りは、後に "Haystack Meeting" と呼ばれて歴史に語り継がれている。君たちも、雨宿りをする時には、気をつけた方がよろしい。一つ間違うと、人生とんでもない方向に走り出すことになる。

もちろん、そのようにして送り出される宣教師たちは、何年もかけて周到な準備を重ね、それぞれ自分の属する教会などの支援を得るわけだ。だが、組織上のことではなく、彼らの目線に立って、その志のはじまりをよく見てほしい。彼らは、必ずしも根っからの信仰深い人々だった、というわけではない。そりゃ一応はそうなんだろうけど。信仰そのものの熱心よりも、むしろ彼らの中ではるかに大きな動機だったのは、「とにかく何か誰かの役に立ちたい」という、やみくもな献身意欲だったのである。それが当時の大学教育の成果であった。どうせやるなら、もっとも困難で、もっともやりがいがあって、もっとも冒険心を満たすことのできるボランティアがいい。――それがまさに海外宣教だったのである。だから、宣教師たちの仕事の多くは、直接の伝道ではなく、教育であったり医療であったりすることの方が多い。「まあ一応宣教師でもあるんだけどね」ってな感じで、実際に

はもっぱら自分の専門的なスキルの方を活用する仕事に従事するわけだ。

今の君たちで言うと、これはまさにワークキャンプであり、サービス・ラーニングである。しばしばこれらはキリスト教の背景をもつ人々によって担われてきたが、君たちの多くは、たまたま自分のやりたいことにキリスト教が関係していたというだけで、正直なところ、別に信仰のことなんかどうでもよいだろう。ただ、何かやってみたい。冒険してみたい。自分に何ができるか試してみたい。しかも、できることなら海外で、まったく未知の環境で、自分を試してみたい、と思っていることだろう。まさにそれが、１９世紀アメリカの学生たちにとっては、海外宣教だったのである。いわば、半分は自己実現であり、今流に言うと自分探しであり、冒険旅行なのである。東洋の見知らぬ国に行って数々の冒険をするなんて、いかにも心踊る計画ではないか。

ただし、この冒険を真に「冒険」たらしめるには、一つ明確な条件がある。それは、自分のために行くのではない、ということである。同じ海外に行くのでも、「留学に行く」というのと「ワークキャンプに行く」というのとは違う。「自分のキャリアアップのため」なんて考えているようでは、冒険とは言えない。われわれの冒険心を満たしてくれるのは、やはり「誰かのために何かをしたい」という願いなのである。つまり、純粋に冒険でなければならないのであって、自分が儲かるとかいう余録を狙っていたのでは、ワクワク度が下がってしまうのである。そのことが満たされる時、われわれは心の底から充足感を味わう。だから、若者はサービスがしたい、と願うのである。

３．自己献身と自己実現のパラドックス

誤解してはいけない。「サービス」と称して、君たちが「人のために何かをしてあげる」などというのは、実はおこがましい限りである。実際には、君たちは与えるよりもはるかに多くのものを受けて帰ってくる。だから「ラーニング」なのだ。宣教師たちも、帰国後の報告では一様にそう告白している。まあそれは多少割引して読まねばならないかもしれん。だが、まんざらウソでもない。君たちと同じように、彼らもはじめはみな、相手のために何かをしてやろう、という崇高で時に悲壮なほどの覚悟で出かけるのだ。しかし、気がついてみると、逆に自分が相手からいかに豊かに与えられていたかを悟ることになる。また、そうでなければ続かないだろう。われわれの精神的資源は限られているからである。したがって、「他者のための奉仕」というのは、あくまでも主観的な現実理解にとどまる。

しかし、それでいいのである。相手にとっても、おそらく何ごとか得るものはあろう。長い目で見れば、結局釣り合いは取れている。われわれは、恩を受けた者に直接恩を返す

ばかりではない。どこかで誰かに受けた恩は、またどこかで誰か別の人に返せばよい（"Pay It Forward" という映画をご存知ですか）。人間の交わりは、そのようにして無数の輪が瓦状に重なり合ってできている。それが一つの輪で完結してしまったのでは、かえって危険であろう。オリンピックの五輪の輪も、ああして拡がっているからいいのであって、五つともゴチャっと一つにまとまっていたら、何のことだかわからないだろう。

人間は、個人で単独に自己自身であることはできない。あまたの「自分探し」の旅がきまって不首尾に終わるのは、自分の内部に自分を見つけようとするからである。逆に、晴れ晴れとした顔で「自分探し」を卒業できた人は、その過程で誰かに出会った人である。人間は、交わりへの本質的な欲求をもっている。アリストテレスはこのことを指して「政治的動物」と言ったのだが、それは何も永田町界隈を徘徊するオッサンたちのことではない。

しかも人間は、動物と異なり、自分の家族や自分の群れという「自然の関係」で結合された集団の中だけに安住することもできない。人間の自由は、自然の所与を越えて、新しい関係を求める点に存している。それはわれわれがよき性のパートナーを求める思いに通じているので、君たちにも納得してもらえるだろう。

人間は、ただ単に生存を保っていれば満足できる存在ではない。生の可能性の実現において、どうしても何らかの自己実現を図ることを求める存在である。ところが、ここがやっかいなのだが、人間はどうしてもその自己実現を、人格をもった他者との交わりにおいて成就することを求める。つまり人間は、他者の生の中に自己の生を実現したいという本性的な欲求をもっているのである。それは、時に「支配欲」の表現ともなるが、他者を「支配」するだけでは、われわれは「愛」も「交わり」ももつことはできない。それは、自由な他者における自己実現でなければならないのである。

この欲求をよくつきつめて考えると、「最高度の自己実現は最高度の自己献身である」という人間に固有のパラドックスが見えてくる。簡単に言うと、自分がもっとも輝いて生きていると思えるのは、誰かのために生きていると実感できる瞬間なのである。自己のうちに閉塞する者は、このような充足を知らない。人間の自己実現は、他者における自己実現である。まさにイエスが言う通り、「自分の命を救おうとするものは、それを失い、それを失うものは、保つ」のである。

このことをもう少し掘り下げてみよう。人間も動物の一種であるから、動物と同じように自己保存の本能をもっている。だが、人間だけはこの本能を超越する能力を与えられて

いる。われわれは、この能力を実際にいつも行使しているわけではない。われわれの日常的な行為の９割９分は、実に身勝手な利己心に支配されている。だが、それでも人間は、ごくたまにこの能力を発揮する。人間は、自分にとって損なこと、不利なこと、危険なことをすることがある。時には命すらも投げ出してすることがある。この能力は、動物にはけっして与えられていない。「いや動物だって、自分を犠牲にしてわが子を助けることもある」などと屁理屈を言うな。動物の自己犠牲は、「自分の子を守る」「自分の種を守る」こと以上に拡がることはない。だが、人間だけは、その一線を越えることができる。自分を守るためでなく、自分の家族や自分の種族を守るためでもなく、ただ純粋に、みずからに不利なことを選び、みずからに害となることを意志することができるのである。ということは、まさにそこに、人間の人間たることの特徴がある、ということであろう。人間にしかできないこと。したがってもっとも人間らしいこと。それが、この献身という能力である。そこに、人間の真の充足がある。

４．「ハヤクニンゲンニナリタ～イ」

哲学や神学の歴史では、こうした学問領域を人間論と呼ぶ。「人間は幸福を求める」というのは、未だに誰も反論することができないアリストテレスの命題である。彼によれば、人間の幸福とは、人間が人間としてのあり方をもっともよく実現することにある。人間が人間であることの目的、人間的であることの善を最高度に実現するようなあり方を、彼は「徳」とか「卓越性」とかいう言葉で表現する。それはけっして道徳めいたお説教ではない。笛吹きの幸福は上手に笛を吹くことにあり、彫刻家の幸福は上手に彫刻をすることにある、というだけの話である。

人はなぜサービスをするか。アリストテレス的に言えば、それは、人間が人間であることの幸福がそこに存しているからである。われわれは、自分が無用の人間であるとは思いたくない。斜に構えてシニカルなポーズをとる青年も、実は「誰か人の役に立ちたい」という秘かな思いをもっているのである。そしてわれわれは、自分が「用いられている」と感じる時に、幸福である（それを誉められたり感謝されたりすると、もっと嬉しいかも）。つまり、自分という人間がこの世に存在する意味がある、と感じられるならば幸福なのである。その目的は、各人によりさまざまであろう。必ずしも社会や国家の全体のために、などと大上段に構える必要はない。ひとりの人を愛するためにだけ生きる、というのだっていい。逆に、外から見てどんなに幸福なように見えても、自分という人間の目的がそこで成就されていないと感ずる人は不幸である。彫刻家が王様になっても、もし彫刻という自分の活動ができないなら、その人は不幸であろう。学問の世界に没頭したいと思う人が、違うことをしなければならないとすれば、それも不幸である。「天職」(Calling) の思想は、

この延長線上にある。

中世の神学者トマス・アクィナスもまた、アリストテレス先生に倣って、人間の幸福は人間の本性の実現にあると考えた。しかし、その実現されるべき人間の本性について、彼は先生とは異なる考えをもっていた。トマスによれば、人間の本性は、みずからに与えられた人間としての固有の自然的能力を越えたところにある。つまり人間は、たんに人間としてあるだけでは、最終的には幸福ではあり得ない、ということである。人間は、その本性の欲求に従うならば、どうしても人間を超えたところを目指さざるを得ない。そのときはじめて、人間は幸福を達成することができるのだ。トマスにあっては、人間とは本性上、みずからを越え出てゆく存在である。動物もそれぞれの類や種に応じて、それなりの完成を求めているであろう。けれども、動物はそれ以上のことを志向しない。キリンは、みずからに与えられている長い首を伸ばして葉っぱを食べることで、自己の本性を最高度に実現して幸福に至る。同じように、わが家の犬は、胴体をうんと伸ばしてひなたぼっこをするが、それは本性上胴長の犬にとって至福の実現なのである。けれども、人間はたんに自然的な所与を実現するだけでは、幸福にはなれない。それが具体的にどういう意味であるかについては、このエッセイの範囲を超えるので、また別の機会の話にしよう。

サービスは、自己超越をその本性とする人間にとり、もっとも本来的な人間性の実現である。カントの言葉を借りるならば、人間の本性は、「所与」(gegeben) ではなく「課題」(aufgegeben) だ、ということである。つまり人間は、はじめから人間で「ある」のではなく、みずからを実現してゆくことにおいて人間と「なる」。君もわたしも、最終的には、いまだ人間になる過程にある、ということだ。いまだ「妖怪人間」ベム・ベラ・ベロなのだ（ちょっと古いか)。一日も早く、人間になりたいものである。

６．ボランティア -なぜ人はすすんで他者につくすのか？-

村上　むつ子

はじめに

「人はなぜサービスをするのか」という主題を、ここでは「人はなぜ自らすすんで他者のためにつくそうとボランティア行動をするのか？」へと置きかえて現代日本社会に見られるボランティア活動や現象を中心に考察したい。

日本では年々ボランティア活動をする人が増えている。２０年くらい前には「ボランティア活動」は日本人に一般的には馴染みがなく、日本にボランティアは育たない、といわれていた。欧米にはキリスト教に基づく奉仕精神があるのでボランティアが盛んだが、日本にはそのような基盤がないというのが理由だった。その定説がひっくりかえったのは１９９５年である。この年、阪神淡路大震災が起き、被災地には日本全国から救援活動をしたいとボランティアが続々と駆けつけた。結果的に、延べ１５０人万人と推定されるボランティアが出現し、日本にとっての未曾有の現象となった。

３年後に特定非営利活動促進法(NPO 法案)が施行され、ボランティアの受け皿となる非営利組織（NPO）が全国で数多く生まれた。これも、またボランティア・センターが各地に設立されたことも、ボランティア人口の増加の一因と考えられる。福祉、環境、地域社会という分野のボランティア活動だけでなく、「災害援助ボランティア」というカテゴリーも作られ、国際的な活動のノウハウも蓄積されてきている。５年前の政府調査によると、日本人１０人の内３人が何らかのボランティア活動をしているというが、身近でもボランティアをしている人たち、とくに若い人が増えている事を実感する機会も多い。

人はなぜボランティア活動をするのか？なぜ、自らすすんで他者のために何かしようとするのだろうか？私は家族に障がい（註）を持つ者がいるので、多くのボランティアに触れる機会があるが、若者が気楽に、自然に、闊達にボランティアをするのに驚き、喜び、目を見張ってきた。なぜボランティアをするのか彼らに聞くと、多くの若者が「楽しい」、「自分がしてあげる、というより、自分がそれ以上のなにかをもらっている感じがする」などの答えがかえってくる。ボランティア活動をする人たちには宗教的信念や倫理的精神で奉仕活動を実践する人々も勿論いる。が、ボランティア活動に、なんらかの「価値」、ほかの活動では見出せないような「意味」を見出している一群のボランティアがいることも最近注目されている。

東京ボランティア・市民活動センターが昨年、継続的にボランティア活動を行っている人たち約１００人にアンケートを行った。その結果を、同センター発行の「ネットワーク」誌（２００５年９・１０月号）に載せている。そのなかで「なぜボランティア活動を続け

ているの？」という設問への答え（複数回答）がのっている。回答が多かった項目をみると以下のようになる。

「誰か・人の役にたてているから」	７３％
「一緒に活動している人たちが魅力的だから」	６０％
「視点や能力・知識など学ぶことがあるから」	５６％
「新しい人との出会いがあるから」	４３％
「社会的な課題の解決にかかわれているから」	４０％
「その活動が目指すものや事業内容に共感するから」	４０％
「食事や飲み会、交流会などの楽しみがあるから」	２９％

人がボランティア活動、奉仕活動をなぜ行うのかについては、倫理的な解説を試みることも、心理学や社会学といった学問的なアプローチも含め様々な観点から検証を試みることが可能だ。が、ここではまず、ボランティアの現場からの事例を参考に探っていきたい。

ボランティア活動がつくる「新しい自分」と「もう一つの社会」

川嶋祥世（さちよ）さんはルーテル大学の社会福祉学科所属の３年生だ。学生生活と並行して、この３年くらい継続的にボランティア活動をしている。一つは「チームコブラ」という知的障がい者のために毎月行われるディスコパーティの手伝い、もう一つは、社会福祉法人「調布を耕す会」（知的障がい者の作業所とカフェを運営）の特別イベントなどのサポート活動である。

川嶋さんがボランティア活動をしようと思ったのは高校３年のときだった。「とにかく何かをしたい」という気持ちから、地域のボランティア・センターを訪れ、そこでボランティア活動をできる場所を探した。最初なので自分で「楽しい」と思えることを選んだ。「なにかやりたい」という気持ちは、「内なる希求」のようなものであったのだろうか。本人の言葉では、「それまでの自分は、親や友人、先生や幼馴染みに囲まれ、恵まれた環境で気侭に生活をしていた」。が、ボランティア活動を始めてみると、自分の日常生活圏から一歩、見知らない世界に歩みだして行った。障がいのある人と接するのは初めてだったが、実際に接してみれば抵抗もなくすっと入っていけた。その内に、社会福祉法人のスタッフや他のボランティアの人たちと、今まで自分の生活ではやりとりをしたことのない会話もするようにになった。

そうして発見したのは、「それまでの自分と違う自分」だった。無意識に、自分がどのようにしたら彼らが（ディスコで）楽しめるかを、一生懸命考える自分がいた。ディスコでは「やってあげる」のではなく、一緒に「楽しむ」ことが必要、他の活動でも、「一緒に行う」ことが大事なのだとわかってきた。漫然とその場にいるのでなく、自分で状況を読み、

何が必要かを理解し、自律的に動けるようになった。視野が広がり、ボランティア現場以外でも自分で意識的に自問自答する習慣ができ、性格的にも「活動的」な自分になった、と思う。

「ボランティア（活動）には いろいろな要素が詰まっていて、一つ一つの体験、出会い、自分の思考がつぎつぎに掛け合わせってくる。ボランティアは、その後の様々な（人生の）きっかけをもたらしていく」と彼女はいう。ボランティア活動を続けてきて、自分が成長したのを感じる。自分の体験を自分で成長につなげられ、その結果、自分が将来やりたいことの輪郭も見えてきて、明確な意志をもって進路を選べた。ボランティアは今後もずっと続けていくだろう、と思っている。

川嶋さんは都内にいる何万人のボランティアの一人で、彼女のボランティア体験も別にとりたてて珍しいことではないかも知れない。実際、ボランティア活動を行っている人たちからは似たような、「ボランティア・ストーリー」を耳にする。「日常では出会うことない人びとに接することができる」「新たな自分の発見」もよく聞く言葉だ。しかし、平凡に見えるボランティア体験に様々な「意味」を見出している場合も多く、それがまた次の活動への意欲にむすびつき、時には周辺にも影響を与えているように見える。

不自由はないが漫然とした日常生活のなかで「何かをしたい」という行動はどういう意味があるのか？それは、現代社会の巨大システムの中で生きている個人がその閉塞状況を打破しようとするアクションにつながる、と金子郁容氏は著書「ボランティア　もう一つの情報社会」で解説をしている。当事者がそのような文脈で意識してボランティアをしたかどうかを別にしても、結果として彼らは今、自分がいる場所からの脱皮を計ったというのだ。

現代社会において私達は個人の意志や力がほとんど及ばない巨大システムによって管理・運営されていることに触れたあと、金子氏はこう述べている。

> 「生活様式は行動パターンに関するある種の『ルーチン』つまり、「慣習にしたがった決まりきったやり方」に従って行動しているときは別に支障はない。しかし、この「ルーチン」はわれわれが求めたものというよりは、社会を管理・運営するシステムからいわば『押しつけられたもの』である。」

> 「私はボランティアの提示する関係性、つまり、個人や社会への『かかわりかた』と『つながりのつけ方』は社会を多様で豊かなものにする、新しいものの見方と、新しい価値を発見するための人々の行動原理を提示するものであり、社会の閉塞状況を打破するためのひとつの『窓』になるのではないかと思っているのだ。」

金子氏はこのようなボランティアたちの出現が社会のなかで既存の価値情報とはちがう、新しい情報ネットワークを形成しているとみる。そこでは人間がお互いにいままでの関わり合いと異なるつながりで結ばれ、一緒に行う活動に新しい価値を発見し、それを発信できるチャンネルとなっている、というのだ。川嶋さんのようなボランティアが、そのような情報ネットワークのなかで、それまで自分達になかった社会性を育んでいったのは想像にかたくない。

自分にとって大切な価値を獲得する

現代日本社会では、子どもや若者が生きる場を家庭生活と学校生活に限定されることも多く、受験のための競争に多くの時間やエネルギーを費やす。他者とつながり、関係をつくる機会が少なく、社会性を育むことがあまり無いまま大人になる。戦後、日本人が一番重きをおいてきた「価値」、つまり「経済価値」は戦後復興期には国民の意欲と直結したが、それがそのまま、２１世紀になっても日本人が自分自身や他の人を理解、判断する時の主な尺度になりがちだ。それ以外の「価値」を自ら発見し、検証し、構築をする機会も乏しいため、自分自身が確信をもった価値や、それに基づいた人生観、世界観を形成しにくい。

一方、日本人、ことに日本の若者に公共心が少ない、と言う事もしばしば指摘されている。自分が属する組織や集団へは帰属意識が強く、その組織の規律にそった人間関係を形成するが、その外側の人たちには無頓着だ、という「内・外意識」も日本人論としてよく知られている。しかし、この１０年のボランティア活動を求める人たちの出現は、この風景を、日本人の価値観や行動のパラダイムを変質させつつあるのではないだろうか。

川嶋さんはボランティア活動のなかで自分を学ぶことができ、結果的に自分が成長をしたと語るが、これは国際基督教大学が推進しているサービス・ラ-ニングの「学びのプロセス」に一脈通じている。ボランティアをやっている内に、体験を自律的に学びにつなげてきており、意識されてはなくとも自分でサービス・ラーニングを展開してきたことになる。

「何かしたい」と若者が思うとき、現代日本には娯楽、スポーツ、趣味、習い事、アルバイト、サークル活動など選択肢が多々ある。そのなかで他を選択しないで、ボランティア活動を選ぶ、つまり「他者のために役に立つことをしよう」という奉仕の行いにつながるのはなぜだろう？

石川県志賀町で、ある７０代の女性が駄菓子屋を営んでいた。足が不自由で日常生活でもちょっとした家事が大きな負担になる。ある１３歳の中学生、奥下雅士君はそれを知り、見兼ねてそのゴミ出しを手伝った。そして、彼はその後もゴミの回収日には毎回、その人に代わってゴミを出すようになった。ありがたい、と思ったのだろう、駄菓子屋の女性はある日、その中学生にお小遣いを渡そうとした。すると、その少年は「ぼく、それが欲しくて、しとるんじゃないげん」と答えた、という。この話は２００５年の１２月に北陸中日新聞「ごみ出しまかせて」という記事として広く知られるようになり、今年の春、日本

新聞協会が読者に募集をよびかけた「HAPPY NEWS 2005」の大賞をとった。

この少年がお年寄りを助けようと思ったのは、「経済的価値」のためでなく、つまり小遣いをもらいたいからでななく、また、そうするように教えられたからでもなかった。他の人が困難にあっているのを目の前にする、あるいは知ってしまえば、手をさし延ばそうという気持ちは自然にうまれ、その状況を改善しようと行動をとる。これは基本的には、人として自然な姿だ。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは人間が「社会的動物」であると指摘した。人間その本性から自然にポリスを形成し、その中で存在する、という考えだ。一人では生きていない、他の人との関わりのなかで生きている。生まれた瞬間からまずは肉親に接し、成長していく環境のなかで他の人と関わりを作って生きている。回りの人々に育まれ、暮しながら、コミュニケーションや信頼をすることを学ぶ内に、知り合いが増え、友人ができる。自分が属する集団の中で役割を担い、共に作業をする。学校、組織や会社、地域社会、町、都会、国に生きている現実を体験的に認識し、連帯もうまれ、社会性が育まれる。また、人間は人類として国境を越えてお互いを仲間、同じ人間として認め、痛みを共有し、助け合おうとしてきた。意識的に自覚していなくても互助の「気持ち」が人間に内在していることは国や分野を問わず多くの場で指摘されている。それが宗教や倫理の形のなかでは「隣人愛」や「慈悲」として説かれ、「恕」（他人の立場や心情を察することという概念）や「仁」という概念に昇華されてきた。

「ほうっておけない」

「一言でいうと、『ほうっておけない』という感じ、かな」というのは、大橋正明さんだ。「シャプラニール＝市民による海外協力の会」の理事を１９９１年から務めている。「ほうっておけない」と言うのは、なぜ彼が海外支援活動、をするのか話していくうちにたどりついた言葉だ。支援を必要とする海外の人々のために、日本人が市民レベルのさまざまなチャンネルで援助活動を行うようになったのはこの数十年のことだ。多くの場合、最初はボランティア的な発想、つまり実情を何らかの形で知ってしまった個人が自分の回りに呼びかけることからはじまり、それが複数の人々をまきこむ支援目的の活動に発展してきた。年月をかけて団体や組織を作り、NPO の形をとってきたケースが沢山ある。現在、民間レベルの国際協力組織は国内に何百も存在するが、その活動は「市民社会」の新しいうねりを生んできただけではない。ボランティア精神を高揚し、「すすんで他者につくす」意志を社会に培養してきたといえよう。

大橋氏は大学生の時に半年間インドに滞在、ガンディーの思想を学び、インドに深い関心をもつようになった。７９～８０年にデリーの国立中央ヒンディー語学院留学した後に、シャプラニール市民による海外協力の会で支援の仕事と出会い、バングラデシュ駐在員となった。その後、アメリカの大学院での留学を経て、９０年代には、国際赤十字バングラ

デシュ駐在員となり、９３年より恵泉女学園大学で教鞭をとりはじめた。現在、同校の人間社会学部長である。彼は、なぜ支援をすることに関心をもち、その活動を続けているのか？

「偉い、立派、人助け、というような事でなく、自分の関心、エゴから活動をしている」というのが本人の最初の返答だった。まずは南アジアが好きになった。インドやバングラデシュの人々と知り合い、付き合い、もっと関わり合いたいと望み、彼らの生活の現状を目の当たりにする事になっていった。

「バングラデシュの人々の状況を知れば、そこには南北問題を見、同じ人間なのに、という思いもでてくる。不条理もあれば、構造的な社会問題もあるのがわかる。そこに問題があるのがわかったら、もう、ほうっておけない。」　そうして支援活動に関わっていくのだが、その中で体得してきたことも多い。「支援というと、モノを与え、人や知識やスキルやノウハウを提供するという『サービス』ばかりに目が行ってしまうが、本当はその前に、相手と同じ人間として向き合っていくことこそが大切だ。」そして、他者を助けるためのはずの支援活動をしていくと、結局は自分の属する社会、つまり日本を変えていくにはどうしたらいいか、と考えるようになった。自分も自分の国の市民社会の成長のために自覚や責任感を持つべきだと結論したのが、日本の大学で教えるようになった理由の一つだ。

２００５年には「ほうっておけない」気持ちを文字どおり活動の名称にした「ほっとけない　世界のまずしさ」キャンペーンが日本で起った。この運動のシンボルとなった「ホワイトバンド」を多くの人たちが身につけたのは記憶に新しい。もともとは G-CAP（ジー・キャップ／Global Call to Action Against Poverty の略）という運動で、９０ケ国以上で盛り上がってきた。日本では国内の NGO などが G-CAP と連携し、日本の若者に人気のあるスポーツ選手や芸能人を巻き込んで展開して注目された。「ホワイトバンド」はファッションのアイテムようにもなり、若者の間でも世界の貧しさが広く語られ、それまでボランティアや社会運動に特に関心が無かった人々も支持を表明し、ホワイトバンドを購入し、このキャンペーンに貢献することになった。

この運動で注目したいのは、実際にアフリカの貧しさを見た事のない若者たちや貧しさと無縁の生活を送っている日本の市民が、この貧困撲滅キャンペーンに共感し、国境を越えた「アドボカシー」活動に身軽に参加した事である。支援 NPO には実際に現場に入っていく支援直結活動をする組織もあれば、支援を効果的に行うための政策提言や社会教育活動をするアドボカシー活動をする組織がある。後者は主張が抽象的になりがちな事もあり、社会的アジェンダに関心をもってない人々を巻き込むのは難しい。それが、今回のキャンペーンではホワイトバンドという象徴的なアイテムがあったために、比較的、気軽にキャンペーンに参加できる仕組みができたのだ。過大な負担なしに人のために何かをすることができれば、人はボランタリーに運動に参加し、行動する意欲があることもわかった。

人に尽くしたい希求が人を動かす

最後に日本で多分一番有名なボランティア、高遠菜穂子さんについて触れておきたい。１９７０年生まれの高遠さんが日本で広く知られるようになったのは、２００４年４月にイラクのファルージャ近郊でイラク人の武装グループに拘束されたからだ。９日間の拘束の後、無事に解放される帰国するまで、国内外のメディアに連日大きく取り上げられたのは記憶に新しい。

自己紹介によると、高遠さんは「ヒョンなことからボランティアに目覚め、30 歳にして東南アジア・インドを放浪。生きる意味、自分のやりたいことを見つける自己発見ボランティア」だいう。インドではマザー・テレサの作った施設「死を待つ人々の家」で働き、タイ、カンボジアでも孤児院やエイズホスピスで手伝いをした。マザー・テレサを敬愛し，マザーの様な生き方をしたいと思っていた彼女が「ほうっておけない」気持ちで、次に目指したのはイラクだった。アメリカが対テロ戦争の名のもとに、「大量破壊兵器」の存在を指摘して攻撃をした国へ向かう決意をした。アメリカがイラク戦争終結宣言したのを受けて，高遠さんはイラクに入国し、まずは 2 ヵ月余り、NGO とともに病院調査、医薬品運搬、学校再建などに力を注いだ。２００３年秋から３ヶ月間の滞在では、ストリートチルドレンの自立支援活動を主に行った。その支援活動をイラクで継続するための資金を得るため日本にいったん帰国し、再度イラクになんとか入国した。その直後の拘束だった。

高遠さんが他の２人の日本人男性とともにイラクで拘束されると、日本国内のニュースに毎日３人の名前が出るようになった。日本のメディアは習慣的に「職業名」で人を説明するが、彼女については一部のマスコミは「ボランティア」、また段々「ボランティア活動家」と報じた。それに違和感を持つ日本人も多くいた。後に彼女が指摘するが、日本のマスコミが彼女につけた肩書きは、事件前は「ボランティア」だったが、事件後には「ボランティア活動家」になっていた、という。そういう表記にでもしないと、彼女がなぜ戦禍のイラクで単独で支援活動に従事していたのか理解しかねるメンタリティーが国内にあったからだろう。

拘束したイラク・グループは高遠さんたちの解放の条件として自衛隊の撤退を求めた。日本政府は即刻、拒否表明をし、一部の人の批判の言葉から生まれた「自己責任」という文字が日本の国内報道に大きく踊った。「勝手に出かけて」「迷惑だ」、「救出に多額の税金がかかる」と怒号のような批判も巻き起こった。３人が拘束を解かれ無事に帰国をした時も，その後も、生還を手放しで喜ぶ声だけでなく、拘束された人たちに懐疑的な声があった。彼女の行動に対して賛否両論渦巻くなかで帰国した彼女は気持ちが激しく揺れ動き、精神的に立ち直れない日々が続いた。その経過は、高藤さんが帰国後に著わした「戦争と平和　それでもイラク人を嫌いになれない」という本に、詳しく書かれている。

自宅に閉じこもっていた彼女を回復に導くきっかけになったのは、全国からよせられた花や手紙、メッセージビデオや本や CD だったと言う。手紙やハガキは段ボール３箱にも

なり、それを全て読み、泣いたり感動したりしながらゆっくり自分を取り戻したそうだ。

マスコミには大きく載る事はなかったが、拘束・解放のニュースが下火になっても、全国に高遠さんに心を寄せた多くの人々が存在した。多くの人が彼女の行動について考え、何かを喚起され、そのことを彼女に伝えようと行動した事実がある。

日本には「ボランティア」に対して批判する人も、さめている人も、斜に構えている人もかなりの数で存在する。ボランティア体験のない高校生や若者がボランティア活動を「偽善的」、「きれいごと」、「教条的」だと指摘する言葉を耳にすることもある。近年、ボランティア活動が広がるなかで単純なボランティア賛美が先行した結果かもしれない。ボランティア活動に否定的な、このような深層心理も、高藤さんたちへの激しい攻撃の一因となったとも思える。

自分の自由意思により、すすんで人のために行動する人は世界中に多く存在する。活動の目的や、やり方、スタイルは様々だ。ホワイトバンドを身につける人もいれば、ボランタリーに関わった活動が自分の使命や天職になる人もいる。時代や場所によっては、献身的に他者のために活動をする人も異分子扱いされ、非難されることもあるだろう。マザー・テレサがインドで独自の活動を始めた時も、無謀で勝手な活動と批判されたかもしれない。しかし、人が他のひとにつくしたいという希求が心の中に生まれ、それに従って行動しようとするとき、だれもそれを否定することは出来ないのではないだろうか。　むしろ、人がそういう願いを持てるということが、未来に希望の地平を拓くような気がする。

註

ここでは「障がい」「障がい者」という表記をつかう。一般につかわれている「障害」という言葉の中にある「害」という文字を使っての表現を避けようという動きが社会に生まれてきている。福祉関係では「障碍」と漢字を変え、または東京 YMCA のように「障がい」という表記にしているが、人によっては「しょうがい」とひらがな表記を選ぶ。ちなみに英語でも handicapped という言葉を使う代わりに disabled (主に身体障がい)、physically-challenged または intellectually challenged という呼称が近年では使われてきている。また、「精神薄弱」とか mentally-retarded という表現は医学的には残っているが、進歩的な考え方の人々には差別的表現とみなされている。

＜参考資料＞

スーザン・エリス（２００１）「なぜボランティアか？」海象社

長沼豊（２００３）「市民教育とは何か」ひつじ書房

金子郁容　（１９９２）「ボランティア　もう一つの情報社会」岩波書店

カール・ボランニ-他　「経済の文明史」日本経済新聞社

東京ボランティア・市民活動センター「ネットワーク」誌　２００５年９・１０月号
（「ききマネ：きかせて！ボランティアが長く続くコツ」）

仲里至正・松井洋編著（１９９７）「異質な日本の若者たち」プレーン出版

市村尚久他編（２００３）「経験の意味世界をひらく」東信堂

高遠菜穂子（２００４）「戦争と平和　それでもイラク人を嫌いになれない」講談社

クラブ　アルク／ボランティア　JAPAN
http://www.alc.co.jp/clubalc/vj/index.html

シャプラニール＝市民による海外協力の会
http://www.shaplaneer.org/

７．Service 活動の勧め

田坂　興亜

１．Service 活動の場としてのアジア学院

栃木県の那須塩原市にあるアジア学院は、1973 年に創立されたアジア・アフリカの農村指導者を養成する民間の教育機関、つまり NGO である。「指導者」といっても、創設者の高見敏弘氏が繰り返し強調してきたのは、「上に立つ」指導者ではなくて、途上国で貧困、飢え、差別に苦しむ草の根の人々のために “Serve” する “Servant Leader” の養成である。アジア学院には、毎年、25 名前後のアフリカ、アジア、太平洋地域の農村で草の根の活動を行ってきた人々が招かれ、5 名前後の日本人学生と共に一つの Community を形成して 4 月から 12 月にかけて研修を受ける。有畜複合型の有機農業を実践的に学ぶことによって、それぞれの母国の人々が飢えや貧困から解放され、自給・自立してゆくように、リーダーシップを発揮できる人材を養成しているが、農業技術の習得のみを目的としているのではない。「共に生きる」ことを実践する共同生活を通して、徹底的に隣人に仕える姿勢を身につける。アジア学院の Community は、インド、バングラデシュ、フィリピン、ミャンマーなどのアジア各国、タンザニア、ウガンダなどのアフリカ諸国から研修を受けるために入学する Participants と呼ばれる人々に加えて、年間をとおして Service 活動を行うために Volunteer としてやってくる日本人、韓国人、(「兵役」を拒否して、その代わりに「労役」を選んだ）ドイツ人たちも加わって、実に多彩な人種的、宗教的、生活習慣などの背景を持つ人々で構成されている。さらに、数ヶ月間、Volunteer よりも短期の Service 活動を行う Working Visitor と呼ばれる人たちが、入れ替わり立ち代りこの共同体に加わっている。

ICU で Service-Learning の Program を立ち上げたとき、国内で行なう Community Service-Learning の実習先の一つとしてアジア学院を選んだのは、上記のように、世界の様々な国から「隣人に仕える」ことを目的にして来た人々と共に生きる経験ができること、それも、単なる「交流」ではなく、牛や豚の世話から田畑の雑草取りなど、きつい、汚い、誰もが嫌がるような仕事を、隣人のいのちを支えるために Dignity をもって、共にすることによって、”Service”することの深い意味と大きな喜びを感じることができるからである。Community Service-Learning Program が始まって以来、夏休みを中心に、ほぼ毎年このプログラムに登録した ICU 生が一ヶ月間ここでの Service 活動を経験している。国際インターンシップの一環として参加することも可能であるが、せっかくのチャンスを有意義に生かすために、Service-Learning 関連のクラスを受講して、事前の充分な準備をお勧めしたい。

２.「意味喪失」の時代

以前 ICU で教えておられた大塚久雄という経済学者が、チャペルでされた話をまとめて、「意味喪失の時代に生きる」という本を出版されている。この本の中で、大塚久雄先生は、次のように書いておられる。

「個人がそれぞれ固有の価値を持ち、他に換えがたい意味を帯びているという思想は、現代という時代においては少なくとも文化の中心には置かれておりません。たとえ存在の余地があるとしても、どこかの片隅に押しやられ軽視されて、有るか無きかの状態でわずかに存続しているだけのように思われます。」

「ともかく、あらゆる現象を数理化し、操作可能なものとしてつかもうとする形式合理的な思考は、すべての現象から意味を奪い取っていきます。そして、こうした傾向がどうもその究極のところにまで近づきつつある、との感を抑え切れません。人間のいのちの尊さがしだいに忘れ去られ、人々は生きていることの意味さえ見失い始めました。こうして、世界のあらゆる現象が意味を喪失してしまったとの感の深い文化の中に我々は今生きており、どこにも生きがいを見出すことができない。こうした袋小路に入り込んで、人々は途方に暮れ始めている。実際こういう文化の中で生きてゆくことは相当な苦しみです。無意識の中でみなもがき苦しんでいる。ことに若い人たちの苦しみは大きいと思われます。」こうした苦しみから脱出するために、ある人たちは酒を飲んで、現実を忘れようとし、他の人たちは、非合理で、オカルト的な宗教に救いを求めているが、いずれによっても、人生に本当の意味を見出すことはできない。大塚久雄先生のこうした洞察は、その 15 年後に、擬似宗教集団「オウム」が多くの若者を引き付けて、サリンによる無差別殺人を引き起こしたあの忌まわしい事件を予見したかのようなものであった。

一方、アメリカでも、社会も家庭も大学も病み、若い世代は同じく「意味喪失」の中で方向を見失っていることが、*The Abandoned Generation* という本の中に指摘されている。これを読むと、かつて名門校といわれたほとんどの大学で、週末ごとに酒に酔いしれた乱痴気騒ぎが行なわれ、とくに寮では限度を超えて酒を飲んだために、吐いたものがそこらじゅうに異臭を放っている、という醜悪な有様が実際の大学名を挙げて述べられている。この本の中で、著者は、こうした酒への過度の依存やはびこる麻薬などが、若い人たちの “Meaninglessness of Life” に起因していると述べている。つまり、若者たちは「意味を喪失した」毎日の生活、人生に耐えかねて、アルコールをやたらと飲むことでその苦しみから逃れようとしている、というのである。しかも、大学の教授たちは、学生たちの「意味喪失」の苦しみを共に担おうとはせず、「業績」として数えられる研究の成果をあげることに腐心する中で、学生たちを「見捨てている」、と（著者自身をも含めて）厳しく批判している。

3. 「意味喪失」からの脱却；Service 活動がもたらすもの

N 君は高校生のときから酒を飲み、タバコを吸うような生活をしていた。高校の構内でタバコを吸っているのが見つかって、両親が呼び出され、校長から自宅謹慎して、反省を促すように言い渡されたこともあった。彼は高校を卒業するときにも、「大学に入っても、何の意味もない」と主張して受験もせず、卒業後は寅さんのようなフーテンの生活をしていた。ときどき土木工事のような仕事で少しお金をかせぐと、あとは友達と酒を飲み、夜昼が逆転した生活をしていた。まさに「意味喪失」の毎日であった。そんなあるとき、アジア学院が日本人学生を募集していることを聞き、「何か意味のあることをしたい」と思っていた彼は、入学することにした。N 君はここでアジアやアフリカの研修生たちと共に、「他者のいのちを支えるために」有機農業で汗を流す喜びを発見し、研修を終えたときには、農業分野で国際協力をしたいという夢を持つようになっていた。彼は大学で農業と環境を学び、インドやラオスで農村開発の仕事をするようになった。こうして彼は、「意味喪失」から脱却したのである。

Y さんは、ICU 在学中、タイで行なわれたワークキャンプに参加した。このワークキャンプは、1982 年以来、ICU がチェンマイにあるパヤップ大学と共同で毎年 3 月に行なっているもので、電気も水道も無い山岳民族の村に滞在して、井戸掘りや教会堂建設といったワークを日本人、タイ人、カレンやラフ族の村人と共に行なってきた。このプログラムは、Service-Learning の Non-Credit Program として位置づけられているが、これまでにタイ・ワークキャンプに参加した人たちのその後の人生に多大の影響を与えてきた。Y さんもその一人で、これをきっかけにアジアへの関心が深まり、3 年生のときには、ユネスコ・クラブ主催のアジア学院でのワーク･キャンプに参加した。彼女はアジア、アフリカの研修生から、それぞれの国や地域の課題と彼らの取り組みの様子を聞き、自分もそうした活動に関わりたいと思うようになった。そこで、1999 年 ICU の教育学科を卒業するとすぐに、日本人学生としてアジア学院に入学して一年間の研修を受けた。彼女は、さらに半年、アジア学院で野菜･穀物分野のボランティアとして働いたあと、青年海外協力隊の一員として中南米のホンジェラスに派遣され、食糧生産の分野で活動を行ってきた。アジア学院での一年半の経験が大いに役立ったのは云うまでもない。二年間の活動を終えて帰国した彼女は、間もなく、山形県の NGO から派遣されて、現在カンボジアのベトナム国境の村で、農村開発の仕事をしている。カンボジアは、1970 年代のポルポトによる知識人の大量虐殺、そして 1992 年まで続いた内戦によって、国土は荒れ果て、農村のリーダーが育つのに、まだまだ時間がかかると思われるが、そうした中で、多くの問題に直面しながらも、カンボジアの人たちと力を合わせて、復興へ向けての活動をたくましく続けている。

8. Concern for Others or Self-Concern?: Psychological Perspectives on Basic Motives for Serving Others

Toshiaki Sasao

Introduction: "To Serve Man"

When asked to contribute to this collection of essays on why people want to serve others, one of my favorite episodes from the TV series *The Twilight Zone* aired in the 1960s came to my mind. The story begins with Michael Chambers (played by actor Lloyd Bochner) lying on a stainless table in a solitary room. With the background of a machine-like drone, a voice asks Chambers what he would like for his meal, but Chambers refuses to eat. He asks the voice for the time of day, to which the voice responds, "there is no time in space." So we learn that Chambers is aboard a spaceship. This is where Chambers begins narrating the nightmare in the *Twilight Zone*. When 9-foot-tall alien named Kanamits descend upon the Earth, people first reacted with fear and uncertainty. However, these Kanamits soon showed their "true" intentions were obviously to help humanity as they suggested and implemented cures for all social ills we have even today. For example, they found a way to make unfertile soil fertile, and a way to ensure defense of every nation on Earth ending the needs for warfare. In no time, did humans on Earth come to embrace the Kanamits and accept them as a tremendous benefit to humanity. However, some people started to wonder, amid all this outpouring of kindness from these strange-looking alien benefactors, why would they bother so with us? What could possibly be in it for them? Nevertheless, the Earth people are now invited to the Kanamits' planet for a nice long vacation on their spaceship. Meanwhile, a book one of the aliens left behind should explain their motives, but it was not an easy task to decode and unscramble even the book title "To Serve Man." Michael Chambers, at the beginning of the story, is the world's decoding specialist with the U.S. government, but seems to have trouble deciphering what this book is all about, but there is an unforgettable ending to the episode, which I will save toward the end of this essay.

The Motives for Serving Others and Service Learning. Fundamentally different from volunteer work or community service, service learning (SL) emphasizes *reciprocity* by creating a learning opportunity for students while also serving the needs of a community or agency. Often, community service has come to mean a court-ordered sentence for misdemeanors. Moreover, community service follows a charity-based model in which there can be a patronizing distinction between those serving and those seeking services. In contrast, SL emphasizes an equal exchange between the two sides. However, SL goes beyond traditional community service by connecting the volunteer experience to specific academic outcomes,

which are then facilitated by reflection, discussion, and integration with academic course materials.

The purpose of this short essay is to reflect, from psychological perspectives, on the *motives* on the part of "those who serve" in SL and beyond, thereby possibly providing some stimuli for designing and implementing future SL programs.

Why Do People Want to Serve Others? : A Centuries-Old Question

Perhaps some variations of the Golden Rule, "Do unto others as you would have others do unto you," exist as part of almost all major religions in the world. We are often admonished to love our neighbor as ourselves. There are even frequent admonitions to extend the scope of concern for others beyond strangers in need to enemies as well (cf. Luke 6:27, 32). Similarly, the Buddhist has been taught universal love toward any living creature in *Sutta Nipata* (Saddhatisssa, 1985). The universal compassion advocated in such religious teachings is often considered to be a defining feature of world religions (Batson, 1991). Such an impulse toward love is clearly manifest in the lives of deeply religious individuals like Albert Schweitzer, Mahatma Gandhi, Marin Luther King, Jr., and Mother Teresa.

William James, a turn of the century Harvard psychologist, speaks of the concern for others evoked by religions his well-known book *Varieties of Religious Experience* (1902):

> A shifting of the emotional center towards loving and harmonious affections, towards "yes, yes" and way from "no," where the claims of the non-ego are concerned. … The shifting of the emotional center brings…increase of charity, tenderness for fellow-creatures (1902, p. 217).
>
> Religious rapture, moral enthusiasm, ontological wonder, cosmic emotion, are all unifying states of mind, in which the sand and grit of the selfhood incline to disappear, and tenderness to rule. … Like love or fear, the faith-state is a natural psychic complex, and carries charity with it by organic consequence (1902, p. 221).

James' view of charity is not one-sided. In fact, James points out some excesses that leave us asking, what is going on here?

> Francis of Assisi kisses his lepers; Margaret Mary Alacoque, Francis Xavier, St. John of God, and others are said to have cleansed the sores and ulcers of their patients with their respective

> tongues; and the lives of such saints as Elizabeth of Hungary and Madame de Chantal are full of a sort of reveling in hospital purulence, disagreeable to read of, and which makes us admire and shudder at the same time (1902, p. 225).

The above examples suggest an interesting possibility concerning the basic motives for engaging in services for others. Rather than the religious person being concerned for others in need, these examples suggest that the religious may be self-concerned, concerned to show others, self, and God that he/she is the good, kind, benevolent, and caring, and even heroic person that his/her religion celebrates. As such, charity may be motivated more by concern to put a star on your own crown than by concern to alleviate the suffering of those in need?

You may ask, however, what difference it would make as long as those in need get some kind of services, regardless of the motives behind those serving? The answer is that motives differ substantively in their consequences. If my motive to serve others is actually benefit myself for looking good, then my service may be relatively insensitive to others' actual needs. On some other occasions, my service may be just what does the most good, but on other occasions I may engage in dramatic acts of self-sacrifice that may appear very helpful but do very little any good. And on still other occasions, I may fail to respond to the needy at all because they do *not* fit my concept of how we should respond in order to show my compassion. This last possibility is evidently recognized in the parable of the Good Samaritan (as recorded in Luke 10:30-36). The parable extols the compassion of the neighborly Samaritan, encouraging the faithful to go and do likewise, while it condemns the piety of the priest and Levite, suggesting that it was their very religiousness that led them to pass by on the other side. The problem here is not that the priest and Levite never helped others in need. The problem was that their service or helping was confined to those situations in which it was recognized and applauded. Simply, the situation was not right in their eyes!

The question of basic motives for service has been around for centuries since the Biblical times. In fact, few questions have intrigued observers of the human condition as much as this question. Is the willingness to serve a genetically-wired impulse in all of us? Is it something that must be taught and nurtured in childhood and adolescence? Is there a genuine motive for service, such that people are willing to help their fellow human beings even when they have nothing to gain? Or, are people willing to help only when there is something in it for them? I would like to provide a brief discussion of a few ideas on the above questions from some psychological perspectives below.

Three Psychological Views on Serving Others

Darwin's (1859) theory of evolution and its social applications in social biology by Wilson (1975) and others have been used to explain such social behaviors as aggression and helping. However, Darwin himself doubted early on that his theory would explain our propensity for service or helping behavior. If people's ultimate goal is to ensure their own survival, why would they ever help others at a cost to themselves? It would seem, according to the principles of natural selection, that, over the centuries, altruistic behavior or service-related action would disappear, because people who acted that way would produce fewer offspring than people who acted selfishly. Genes promoting selfish behavior should be more likely to be passed on --- or should they?

How can evolutionary psychologists resolve this dilemma? Several arguments have been advanced. One is that since people can increase the probability that their genes will be passed along not only by having their own children, but also by ensuring that their genetic relatives have children. Therefore, the more an individual ensures his or her survival, the greater the chance that his or her genes will flourish in future generations. Natural selection should favor helping behaviors or acts directed toward genetic relatives. There is some empirical evidence to support the principle of natural selection in the animal kingdom (e.g., Greenberg, 1979) as well as in human communities (e.g., Burnstein et al., 1994). The latter study appears to show that people's choice of whom to serve or help is strongly influenced by the "biological importance" of the outcome: People are especially likely to help others who are most related to them when this help increases the likelihood that this person will have children. Imagine a real emergency situation (e.g., fire, earthquake). Who would you search first? Evolutionary psychologists do not mean to imply that people consciously weigh the "biological importance" rule before deciding whether to help or service. It is not that people are constantly calculating the probability that their genes will be passed on, but the genes of people who follow the "biological importance" rule are more likely to survive than the genes of people who do not. Thus, over the course of human history, evolutionary survival became ingrained in human behavior. These ideas must be understood, however, that just because people are more likely to save family members than strangers from a fire, it does not necessarily mean that they are genetically wired to serve genetic relatives. It may simply be that they cannot bear the thought of losing a loved one and so go to great lengths to save the ones they love over those they have never met. This implies that there are other possible social motives behind our inclination for engaging in services to aid others.

Another psychological perspective can be marshaled to explain why people want to serve others. Social exchange theory (e.g., Homans, 1961) argues that much of what we do stems from the desire to maximize our rewards and minimize our costs. It is further assumed that just as people in an economic market try to maximize the ratio of their monetary profits to their losses, so too do people in their relationships with others try to maximize the ratio of social rewards to social costs. Serving or helping others can be rewarding in a number of ways.

For example, serving others can increase the likelihood that someone will help us in return when we are in need. It is an investment in the future. Being a good person and treating others with compassion are the hallmark of a civilized society, that is what is known among early philosophers as the "social contract." We do want to believe that our kindness to others will be reciprocated at least some of the time in some future! The other side of the coin, however, is that serving others can be costly. Helping should decrease when the costs are too high, as when it would put us in physical danger, result in pain or embarrassment, or simply take too much time and energy. Sadly, the basic assumption of social exchange theory is that people help only when the benefits outweigh the costs. People serve others when it is in their own interests to do so, but not when the costs are way too much. Would you sign up for a college course in a remote area of the world where you have to pay for your professor's living expenses and tuition as well, whereas you pay just for your internet connection for a distance learning course in the comfort of your own home? In fact, social exchange theory portrays a rather grim, cynical view of our service orientation, and appears to demean any prosocial behavior! In fact, many psychologists are not happy with this theory to explain our behavior that includes our services to others. Instead, some social psychologists suggest that we help only for the sake of helping and service to other fellow human beings, to which we will turn next.

A third perspective concerning the motives for serving others comes from the idea that people's motives are sometimes purely altruistic in that their only goal is to help the other person, even if doing so involves some cost to themselves. But our helping occurs to the extent that we feel empathy for the person in need of help. Empathy here is defined as the ability to put oneself in the shoes of another person, experiencing events and emotions the way that person experiences them. According to Batson (1991), if we do not feel empathy, then social exchange concerns come into play, and we will probably go on without stopping to help the person in need. Nonetheless, it can be very difficult to isolate the exact causes of our tendency to help or serve others in such complex social contexts. Batson and his colleagues devised a series of studies to test their empathy-altruism hypothesis, and found indeed that people do want to help others when they experience empathy toward those in need, regardless of the costs involved.

Conclusions

In this short essay, I have briefly discussed three psychological perspectives on the basic motives for why people serve others: (a) our helping or serving others is a genetically-wired reaction to promote the well-being of those genetically similar to us (evolutionary psychology); (b) people are helpful to others so long as the rewards of such behavior outweigh the costs, making it in people's self-interest to help (social exchange theory); and (c) strong feelings of empathy and compassion often prompt selfless service. Each of these approaches has both strengths and weaknesses in fully explaining why we want to serve others, but I hope

they have provided some stimuli for further thinking about the motives for the centuries-old question of human services.

Now, finally, we are back again with the story of "To Serve Man," the ending of which has been suspended up until now. Once again we see Michael Chambers in the solitary room, recollecting the experience with the Kanamits. In fact, a few minutes before this scene, Chambers was waiting in line to board the spaceship. As he was ascending the steps, his assistant Pat rushed up desperately trying to get Chambers' attention, shouting, "Don't get on the ship. The book, "To Serve Man," it's a cookbook!" Notwithstanding, a struggling Chambers is now forced into the ship. At the end of the episode, Chambers faces the camera, and speaks directly to us, saying that whether we are on the ship with the Kanamits or back on Earth, it does not matter, since we will all be on the menu!"

What does it mean to serve others? Do we serve others purely out of the goodness of our hearts and/or some nebulous combinations of our self-interest and altruistic motives? Regardless of any answers to these and other questions, we should remind ourselves that we should not impose our services on anyone we meet or study, whether the person wants it or not. Otherwise, it will be another Twilight Zone episode we must have to entertain.

References

Batson, C.D. (1991). *The altruism question: Toward a social-psychological answer*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.

Burnstein, E., Crandall, C., & Kitayama, S. (1994). Some neo-Darwinian decision rules for altruism: Weighing cues for inclusive fitness as a function of the biological importance of the decision. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 773-789.

Darwin, C.R. (1859). *The origin of species*. London: John Murray.

Greenberg, L. (1979). Genetic component of bee odor in kin recognition. *Science, 206*, 1095-1097.

Homans, G.C. (1961). *Social behavior: Its elementary forms*. New York: Harcourt Brace & World.

James, W. (1902). *Varieties of religious experience*. New York: Longman.

Saddhatissa, H. (1985). *The Sutta-Nipata*. London: Curzon Press.

第Ⅱ部

サービス･ラーニング事例集
Case Studies in Service-Learning

9. Writing Service-Learning Cases: Why and How?

Katsuhiko Mori

Why Write Service-Learning Cases?

Why do people serve people? Anselmo Mataix answered this question with reference to Mother Teresa, who served the poorest of the poor because she saw God in them.[1] As one of the ICU's mottos—"to serve the Lord and people"—says, to serve people can be similar to serving God. The word "Lord" can be replaced with "truth." People serve people to learn the truth. It is the same in science and the arts.

Faith and science are often misrepresented by many people as being incompatible. The history of science, however, reveals that belief in God formed the basis for the development of the modern sciences, as it entailed a view of the cosmos as having regularity and order believed to be planned and created by God.[2] As a social scientist, I continue to commit myself to the search for orderly global peace and governance. As an educator, I have attempted to become what William Arthur Ward called "the great teacher." According to him, "The mediocre teacher tells. The good teacher explains. The superior teacher demonstrates. The great teacher inspires."

Through my teaching experience, I have found that my students were "inspired" in at least three ways and that these three ways corresponded to the three main methodologies of scientific research. First, they are inspired by struggling for answers in an inductive way. I have been using the case method of teaching and learning for more than 10 years. Unlike research cases, no single answer can be found in teaching case materials. Learners are expected to identify problems and to find their own answers to them through case-based discussions. Like research cases, however, the case method of learning is based on induction. Therefore, the great case teacher as well as learners should fully understand the strengths and limitations of the inductive method.

Second, learners can also be inspired by deduction. University students can be exposed to a variety of theories and general principles in lectures and readings. I have also been using policy debates in my International Relations (IR) course for several years. After introducing contending IR theories, I encourage students to apply them to a series of policy debates. By so doing, they can acquire the theoretical concepts and logical skills deductively in a very dynamic way.

The third method of learning is empathic understanding through participatory field work and performing international service-learning. Students are considerably inspired by

participatory experience in real-life situations and by interactive dialogues in the real world. By being exposed to actual situations, learners can consider the significance of what they can do, what they cannot do, and what they should do.

To write a case on service-learning experiences is an integrated process of academic learning and hands-on service activities. Through writing cases, learners can reflect on and reconstruct what they learn through service. It is often difficult for service learners to verbalize their experiences, and yet doing so can be a valuable opportunity to review and reexamine their experiences. Reflective oral presentations to their advisors and fellow learners can be a good starting point to identify key episodes and events to be recorded as a case.

Through discussions of such cases in a predeparture stage, by those who wish to undertake service-learning activities, personal service-learning experiences in the past can be translated into shared experiences and wisdom for the future. Toward this goal, the case studies that follow in this volume were written by three International Christian University (ICU) students who participated in international service-learning arrangements in the summers of 2004 and 2005. As a pilot phase at the ICU Service Learning Center, these cases were chosen in the context of new directions in our service-learning programs.

The first case study on the International Partnership for Service-Learning and Leadership (IPS-L) in New York can be used for students as well as faculty and staff to familiarize themselves with the concept and value of service-learning. Student participation in various work camps and international internships has been evident since the early years of ICU history, and yet it was not until the late 1990s that a credit-level course of international internship was set up and the concept of service-learning first appeared at ICU. It was in 2002 that the Service-learning Center was established at ICU. Thus, this case study can be used as a tool for spreading and networking service-learning programs at home and outside ICU.

The second case study is based on a student's experience at the Development Action for Women Network (DAWN) organization in the Philippines. The ICU established the Center for Gender Studies in 2004 and launched a new college-wide educational program in Gender and Sexuality Studies in 2005. Gender studies is an emerging field that requires an interdisciplinary approach. The DAWN case study also encompasses the fields of law, political science, economics, and sociology and cultural studies. Similar case studies on gender and development were also developed at the Institute for Gender Studies at Ochanomizu University, which is expected to utilize them in contributing to knowledge accumulation in the field.

The third case study is on the community-based project implemented by Washington State University and local partners in Malawi. In 2005, ICU started a four-year Center of Learning Good Practice Program on service-learning, which includes building an international network of service-learning in Asia and Africa. Africa is the priority area for today's international development, and Malawi was the first field in Africa for ICU's service-learning

programs. The Malawi case study can also be used for the introduction of SWOT analysis and research design for interviewing local people.

How to Write a Service-Learning Case

A case study is a narrative based on a real experience, which may have a retrospective or decision-forcing structure.[3] A key decision maker in a case study can be either a participant in service-learning, i.e., the case writer personally, or somebody else whom the service-learning participant has encountered in the service field. The participating ICU students are encouraged to keep journals during service for at least 30 days of voluntary activities. Rather than writing a complete review of their experience, they are expected to focus on a couple of key events and episodes that they felt were the most important experiences or problems. Such events may not always be happy stories. Rather, they are frequently ethical dilemmas, tensions, contradictions, and even conflicts.

There is no fixed format for such a case study, and yet one typical structure might be something like the following.[4]

Title

Introduction

Background

Opening/beginning of the narrative

Key incident/episode/event

Additional events/implications

Climax of story/moment of decision

Closing

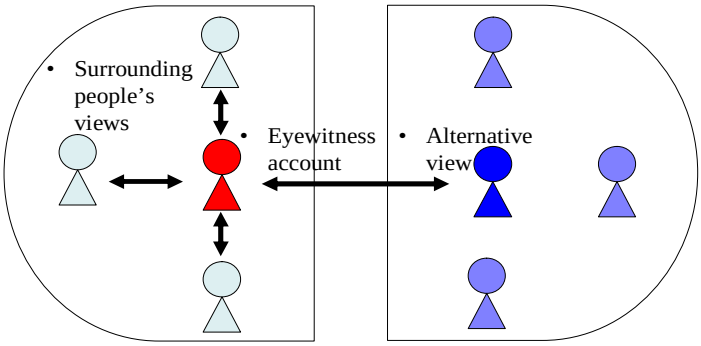
Epilogue or sequel, if appropriate

Appendixes, such as a map and an organizational chart, if necessary

Questions for discussion

The title and introduction are important, because they can draw the reader's attention to key issues. The narrative is not fictional, but a retelling of key incidents/episodes/events from different perspectives. A background section provides readers with the context in which service-learning experience took place. It may include a concise description of who did what, when and where. General and specific information regarding a host agency may be described here. Then, the case starts with a recount related to key service experiences.

This is not merely the subjective experience of a specific student nor an objective presentation of scientific data. Like the movie *Rashomon* directed by Akira Kurosawa,[5] it is a story reconstructed intersubjectively by two or more different people, and therefore it has no clear moral. Like a journalist, a student as a case writer should cover the perspectives of at least three different witnesses. One is an eyewitness account, which focuses on a main figure or key decision maker who witnessed the problem. It can be a participating student himself or herself. The second type of coverage is an out-group person who has an alternative view, opinion, or solution for the problem. The third type of coverage is from in-group people who surround the main figure, such as senior or junior colleagues or coworkers. Lively descriptions of different people will facilitate active case-based discussion in a classroom. By reading and discussing the case narrative, learners can identify the problem, and desirable and feasible options for resolving it. There may be no correct answer for a decision-forcing case and no correct understanding for a retrospective case. The truth is hidden in the embedded story.



The climax of the narrative may not mention the actual decision taken by the main character, and there may be no record of the consequences of specific actions taken by the character. This is because the main purpose of the case study is to provide learners with a context for discussion rather than to inform them of the actual course of action. It should be noted that the actual decision taken by the key decision maker may not be the best option or the right answer. If appropriate, the actual decision taken can be mentioned in an epilogue or a sequel. By comparing and contrasting different options for the problem, learners may be able to devise a more desirable and feasible answer.

Appendices of maps, organizational charts, a chronology and a glossary of technical terms are offered to facilitate deeper understanding of the narrative, if necessary. I have also

added a set of questions for discussion for the respective case studies, so that case-based discussions can be effectively managed in the classroom.

Two common mistakes of beginner case writers are analyzing and editorializing. The case study for the case method of learning is not a research case study in which the problem is to be analyzed by the case writer. It is other learners who are to identify and analyze the problem in the case material. Therefore, over-analysis of the problem by the case writer should be avoided. Editorializing is a value-laden judgment of the episode by the case writer. Again, judging what is good or bad is for learners who read and discuss the case material. It is acceptable when the actors in the case material make value-laden statements, but the case-writer should avoid making ethical judgments in the narrative. When the case writer himself or herself is a character in the study, he/she can quote his/her own words or write the narrative in the third person.

Another tip of successful case writing is the distinction between ethical disguising and fictionalization. The narrative story is based on a real experience, and therefore the real names of key characters and institutions may be used to ensure the authenticity and accuracy of the story. However, it is necessary to maintain academic integrity and to protect personal and sensitive information. To ensure confidentiality and sensitivity, ethical disguising of names of characters and institutions may be necessary. It is also important to obtain release approval from the host agency of service-learning.[6]

---

[1] Anselmo Mataix, a keynote speech for the 25th International Symposium on the Promotion of Global Justice, Sophia University, Tokyo, December 10, 2005.

[2] Yoichiro Murakami, *Kindai Kagaku to Seizoku Kakumei* (Shinyosha, 1971).

[3] John Boehrer, "Teaching International Affairs with Case Studies," http://ecase.georgetown.edu/boehrer.cfm

[4] Adopted from Laurence E. Lynn, *Teaching & Learning with Cases* (Chatham House Publishers, 1999), p. 138.

[5] *Rashomon*, directed by Akira Kurosawa (1950). The original story for the movie is *Yabu no naka* (In a Grove) written by Ryunosuke Akutagawa (1922).

[6] A release form used at ICU's Service Learning Center was adopted from Michiel R. Leenders, Louise A. Mauffette-Leenders, and James A. Erskine, *Writing Cases*, fourth edition, (Richard Ivey School of Business, University of Western Ontario, 2001), p. 132.

11. What dawned on me?: Service Learning at the Development Action for Women Network in the Philippines

Ran Yagasa

Prologue

"Scanty, seductive and provocative!" It isn't too hard to find a magazine ad with a bikini girl and sensational catch phrases hanging from the ceiling in an ordinary scene on a train that connects every city of Metro Tokyo. In every city there's a venue for blind dating, shady clubs, and bars. Sexuality that exists in Japan is sometimes referred to and more often criticized as masculinist sexuality or androarchy. Living life in such an environment as a student in a boy's school in Saitama Prefecture, I experienced and still experience how the materialization of the female sex proceeds and am formed on a daily basis through various types of "media". It could be the pornography my friends smuggled into the classroom, or it could be the flyer that seeks new members for a swimming team. It seemed to me back then that even the uniquely mono-gendered environment/culture of a boy's school was encouraging the development of such attitudes in forms of, for instance, a little chat and jokes among students and teachers. Having lived through such teenage experiences, I was interested in the mechanism of prostitution and human trafficking that are backed up by the masculinist sexuality that exist in Japanese society.

When I traveled in the Philippines in 2004, I had a short conversation with an old lady at a food stand. "What do you think of entertainers in Japan?" The old lady in her 60's asked me as she prepared my garlic rice and pork adobo. It was the last day of the work camp I took part in 15 months ago. Having completed the two-week-long stay in an orphanage in Pangasinan province, every one of the campers was eating their fill of the very last meal of the vacation. Maybe it was some of the campers' attitude that appeared perky and arrogant in the eyes of some people like her, or maybe it just came out of her simple curiosity having heard that the Korean looking guy standing in the line of her food court was, in fact, Japanese.

Since the time I stepped into Ninoy Aquino International Airport, I expected to be involved in this sort of conversation, or rather hoping to be I should say. To the contrary, I grew a little nervous to the question suddenly directed at me. I could see her curiosity and hospitality that also harbors deep resentment and sadness. As she continued to tell me that one her relatives is in Japan working as an entertainer, I felt the question start to transform, to sound more like, "What do you know about our society, your society, and what's really going on out there unnoticed?"

This became a sufficient trigger for my motivation for service-learning in the Philippines. Filipino society and culture filled with diversity was another reason for my choice. Regarding its religious diversity, 85% of Filipinos are Catholic, whereas Islam, indigenous

mysticism and animism take their place in the people's spiritual livelihood. Regarding cultural diversity, this land has gone through different eras and has been a crossing point of cultures and histories: with the indigenous Filipino foundation that lies at the bottom, people have adopted, received and transformed the "imported" culture, namely the Spanish domination that lasted for 300 years, American influence that followed, Muslim Culture that has lasted since the 14th century, and the flow of Chinese influence that came constantly from the continent throughout history. Since the time I visited this country for the first time in summer 2004, I've been fascinated by the different faces it reveals to me.

Another reason for my service learning in the Philippines is due to language. I thought I really needed to get involved with an NGO if I wanted to know the organization, the role it plays, and the issue itself, deeply and to get the most out of my prospective experience. For the sake of better engagement, I needed to speak the language of the country; or rather the languages spoken in the country had to be the languages I spoke. That naturally boiled my choice down to the Philippines where the vast majority can speak English, which was my own acquired language other than my mother tongue. There are still more incentives for the participation on the program, inter alia, the pure interests in NGOs, ICU's Service Learning Program itself and how the International Human Rights Laws are utilized at the grassroots level.

I found my host agency for service learning through online research, with advice from ICU's Service Learning Center and my advisor Prof. Temario Rivera. When I contacted the Polaris Project, an NGO originally founded in America, which mainly deals with international human trafficking; I received an e-mail response that gave me the key information on the Development Action for Women Network (DAWN), where I finally decided to work.

DAWN was founded in February 1996. DAWN's Philippine Office has 6 staff members, and several Japanese and Filipino volunteers. To date, it has handled cases of 293 women. Nine (9) of its clients/members are part of the SIKHAY program. SIKHAY, which is short for "Sikap Buhay," is a Filipino phrase meaning self-empowerment. DAWN's office is located in a building in Ermita, Manila. Two rooms are used for office work and daily meetings, and one room for the SIKHAY sewing project. A~~nother~~ three-storey building is also being rented to house the Sikhay hand-weaving and tie-dye projects, and it is serves as temporary shelter for clients in dire need. My service work started from July 25, and lasted through September 2, 2005.

DAWN provides comprehensive support including counseling and program for independent livelihood to Filipino female migrants who used to work as entertainers in Japan. It also provides legal, paralegal and social support for Japanese Filipino Children (JFC), children with Filipino mothers and Japanese fathers. It conducts research and advocacy activities in relation with female migrant workers rights and the Philippines' overseas employment policy. It also conducts theater workshops for its JFC and women members through the Teatro Akebono program. Since 1998, the JFCs have performed their musical

plays in the Philippines and in several prefectures in Japan. DAWN is currently handling 117 active cases.

Social and Economic Background

"Oh, so you're from Japan?" Rubbing his hands across the steering wheel, the taxi driver responded with a slight surprise and double-faced smile. It wasn't a good idea to tell my true nationality to the taxi drivers in Manila, especially when you don't know the price for a ride. I had just been charged 150 pesos for the ride to the office the day before, about three times the regular fee. I did it again. I decided to give up the negotiation that comes before getting out of the cab, and to enjoy the five star ride back home. "So what are you doing here in Manila? Do you work for a company?" "Yes," I replied. On the previous day, I was a Mongolian, and the day before, a Korean basketball player; different ride, different identity. If not from a bad intention, it was simply fun to observe what sort of qualities and images are labeled on each nationality by the people in Manila.

"Do you have kids?" "No." "Are you married?" "Yes." "So you're going to have kids in future right?" "I don't know, maybe." As the cab turned the last corner three blocks away from home, the taxi driver continued; "Here's my number. If you ever need me in Manila, or in Los Banos, or even in Japan, just call me ok?" "O.K., I will do that." "Actually, you can hire me in Japan! I can be your special driver for your family." I chuckled with his sudden confession. "This car is all purpose! It can fly, go into the ocean! Anywhere you wish, I will be there!"

Living in a society where the potential unemployment rate is around 40 percent (The figure is about 11 percent in 2004), it was easy to feel the figure in my own bones. Every single taxi driver asked me to take him to my country for my personal use. And even some of the people I got to know through DAWN wanted me to help them with job searching in Japan. It was more than enough to understand, that this devastated domestic economy was what is making many Filipinas leave their country for foreign lands in search of a better life free of hunger and pain. I couldn't help but wish the James Bond car will vanish from this country.

Migration has become an alternative to the domestic economy in several countries, including the Philippines. It is due to international economic imbalances, poverty, and environmental degradation combined with the absence of peace and security, the existence of human rights violations, unequal development and unfavorable judicial and domestic institutions. According to the Philippine Overseas Employment Agency (POEA), within 933,588 Overseas Filipino Workers deployed abroad, 71,489 Overseas Performing Artists had reportedly flew to Japan in 2004, and the remittances from the OFWs ($8,550,371 in 2004 just by official record) has been a major driving force of the country's economy.[1] The Philippine government itself has been hammering out and promoting its overseas employment policy, encouraging more nationals to leave the country for better income. The pre-departure program of the government, on the other hand, lacks quality and complete contents. As a result, various

side effects of the migration society has been revealed in the forms of brain drain, violation of contracts, various human rights violations and emotional distress of the migrants.

It is said that the history of Philippine migration can be divided into four major stages. The first stage was the early 20th century when thousands of Filipinos migrated to U.S., mainly of the states of Hawaii and California, seeking jobs at fruit ranches and canneries. The second stage, the era of brain drain, came after WWII, and professionals such as accountants, nurses and doctors became the major actors of migration. The mid 1970's saw the third stage. With the Oil Shock and the boosting economy in the middle-eastern region that followed, demand for labor forces in the region also boosted. With the country's economy not performing well, the Marcos Administration's answer was to export its nationals abroad. Many of the migrants worked in sectors such as construction and manufacturing. As the labor needs industrial-construction sector in the middle-east declined, international labor demand shifted into the service sector, including office work, nursing, household management, and entertainment. The actors of migration shifted accordingly, from men to women after the 1970's. This is called the "Feminization of Migration."[2]

Just a simple online search of "Philippine Pub" gives us a glimpse of reality in entertainment industry that is deeply rooted in Japanese society. It is often argued that the *Japayuki* issue has become history. On the contrary, the statistics of Overseas Performing Artists (OPAs), an equivalent to "entertainers" provided by the POEA, indicates that the number of Filipinos working in Japan is presently increasing. In 2002 this figure reached 73,685, the largest number ever recorded, most of them female migrants. It is clear that the Japanese sex industry is not yet declining, but the public attention and understanding of the issue has strayed.

In 1981, an agreement was signed between Tokyo and Manila to promote the issue of entertainment visa for Filipinos. Since then, short-term entertainment visas have become a vehicle for Filipino women to migrate legally to Japan for economic exploration. Despite its promotional measure, the Japanese government has not extended to the Filipino migrants the same legal privileges, rights and protections that are enjoyed by their Japanese counterparts. As a result, exploitation and abuses towards the socially weak OPAs have risen to the surface. OPAs granted entertainment visas are trained to perform dances and songs at pubs and clubs, and their performance is supposed to be limited to such areas accordingly. However, many of the OPAs are burdened with debt for the pre-departure training at the private recruiting agencies, forced to engage in hostessing, *Dohan* (arranged dating with customers), subjected to flying booking (the transfer of "entertainers" from one club to another), intermediate exploitation, sexual exploitation, and other hardships and disadvantages such as delayed-payment, underpayment, or non-payment of wages, overtime pay, and non-coverage of workers insurance. Apart from their troubles at the workplace, being alienated in an unfamiliar culture, some OPAs can easily become intimate with the customers, resulting in unsuccessful marriages. In many cases, their reintegration into Filipino society is another pain they go through. Culture-shock and *Japayuki* discrimination in Philippine society and the JFCs born

between Filipino women and Japanese men, and the series of legal, identity, and economic disputes with Japanese males after divorce, are among other things that leave women and children with psychological scars.

I've read some materials on Trafficking in Persons (TIP) issues before I actually stepped into Manila. Many of them referred to the cases where innocent girls are deceived and smuggled into Japan for the purpose of prostitution. It is often the case that they were told that they will be working in a restaurant. When compared with victims of other nationalities, the unique tendency of Filipino entertainers appears. As seen in the research by DAWN, more than half of the women are multi-timers, meaning they have experienced more than one travel despite their distressing experiences.[3] Of course, this does not mean that every entertainer knew what they will be engaged in because what comes out on the record is just a tip of the iceberg. However, we can easily grasp the devastating economic divide that lies in the Philippines, which is making people to leave for better income and livelihood.

The Anti-Trafficking in Persons Act (Republic Act No. 9208) of the Philippine provides a detailed definition of the TIP crime:

> "The recruitment, transportation, transfer or harboring, or receipt of persons with or without the victim's consent or knowledge, within or across national boarders by means of threat or use of force, or other forms of coercion, abduction, fraud, deception, abuse of power or position, taking advantage of vulnerability of the person, or the giving of payments or benefits to achieve the consent of a person, having control over another person for the purpose of exploitation which includes at a minimum, the exploitation or the prostitution of the others or other forms of sexual exploitation, forced labor or services, slavery, servitude or the removal or sales of organs."[4]

Despite the very comprehensive act, the trafficking within and from the country still remains active. Ann M Kambara, of the U.S. embassy in Japan, in her interview with *Asahi Shimbun*, points out that the "absence of agreement" is enough, but not necessary to form the crime of TIP. Women uninformed about the actual job and the minorities fall under the defined victims if TIP, even if such consent existed.

In comparison, DAWN takes an expansive definition of Human Trafficking than other definitions taken by the other treaty bodies that are considered authoritative, such as the U.N. and the U.S.A. With regards to the huge gap between its system and reality, and the system itself, from recruiting, receiving to employment form, that are filled with various forms of exploitation and human rights abuses, DAWN considers the OPA exchange system as one type of TIP, and act to curb the situation, in collaboration with different actors.

During the DAWN-Japan study tour at the Japanese Embassy in the Philippines, things we could discuss were more than the organizers had expected. "We consider the JFC issue as a private matter, which should not be dealt with by the government." That was their answer to

our question. It's been long since DAWN asked for the support for JFC whom they considered as the result of organized TIP. It must be one of the most debatable questions of the entertainers-issue to decide, to what extent it should fall under the public (i.e. the government's) sphere. In what aspect, to whom, and in what degree should the government take responsibility for the trafficking that is currently taking place in its own backyard? Compensational support is never easy to draw a line between public and private. Some women dare migrate in search of their fantasy of life in a "well-off Japan" or in search of for a Japanese husband, while others do so from pure economical aspirations, knowing what they will probably do.

Aside from the support for JFC, as gender and sexuality studies develops, the legitimacy of "prostitution" still remains debatable. However, the absence of legal recognition and protection is making entertainers vulnerable to breach of contracts, power and sexual harassment, extra-contractual work, flying booking, kickbacks, rape, violence and abuses, opening space for possible trafficking. Their fundamental rights, as they are entitled to as workers, citizens and humans who reside in Japan, have to be recognized and protected irrespective of their motivation.

In the meantime, U.S. Department of State has issued the Report on Trafficking in Persons in June 2004, which listed Japan on the Tier 2 watch list. In response to this report, the Japanese government finally went into action to combat the said TIP issues.[5] According to the Japanese Embassy in the Philippines, the new immigration policy requires entertainers to have two years experience outside Japan or two years of formal schooling in singing and dancing.

In 1998, with an invigorated public opinion, the Clinton Administration suggested the "3P Campaign" in combating TIP at the domestic and international levels: prevention measures, protection of the possible victims, and prosecution of the offenders. This criterion is still useful in judging countries' commitment and efforts in the war against TIP. Japan has made a big jump in its anti-trafficking policy in terms of preventative measures. The government must thoroughly implement the adopted action plan for combating TIP, or *Jinshin torihiki taisaku koudou keikaku*, with improvements to protection and prosecution.

Inevitably, the proposed new action plan and policy provoked the Philippine government, "entertainers," and private recruiting agencies. I was lucky enough to attend a public hearing at the Special Committee for the Overseas Workers Affairs that was held in August 10, 2005. "So, how does your organization receive funding from Japanese government? And exactly how much?" The congressman sitting opposite to us argued with a little exaggerating gesture. It was quite obvious that his intention was to prove as if DAWN is inappropriately influenced by Japan's ODA. I cannot but to feel indignation over his uncooperative attitude. Much time was spent on fact finding for the members ignorant of the issue, and unconstructive criticisms directed towards Japan and some NGOs including DAWN. It is time both the Japanese and Philippine governments and respective people should start facing the inappropriate deeds and search for ways for peaceful coexistence.

Pains and Gains

I've been to foreign lands quite a few times, and this trip was supposed to be like every other trip I had, with some new encounters, experiences that grabbed my fascination, ups and downs and small chats and small discoveries. At least that's what I thought before I hired a taxi to the YMCA for another sleepless night. Nonetheless, the very first day of the Philippines and how she welcomed me were impressive enough to make me understand my sweet expectations will not be fulfilled.

Bang! The taxi driver and I, having chatted merrily until a little while ago, grew alert as we heard the sudden explosion to the rear of our taxi. It took sometime for us to realize what on earth had happened to us. The back window, what used to be a transparent window, was all smashed and white, and it was almost coming off towards me. Evidently, someone stoned us while the cab was stopped at the traffic light. It was already 1 o'clock in the morning, and the heat from the daytime has subsided, yet the never ending stream of taxis and tricycles remains. "Are you ok? Did you hurt?" After he said something angrily in Tagalog, he offered. That night, lying on my bed in my gloomy looking room of the YMCA, I looked back on the event that just happened. I was a stunning, if not scary happening. I felt like I had touched a part of this world, a tiny part of this huge society called the Philippines, through my skin and bones. One might think how badly behaved the night of Manila is, or how the security is poor without decent police forces. But I almost felt like I've touched the people who are striving for their life at a very different level as people are striving in a country like Japan. One piece of stone was good enough to break the bubble around me, and to make me remember how important it is to give a deep observation at any event and moment during my stay.

Different Visitors, Different Learning

Through meetings and interaction with many people, I learned so much from the meetings of different people. As I worked as a member of DAWN, it became something that I cherish to help organize, and be present at the venue for the encounter of differences. Through such experiences, I came to reconfirm the profound relevance of past and future, private and public, generation and generation, connected at the axis of time, in rethinking and building Japan-Asia relationships at the grassroots level.

A guest visited the DAWN office one day. Later I discovered them to be a member of the board of directors of the organization. It was one of our daily routines to receive occasional guests; government officials, other NGOs, local radio stations…some came in support of DAWN, some came for negotiations, and others, from big groups to a few individuals, came from the pure interest in the organization.

The visitor, Bishop Julio Xavier Labayen, is a member of DAWN's advisory council. Miss Carmelita Nuqui, the Executive Director of DAWN, introduced me to the dignified old man wearing a white Barong Tagalog (traditional Filipino formal costume) and a warm

personality. His handshake, full of wrinkles, made me think of his people and history he has come through.

Previously that day, I was discussing with one of the Japanese volunteers a book written on Filipino Comfort Women during the Japanese Invasion. The content was largely on the civil attempt led by an NGO in asking the Japanese government for compensation for the victims, and the man is his 60's seemed a little irritated with what he read. "Why do we have to keep begging for what we did 60 years ago?" Honestly, I was a little shocked to hear this comment, which may still be very common in present Japanese public opinion, especially from someone who engages oneself to the JFC issue. He even criticized the education that probably will bring this sort of movement.

Why? Was it a generational difference among us that made our perception so contrasting? Whether it is the so-called *Yasukuni* problem or postwar compensation and reconciliation, or wheter it is at the national diplomatic level or the civil/private level (meaning true reconciliation between people, not just their government), there's a wall that prevents us from facing the problem. The wall is built by the lack of understanding of others, mainly that of offenders to the victimized. The issue of TIP in Japan, Filipino entertainers and the issue of Wartime Comfort Women cannot be irrelevant, for they're equally backed up by Japanese discriminative attitudes towards South East Asians that exist at the conscious and subconscious levels, and the lack of understanding of the victim, their pain and suffering, are once again, similarly forgotten. What was committed by the government during the wartime now comes to be committed by our own society, changing its sector and its form.

"I'm glad to know that people like you're with us," unexpected words came out from his mouth after I explained what I felt through the set of events and my own opinion about it. I was thankful and embarrassed at the same with his words. But it must have been his real intention. His handshake was warm yet steady.

According to a former American Foreign Service Officer, Joseph A. Mussomeli (Chargé d'Affaires), culture of forgiveness that is rooted in this society is one of the factors undermining the rule of law, consequently hindering the countries' social justice, order and development.[6] It is persuasive in a way. People tend to forgive achieving reconciliation without resorting to the rule of law. What we ought to see and learn out of their culture of forgiveness is immeasurable. Offenders can be apt to forget what they have done, while victims still suffer from the incident.

Receiving TOS

In early August we received TOS. Tears of the Sun? No. It is not about that propagandistic Hollywood film with Bruce Willis, although it has to do with the American warfare and army bases that spread globally for the last half century. Another memorable visitor was the group of American students with the study tour organized by an American based NGO named Tagalog on Site (TOS).

TOS was founded with the mission to spread understanding of the Philippines' culture, history, political and economic issues and contemporary life through workshops and study-abroad programs.[7] The programs were intended mainly for, but not limited to, the young Filipino-Americans whose predecessors migrated from the Philippines. Some of the members of the study tour we met this time were so-called "Amerasians." As one can easily tell from its spelling, Amerasians are the people, who have an American parent and an Asian parent, in many cases, the ones who born between American fathers who were soldiers stationed at American bases, and local Asian women. Apparently, the program seemed to be the venue of identity-seeking for the fellow students, almost in the same way the Teatro Akebono is to JFC.

Whenever we receive a study tour from outside, we always went through three sessions; introductory session with video clips and presentations, visit to the SIKHAY weaving/sewing projects, and discussion session where women would tell their own stories from pre-departure until they met DAWN. From the harassment by the club owner to the separation from their husbands and the love of the children, they talked as it happened. Needless to say, the wound still hurts just from telling their stories, but they dared to continue with tears in their eyes. "Do you pity us, what we did and what your parents did? Leaving our homeland in the first place?" A mother asked to the students. "No, we wouldn't! If I were you, I'd still have chosen the same." One student replied emotionally, also with tears. We wouldn't be able to start the third session without a box of Kleenex, because their story would cause the whole room to start crying by the end of the session. It was impressive and touching to see how they shared and connected with each other with a catalyst called "lost family ties," despite the great gap between them in terms of nationality and generations.

However hard I try, it never is easy to learn things just through books. I knew the situation that maybe faced by the women from the books DAWN recommended to me before I left for Manila, and I knew some of the administrative failure of the Japanese and Philippine governments in combating entertainer issues, also from books. In the meantime, human rights violations, or "Case of an 18-year~~s~~-old Filipina," those printed words cannot tell of what they experienced with a slight reality. It was the moment that I saw the epitome of their "life," instead of a "case."

It is sad and ironic that Japanese society, which has been equally victimized by the aftermath of postwar presence of U.S. forces just as the Philippines, has turned to an offender at the same time, generating distressed family ties across the region. Filipinos may be "equally" and unjustly burdened with the role as a scapegoat Okinawans are.

Gender and TIP

I was very surprised, but not shocked, to know that the office had fewer male staff as I had expected. I was imagining that there might be not many male staff mainly because the women returnees can be very sensitive not only towards Japanese males, but men as a whole, after the experiences and treatment they have gone through in Japan. For this reason, I would ask if I was acceptable in the very first e-mail that I sent to DAWN, as a Japanese male.

From one perspective, I could argue that this situation as the promotion and protection of female migrants' rights and social welfare is unjustly stuck into the small tuna can labeled Women-Only, when it should be confronted by the society as a whole, which is reflecting the social awareness Japanese public. This, I believed without a doubt, is pointing out one aspect of the reality. However, as it turned out as I engaged in my service, the truth wasn't just one. Sometimes, I thought public awareness was not enough, sometimes I felt otherwise.

Before, during and after my service experience, quite a few people asked me why on earth I chose the organization like DAWN? I would ask in return, "Why shouldn't I?" wondering "why do a lot of people still try to exclude men from gender issues," or "isn't it this act of categorizing the issue (of TIP as well as Filipino migration) into the separate file called Gender Studies, that is narrowing the width of activity?" In other words, isn't the gender perspective, merely one of many approaches for the solution of the matter? This importance for comprehensive perspective, I believe, is exactly what DAWN's holistic approach is trying to convey, and accomplish.

It should not be forgotten that the public ignorance and indifference towards migrants, entertainers, Southeast Asians, female workers, foreigners, and those who're considered as social minorities generally can function as a device that produces institutional violence within our Japanese society. Society where people, without giving consideration in terms of gender, willingly involved with the promotion of female migrants rights and advancement of their life, in an appropriate way with regards to the gender of participants, is looked to.

"What exactly is wrong with Filipino migration and sex industries in Japan?" The question might sound provocative for those who struggle for the protection of female migrants working in Japan's sex industry. However, this dear question highlights the core problems of the issue. "Why just female workers have to be brutalized?" The answer to the question is not just one, but various causes are interwoven. The direct factor could be the brutal nature of Japanese crime syndicates that control Japanese sex industries. Other factors might include the situation where women cannot report the incidents for the fear that they might be arrested for the falsification of their official documents, inappropriate and inadequate pre-departure orientation the Filipino government provides, lack of knowledge by the entertainers of legal matters and the factual job they will be engaged in, outsider-unfriendly immigration policy, and the public atmosphere where the victims of the TIP can easily be considered criminals who have violated the immigration law.

Let alone the entertainers' incentive for migration backed up by the economic divide exist globally, the primary explanation lies in Japanese society itself. The TIP system is supported by demand side, the Japanese sex industry, and namely by Japanese male dominant sexuality. In a way, Japanese customers, and the society that let its system survive, are directly or indirectly forming the environment where the possible brutality and distress towards female migrant could easily occur. More realistically speaking, and to limit the subject to the Filipino female migrants, the main reason appears to be the lack of respect by male customer.

A man in his 60's, who himself used to be a customer, emphasized that regular users of Philippine Pubs in Japan, day in and day out, are generally from the lower income classes. What is described above is just one example of many cases probably experienced by some female migrants. The situations Filipino females were put in, the people they met, and the events and treatment they've gone through at each pub and clubs literally depend on the case.

Holistic Approach

One of the most precious discoveries I encountered was DAWN's holistic approach. From the complex nature of the issue they deal with, DAWN takes a comprehensive approach to the situations Filipino entertainers face. It is not only the matter of women who have returned from Japan, but it is also the matter of their children, their identity, education, financial support, and reconciliation and settlement with their husbands. It is not just a matter of self employment, but also a matter of social independence and reintegration to the Philippine society and local community. Therefore, DAWN's solution is not limited to the SIKHAY program, but also extended to counseling services, legal and paralegal support, keeping dialogue with other NGOs, private and government agencies, Teatro Akebono and other research and advocacy groups. These issues can only be effectively dealt by confronting and addressing them from different angles in a flexible way.

In the very same way, I was able to learn and benefit from DAWN's holistic approach. I would say that my interests were a little too focused on the International Law when I started with DAWN. To be more specific, I was just interested in the issue of "TIP," in relation with the role of "International Law" of the "present" world. A six-week-long stay let me realize the true value of DAWN's holistic approach. The issue cannot be addressed just through a legal approach, but necessitates a perspective from politics, economics, gender at the international, regional, bilateral, and intra national levels, and global governance that counts different stakeholders. At the same time, the issue of TIP should be captured in a bigger context called transnational migration, with the respect to the issue of war time comfort women, closely connected with time axis. DAWN allowed me to realize "the significance of approaching the matter with organic linkage from different angles without holding onto mono-focused attitude."

Working with Cultural Literacy

There may be many key factors and qualities one should have in working in international organizations: responsible and dependable characters, a sense of humor, connection with people, clear-cut faith, and solicitude to name a few. However, in my personal experience, cultural literacy was what it takes the most for the smooth management of such a multi-cultural working environment.

Cultural Literacy, in a narrow sense, can be defined as the language ability, knowledge of history and culture of the host country or the generosity towards differences. In contrast, Cultural Literacy in a broad sense, can be defined as the "ability to defect oneself from a

particular cultural image through interacting different culture from one's own, and to communicate in individual situation, with the recognition of "self" identity."[8] This ability, I believe, is the most difficult to acquire, but the most needed and the most effective ability in an International Organization. This six-week-long stay gave me a platform to learn and internalize this Cultural Literacy, breaking through an environment full of walls of gender, generation, and ethnic differences.

Epilogue

Dealing with Various Stakeholders

Building a network with wide variety of actors is one of the factors that is making DAWN's activities so successful. Other than the above mentioned cooperation with religious groups, the organization deals with other actors including Government agencies, other NGOs, the media, international organizations, educational institutions, and individual senators and lawyers to list a few.

DAWN is collaborating with a variety of stakeholders, but it should also be noted that the organization keeps a close dialogue with its opponents including government agencies of the Philippines, of Japan, and private recruiting agencies.

In a crusade against TIP, it takes a network to combat organized crime, and it is also necessary to maintain the communication channels with its enemies for the sake of realization of its goals. Creating a venue for discussion is the very first step. Through the PMRW Seminar, and the public hearing of the SCOWA (the Special Committee on Overseas Workers Affairs) in the House of Representatives, I felt I saw and reconfirmed the political nature of such NGO's activities and their diplomatic environment, where one actor, an NGO for instance, tries to influence and make others involved in realizing its original solution and plan of action by cooperating with different stakeholders.

Changing Features of International Law

It is often supposed that the present international law has, on its course of gradual development, come to include different actors other than the traditional states, as such actors as NGOs, TNCs, international and regional organizations increase their presence in international relations.

Whether the actor has an international legal personality, as we know of, is determined by the "capacity of action" constituted of three elements. One is contractual capacity, (the capacity to enter into treaty) the second is litigation capacity (capacity to be presented as complainant or respondent in an international tribunal) and the third is capacity to bring a lawsuit and receive such law suit concerning international misconduct (Yamamoto, 2003). It is this third legal capacity that new actors may make gains as they become increasingly concerned with transnational relations. In a world, however, where majority considers states as the only legitimate person of international norms, such capacity of non-state entities is still

limited, and thus the legal personality of NGO, unlike inter-governmental organizations, is very much limited. However they lack legal entitlement, it is undeniable fact that non-state actors are making a profound impact on in the formation, protection, and expansion of international law. International environmental law and international human rights law can be considered two examples of such endeavors and achievement of different stakeholders' rigorous advocacy and proposals including non-state entities.

Regarding NGOs, providing professional comments and suggestions at the venue of consultation and advisory meeting held by international organizations and sharing expert information NGOs possess are two examples of their contribution in relation to international law. Through my service at DAWN, I was lucky enough to see such venues where NGOs struggle to have impacts on state policies, and indirectly, on domestic and international legal norms.

Attending public hearings of the SCOWA of the House of Representatives, where DAWN was summoned as one of the leading NGOs protecting and promoting OPA's rights and welfare, was one such occasion. Keeping continuous dialogue with the Japan Embassy for adaptation of better immigration policy, with the Philippine government for demanding full implementation of its Anti-Trafficking Law (Republic Act No. 9208) and related law including Migrant Workers and Overseas Filipinos Act 1995, and attending international conference on a daily basis, are among those actions that may have potential influences on Filipino law, Japanese law, and indirectly, international law.

Regarding the recognition of changing international law, I didn't have an opportunity to get in touch with many possible viewpoints different actors might have, other than those of migrant NGOs. However, judging from the statement handed out at the conference room and the conversation on site, congressmen didn't seem to know much about know-how's. To illustrate, one of the congressman, in his argument, accused of Japanese Embassy of refusing their invitation to the public hearing, when it is clear that the embassy refused for the fear of possible "interference with domestic matters" of Philippine policies. Not knowing the basic rules of diplomacy, or the OPA accreditation system of their own country, the congressmen kept ignoring the NGO's voice they have summoned. It was obvious that their intention was to make an accomplished fact that "they have consulted NGOs."

NGOs, on the other hand, seemed to have acquired, and making efforts to acquire the latest knowledge on international and domestic norms relevant to further their activities. In PMRW Seminar for Advocacy that was held in Los Banos, I was able to catch a glimpse of their steady efforts to back up their advocacy campaign, proposals and recommendations for state's policies with such up-to-date tools. Among the programs lined up, the lecture was given to make firm understanding on the international cooperation they could seek, and legal reasoning based on the treaties such as UN Convention on the Rights of Migrants, UN Convention in the Rights of the Child, UN Convention for the Suppression of Traffic in Persons and the Exploitation of the Prostitution of Others, and Universal Declaration of Human Rights.

Service Learning as Liberation of Mentality

One does not even notice that there exists a bias of any sort and of any degree within him/herself until they actually see what truly is happening. The article from a book "Gender for idiots" and my service experience made me realize the biased perspectives, if not discriminative attitude, that existed within my sub consciousness. The article was entitled "Islam and Gender," and its summarized argument is as follows: When we think of Islamic women, many draw an image of women with black cloth and scarf covering their entire body, slaves of primitive tradition and a feudalistic system. When we do that, we're in fact, drawing a line, creating the image of "liberated US" and "backward THEM." This is the very logic used in the era of Imperialism supporting violent colonization and invasion, and in the era of "Civilization vs. Barbarism" advocated by G. W. Bush after the know 9/11 attack. In former colonial countries such as Afghanistan, women's low social status is directly considered as the indicator of backwardness of the society. In other words, the feminist movement has been unrighteously used for justifying an unjust invasion.[9]

To be honest, I, as a Japanese male who is working in an organization like DAWN, almost felt like being pointed at by an imaginary index finger indirectly, or rather the article made me realize the point it is making cannot be irrelevant for the work I was pursuing then. Then, I questioned myself, "Didn't I have the similar view point that is told in the article in being involved with the issue of TIP?" I couldn't answer this question immediately back then, but one thing I can tell after my experience was that what I really saw in the interaction with mothers and children was a glimpse of their life, filled with family ties, distress, love, hopes and dreams, disappointment, and as seen in the DAWN's research publication, *Pains and Gains*. It was their life-sized stories, which appeared to me, no different from the daily experiences we might go through. Effectiveness of neither international human rights treaties, nor the analysis on organized crime has not been the primary concern, but rather they were what came after I sank down their individual stories. Classroom education has to be founded upon this type if individual stories which we may call cases.

Much has been written, and more has been said about how developmental assistance should be processed and realized. It is often concluded and suggested that it be done in a way that is truly reflective and realizes people's needs, with the process that respects their way of life. I have familiarized myself with this textbook style of development assistance, but this was my first time to know what it really meant from my own service. One might be working with sympathy to the clients, but at the same time, one might be looking at their society with the logic of Colonialism. Visiting the country on one's own feet is the most effective solution, while conducting research is another. We can liberate ourselves from shackles and overturn the fixed mentality by familiarizing oneself with their society. Everyone of us, who goes and will go out in the world and work in such field, has to recognize this pit fall one can easily fell in. Avoiding arrogant attitudes towards differences and abandoning the values that one has been clinging to are the most precious discoveries we can ever encounter by journeys to foreign lands.

References

English sources

Asian and Pacific Migration Journal, Vol. 14, No. 1-2, (2005).

Pains and Gains: A study of Overseas Performing Artists in Japan, From Pre-departure to Reintegration, (DAWN, 2003).

D. J. Harris, *Cases and Materials on International Law*, (Sweet & Maxwell, 1998).

Japanese sources

DAWN Japan, *Pains and Gains: A study of Overseas Performing Artists in Japan*, Japanese translated edition, (Akashi Shoten, 2005).

Yoneo Ishii, *Motto Shiritai Firipin*, 2nd edition, (Kobundo, 1995).

Soji Yamamoto, *Kokusaihou*, (Yuhikaku, 2003).

Satoshi Sugita, *Dankenshugiteki Sexuality*, (Aoki Shoten, 1999).

Kyoto YWCA/ATP, *Jinshinbaibai to Ukeiretaikoku Nippon*, (Akashi Shoten, 2001).

Jo Takeda, *Life Stories of Filipina Entertainers: Support and Empowerment*, (Kwansei Gakuin University Press, 2005).

Online Sources

http://subsite.icu.ac.jp/slc/j/

http://www.ipsl.org/index.html

http://www.fiu.edu/~time4chg/Library/bigdummy.html

http://www.ohchr.org/english

http://www.dawnphil.org/

http://www.pmrw.org/

http://www.manila-shimbun.com/

http://www.tagalogonsite.org/

http://japan.usembassy.gov/t-main.html

http://www.poea.gov.ph/

http://manila.usembassy.gov/

Questions for Discussion

1. Who created DAWN and why?
2. How did Ran choose DAWN as his service-learning host agency?
3. Did Ran, as a Japanese male, face any problems during his service-learning experiences?
4. What are the similarities and differences between military sexual slavery and today's OPA issues?
5. What is DAWN's holistic approach to TIP issues? Does this work for the TIP problem?

6. Why and how did the Japanese Government revise its immigration policy for overseas performing artists? Does this work for the TIP problem?

7. If you were Ran, how would you react the statement made by the Congress members at the Special Committee on Overseas Workers Affairs?

8. What lessons did Ran learn through his service experiences?

---

[1] The POEA is a governmental agency founded in 1982 and administers Philippines' migration policy.

[2] Jo Takeda, *Life Stories of Filipina Entertainers: Support and Empowerment*, (Kwansei Gakuin University Press, 2005).

[3] *Pains and Gains: A study of Overseas Performing Artists in Japan, From Pre-departure to Reintegration*, (DAWN, 2003).

[4] DAWN, *SINAG*, (April-June 2005), p.2.

[5] DAWN/DAWN-Japan, *Pains and Gains: A study of Overseas Performing Artists in Japan*, Japanese translated edition, (Akashi Shoten, 2005).

[6] .*The Daily Manila Shimbun*, "Basserarenai bunka hihan (A critique on the Punish-free Culture)," no.4724 (Aug 8, 2005): pp1, Asian International Community Information Inc, Metro Manila.

[7] www.tagalogonsite.org

[8] Claire Kramsch, "Intercultural Literacy vs. Communicative Competence — What's the difference?" presented at Waseda University, September 17, 2005.

[9] *AERA Mook: Gender ga wakaru (Gender for Idiots)*, special number 78, (Asahi Shinbun, 2002).

This case study was written by Ran Yagasa, under the guidance of Professor Temario Rivera and Associate Professor Katsuhiko Mori for use at the College of Liberal Arts, International Christian University.

© 2006, ICU Service Learning Center

12. Muli bwanji?: My Six Weeks in the Warm Heart of Africa -Service Learning in Malawi-

Tomohiro Nagasaki

Prologue

Entering the Warm Heart of Africa?

As the airplane gradually descended for the landing approach to Lilongwe International Airport, the vast landscape of Africa started to appear through the thick clouds. The ground underneath seemed to be covered with dry red soil, which was decorated with occasional green from sparse trees. Although the flight from Tokyo to Lilongwe had been long and exhausting, I could not help my heart start pounding with excitement. I was just about to enter a world I had never experienced before.

In tourist brochures and websites, Malawi is billed as 'the warm heart of Africa,' which characterizes its people's hospitality. Located in Southern Africa, it is a landlocked country surrounded by Zambia, Mozambique and Tanzania. Malawi's prominent geographical feature is Lake Malawi, which stretches from the north to the south of the country. English and Chichewa, the native language of Chewa people, are the two official languages spoken in the country. Currently, the people of Malawi are living under harsh conditions. It is ranked as 165th among 177 countries in the UNDP Human Development Index.[1] It is undeniably one of the poorest nations in the world.

The program I participated from July through August 2005 was one between Washington State University (WSU) and ICU, and I worked as a technical assistant at Total LandCare (TLC), a Malawi registered NGO, for six weeks with Ryoko Iwamoto and two students from WSU. Organizers of this program were Dr. Trent Bunderson of WSU who is TLC's regional director, and Mr. Zwide Jere, the country director for TLC.

From July to August, Malawi enters its dry season when the pleasant, mild climate suits visitors for traveling around the country. The dry crisp air filled my lungs and the bright sunshine greeted me as I came out of the airport. Trent had been waiting for the two ICU students at the arrival gate, and we were welcomed by his smile. His Land Cruiser was parked in the corner of a parking lot, and it started to run along the highway as soon as everything was loaded into the car. The breathtaking panorama of the landscape stretched before us along the straight road, and I clung to the window as the car passed by small villages and local people. Traditional mud huts with thatched roofs were built along the highway, and there were people

[1] Human development index at <http://hdr.undp.org/statistics/data/pdf/hdr05_table_1.pdf>.

walking just beside the lane with their bundles. The world I had only imagined through photographs in *National Geographic* was actually *there.* Once again a surge of excitement ran through my body and I sat dazed in the back seat of the car.

Muli bwanji? – How are you?

Lilongwe

The capital of Malawi is vibrant with the energy of people. Vendors create their own small spaces for business along roadsides with cardboard and cloths, and they target passersby to sell their various goods from bananas to adapters for electrical equipment. The funky tune of Malawian music comes out from the speakers at CD stands, which is mixed with the loud beeps from vehicles. The dry air is filled with the blended smell of people, dust and fried meat from food stands that stimulates one's nostrils in a pleasant way. Many buildings need repair and cleaning, and some are still half constructed. Although roads are paved in the urban areas, there are occasional potholes that need maintenance. Office workers and beggars walk the same streets, and people playing *bao*, a traditional board game, are commonly seen in corners and roadsides of the city during the daytime.

Lilongwe is largely divided into two areas: City Center and Old Town. Government buildings and offices of international organizations are mostly in the City Center, which is a rather quiet and sterile part of the city. Old Town is the lively part of town where many interactions of local people take place in small shops and marketplaces. People first lived in this part of Lilongwe, and it still remains the center of everyday activities for local Malawians today.

Total LandCare

TLC has its office in Old Town. It shares the third floor of a building with another firm, and the office itself is relatively small. Established in 1999 with assistance from WSU, its various activities have focused on increasing the production and income levels of small-scale farmers through improved agricultural practices, which ultimately raise people's living standards.[2] In TLC's irrigation management programs, treadle pumps, which are used for irrigating farmland, have played an important role. For farmers lacking the necessary equipment and money, irrigating fields using watering cans still remains the main method of irrigation. It is demanding of both labor and time. By assisting farmers with irrigation tools such as treadle pumps, their burden is greatly relieved, and agricultural practices become more efficient.

[2] cited from, Profile of Total LandCare, Malawi

The center of TLC's activity is in the fields, so field agents are mostly out during the day. Trent and Zwide are directors of the office where TLC staff support their work.

Project Started

Cabbage had been in my coleslaw salad, but it had never been on my agenda. Having discussed with the office staff, we agreed to do a research project on cabbage. Cabbage is one of the most popular crops grown under irrigation and it is fairly demanded in Malawi; however, there has not been research that analyzed the profitability of the crop. Our task was to investigate the agricultural practices of cabbage growers, and to assess the current situation of cabbage in the market so that TLC can provide farmers with appropriate knowledge and inputs. Melissa Braybrooks and Ismael Cifuentes Soto, the two students from WSU, had been working on a separate project focusing on paprika. Unlike cabbage, paprika is newly introduced to Malawi as an export crop, and its potential as a new cash crop for small-scale farmers is an important issue to study. By analyzing another crop, it will give TLC a better picture of finding the right kind of crop to promote to farmers that will ultimately raise their income levels. Surely the project would allow us to have important experience. However, I still had no idea what would come out in the end.

Given that both Ryoko and I had no previous background in agronomy, and this was our first experience to conduct a research project, the first few days were very hard for us. Sitting in our small office that we shared with Melissa and Ismael, we felt helpless at first. Although I came to the office on our first day with the drive to start moving on with the project, I did not know what to begin with. The TLC staff was already occupied with their own work that I could not frequently ask for their help. Frustration started to grow inside of me, and I also became worried about our situation.

Having such feelings, I found pieces of cabbage in a plate of fried vegetables I ordered one evening. They tasted just like good quality cabbage in Japan.

The Korea Garden Lodge

The Korea Garden Lodge, the hotel we stayed in for six weeks, is located a five minute walk from the TLC office. As expressed in its name, a Korean family manages the hotel. For security reasons, the hotel is surrounded by walls that separate it from the street, and the only way to get inside is by going through the gate guarded by gatekeepers. My room was E-21. The room came to be like my home after staying there for six weeks; I felt relieved whenever I opened the door to my hotel room. The room provided me with sufficient facilities; toilet, hot shower and a television that showed NHK news programs, which shocked me at first. The environment inside the walls was comfortable, and I enjoyed sitting and relaxing beside the swimming pool of the hotel at first. However, I started to question myself as I began to

understand more about Malawi and its people. Wondering just how many Malawians had the chance to enjoy such a lifestyle, I began to feel awkward about having the advantage of staying in a comfortable place.

"Ndiri bwino, kaya inu?" – I'm fine, and you?

Creating Questionnaires

Is cabbage a profitable cash crop for farmers? – To answer this question, our project consisted of four processes: writing questionnaires, interviewing farmers and vendors, analyzing data, and report writing. Our first step was to create two types of questionnaires for cabbage growers and vendors. The primary purpose of this project was to understand the current situation of small-scale farmers in Malawi. Therefore, emphasis was put on asking farmers about their irrigation practices, cost of inputs, and the amount of labor they used for producing cabbage. Questions regarding the prices of cabbage at which they were traded in the market were asked in the questionnaire for vendors who dealt with cabbage.

Creating questionnaires is a difficult task that requires patience and careful skills. We made our best effort to draw honest answers from respondents that would illustrate the current situation in an accurate and unbiased way. We had to be careful because the wording and the order of questions that appear in questionnaires influence people's responses. Furthermore, we had to constantly modify our questions after starting actual interviews, for we found many questions that needed improvement or to be added into the questionnaires to acquire necessary information. Advice we received from Dr. Peter Wyeth of WSU was crucial to this whole process. He had come to TLC a week after our arrival, and for three weeks he had worked closely with us and helped us escape from the initial struggle.

Going out in the field

Interviewing people was the most interesting part of the whole process. By making visits to various local villages and marketplaces in Malawi, in the end we were able to interview 33 farmers and 16 vendors. Through hearing people's voice and seeing actual cabbage fields and markets, we came to understand more clearly about the problems and potential opportunities that farmers had.

I saw some marketplaces where there were literally mountains of cabbage. Cabbage heads were piled on top of each other, forming huge green heaps. Standing before the piles about the height of a human, I asked owners of these mountains whether it was possible for them to sell all cabbages before they rotted. Their responses were always positive; they told me confidently that they managed to sell the whole bunch to their customers. However, that was hard to believe.

Furthermore, I repeatedly heard complaints from farmers about the low market prices of cabbage. Almost everyone we met told us that demand for cabbage in the market was low, and farmers were not getting enough returns to sustain a living. Farmers were also having trouble managing their cabbage fields because of their lack of skills and finances. Many of them did not have an appropriate knowledge on how to treat the crops with pest infestation and diseases. Moreover, the scarcity of money made it difficult for them to obtain necessary equipment such as treadle pumps. If cabbage did not provide them with enough money, why would they keep producing? The question lingered on my mind as our work progressed. Rachel Mkandawire, a student intern to TLC from the University of Malawi who worked with us on the project gave me insight on this issue. "Farmers grow cabbage because it's something that keeps their lives going." There are limited opportunities for people in the rural area to get cash in Malawi. In such a situation, cabbage functioned as a source of cash income, which was important for their everyday lives. However, it seemed necessary for farmers to grow other cash crops as well to ensure more stable flow of cash income. The idea of depending too much on one crop makes their living more vulnerable to the change of cabbage prices in the market.

Although the mismanagement of land, such as deforestation and excessive use of chemical fertilizers is degrading the condition of the soil for farming, Malawi has generally good growing conditions. Through the course of our research, we understood that by introducing irrigation skills such as treadle pumps to farmers, it significantly reduced labor hours for farmers in their cabbage production. Furthermore, present situations of cabbage in Malawi as not being recognized as an export crop and its slow growth in demand are identified as major threats facing the industry.

"Ndiri bwino, zikomo kwambiri!" – I'm fine, thank you very much!

Experiencing the "Warm Heart" – Fulatila Village

Smiles, handshakes, and a little bit of Chichewa were all that we needed. The two days I spent with the people of Fulatila village had left me dazzled with their warmth and kindness. Almost four weeks had passed when I decided to take a small but important action. The fact that about 90% of Malawi's population lived in the rural area[3] motivated me to actually experience the life in a village, where I could have what the TLC staff called the 'true Malawian experience.' Feeling half-worried about the reaction I might get from the idea, I was relieved to hear a positive response from Zwide when I asked him to organize a short stay in a local village. He appreciated my plan, and promised me to arrange it. A week later, I was surrounded by curious people of Fulatila and was invited to their homes.

Like many villages in Malawi, Fulatila has no electricity, and getting water from

[3] CIA The World Factbook, Malawi at <http://www.cia.gov/cia/publications/factbook/geos/mi.html>.

turning a tap is unimaginable. People use lamps instead of electric lights, and they fetch water from nearby wells. They live a very simple life; a day starts with a roosters' crow, and it ends with sunset. I became friends with Sadati and Dyson. They were the two young men of my age at the village, and we spent the whole time together mostly cycling around the area. They introduced me to their home, showing me their schools, playground, church and important places where they spend their time. My short adventure in the rural village was about interacting with local people. I could never pass by a person without saying hello because everyone was curious about seeing a *mzungu* (white person, which also refers to Asians) around their places. They all welcomed me with firm handshakes, and they cheered as I introduced myself in Chichewa, that Sadati and Dyson had taught me. "Tomo, you are very friendly, my friend." Dyson said to me smilingly as we chatted, and it made me feel very happy. His words assured me that I was being accepted by the people, and I felt thankful for the warm heart I received.

My stay at Fulatila also opened my eyes to important aspects of lives in rural villages. There is a strict labor division between men and women in the society, which was a surprise for me. All the housework seemed to be done by the hands of women, and men did not take part in cooking and washing. While women were busy cooking *nsima*[4] for supper, men gathered around the village headman's house to spend their spare time chatting and drinking local beer.

The people are poor. Many villagers complained about their situation, where they lacked proper housing, medical care, food and even a soccer ball for recreation. Many children had their stomachs swollen like balloons. Surprisingly, however, the image I am left with is not that of people with hollow expressions that often appear in the media but the smiles and singing voice of the villagers. There is still much to learn about issues in Africa, and what I experienced might only be a glimpse of the reality that I begin to understand.

[4] *Nsima* is the staple food in Malawi, cooked from maize flour. The white dough-like substance is eaten with a *relish* (sauce) which can be cooked meat, fish and vegetable leaves. Very tasty when freshly prepared. Also called as *ugali* in East Africa.

Appendix

Cabbage grown in Malawi

African landscape

Interviewing a farmer

Children of Fulatila village

Questions for Discussion

1. Who created Total LandCare (TLC) and why?
2. What are problems facing cabbage producers in Malawi?
3. If you were Tomo, how would you write a questionnaire?
4. What aspects of the problem do you think are to be addressed in this questionnaire?
5. What are internal strengths and weaknesses of cabbage production in Malawi? What are external opportunities and threats? Should the farmers withdraw from producing cabbage?
6. What lessons do you think Tomo learned from his service learning?

Epilogue

The following are excerpts from our report on the project presented to Total LandCare.[5] From the six-week project on cabbage, we have identified important aspects regarding the production and marketing of cabbage in Malawi. This SWOT analysis describes the current situation of cabbage from four different perspectives: strength, weaknesses, opportunities and threats. Strength and weaknesses are internal to the industry and largely under its control. Opportunities and threats are external to the industry.

STRENGTH	**WEAKNESSES**
• Popular among farmers and vendors. Production and marketing fairly well understood by farmers and vendors. • Demand steady and reliable (but see weakness regarding supply). • Generally good growing conditions. • Good quality production.	• Market oversupplied in some areas and some seasons (but see strength regarding demand.) • Insufficient profit for farmers who do not watch costs. • Farmers in need of training regarding fertilizing rates and disease and pest control. • Some farmers are short of cash for buying necessary inputs
OPPORTUNITIES	**THREATS**
• Increase in access to treadle pumps and other extension services make cabbage production more efficient. • Balancing production with other crops make farmers' living more sustainable.	• Not recognized as an export crop. • Industry demand growing slowly.

[5] Ryoko Iwamoto, Tomohiro Nagasaki and Rachel Mkandawire, *Cabbage Production and Marketing in Malawi: Industry Analysis 2005* (Report presented to Total LandCare, 2005).

Strength

Cabbage is already commonly grown in Malawi, and farmers and vendors are familiar with the production and marketing of the crop. There is a good competition among buyers of cabbage. Demand in the market is generally steady and reliable when it is not overproduced (the study found that through November to January, during the rainy season when cabbage production decreases, its supply in the market lowers that makes the price rise).

Weaknesses

As described in this paper, market is currently oversupplied with cabbage during the dry season, which does not give farmers sufficient amount of returns. Many farmers are grossly over applying chemical fertilizers and pesticides that are unnecessary for their production because of their lack of appropriate skills and knowledge on cabbage production. This overuse of inputs makes farmers short of cash, which makes them unable to buy necessary equipment such as treadle pumps for irrigation.

Opportunities

Production of cabbage will be more efficient if farmers have access to treadle pumps and other extension services. Farmers should balance their production of cabbage with other crops such as maize and tomato to diversify their sources of income.

Threats

Currently cabbage is not recognized as an export crop, and the demand in the market is growing slowly.

I had countless experiences during the six weeks in Malawi that are all important to me. Many important events occurred while I was there, making it simply impossible for me to describe everything in this piece of writing. Our various week-end trips to Lake Malawi and safaris, the meeting with JICA officers who work for the people in Malawi, and the time we spent in our small office of TLC with my friends – all of these remain as part of my invaluable memories. I send my deepest thanks to everyone who was involved in this program for their 'warm heart' that made it possible for me to have this rewarding experience.

Zikomo kwambiri – thank you very much.

This case study was written by Tomohiro Nagasaki, under the guidance of Associate Professor Katsuhiko Mori for use at the College of Liberal Arts, International Christian University.
© 2006, ICU Service Learning Center

サービス・ラーニング研究シリーズ２

人はなぜサービスをするのか

2006 年 5 月 18 日 発行
発行　国際基督教大学 サービス・ラーニング・センター
センター長　西尾　隆
〒181-8585　東京都三鷹市大沢 3-10-2
TEL: 0422-33-3687 FAX: 0422-33-3685
URL: http://subsite.icu.ac.jp/slc/
印刷　株式会社　文伸
〒181-0012　東京都三鷹市上連雀 11-12-7